

静岡県 富士市

# 沢東A遺跡 第1次

遊技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年3月

富士市教育委員会





SB27 出土遺物集合

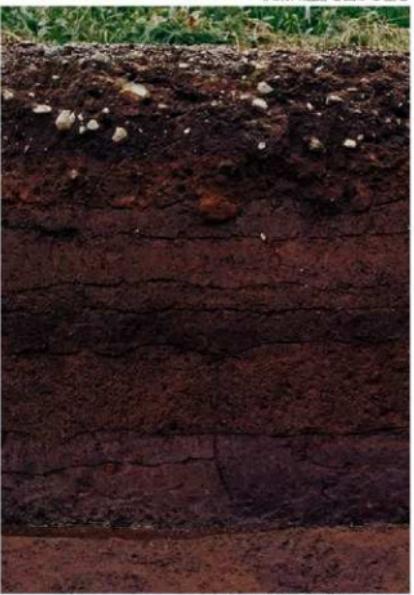
カラー図版 2



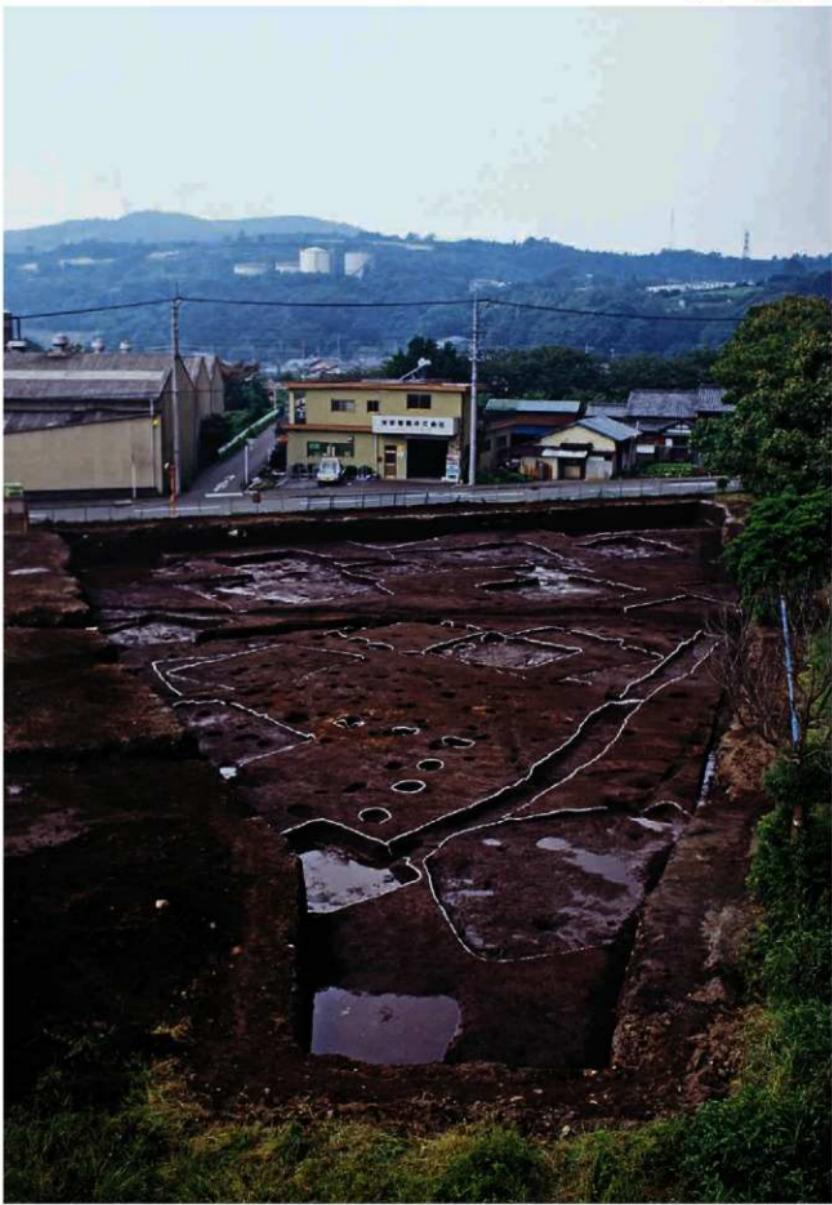
沢東A遺跡を西から望む



本調査Ⅰ地区南壁土層堆積状況



本調査Ⅱ地区南壁土層堆積状況



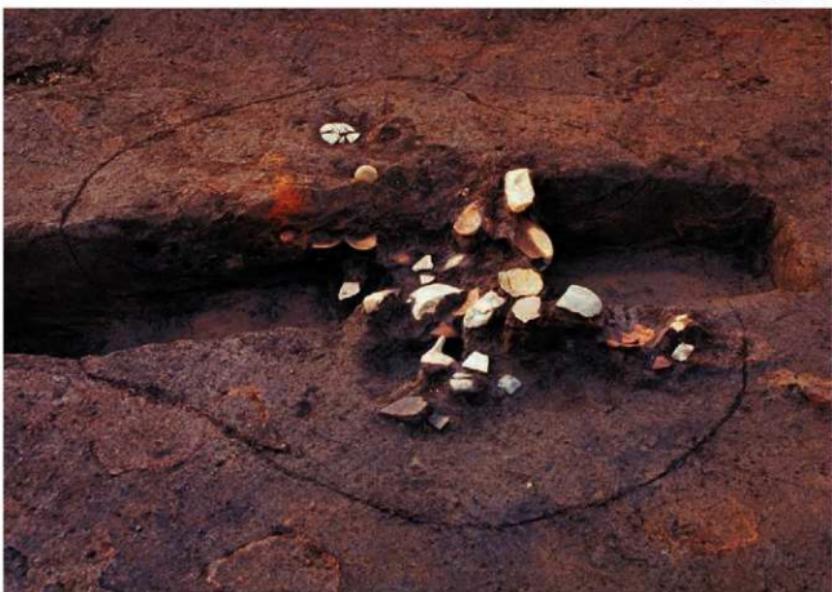
本調査地区全景(東から)



A地点出土遺物集合



試掘調査 6Tr 出土須恵器大甌 (Tr-8)



SX01



SX01 出土遺物集合



SB02 出土遺物集合



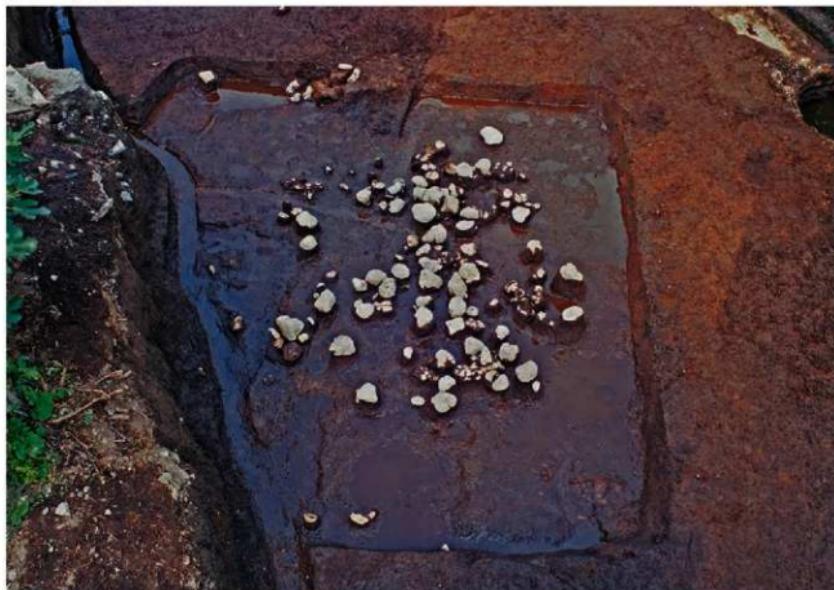
SB07 出土遺物集合



SB19



SB19 出土遺物集合



SB27



SB27 遺物出土状況

# 序

私たちのまち富士市は、世界文化遺産に登録され日本のみならず世界の宝となつた霊峰・富士山に見守られ、豊かな自然と温暖な気候に育まれて、遙かな古代から現代まで発展してまいりました。

その発展を支えたのはこの地に暮らした先人であり、先人の生活や文化の痕跡は埋蔵文化財として我々の足元に眠っています。

開発により、やむを得ず破壊されてしまう埋蔵文化財を記録保存し後世に伝えるために、発掘調査が行われます。

ここに御報告いたします沢東A遺跡第1次調査地点の発掘調査においても、古墳時代中期から平安時代初頭にかけて、潤井川の東岸に営まれた集落の姿が明らかとなりました。

平成3年度に実施された発掘調査から本報告書刊行までに20年以上の歳月がかかってしまったことは自省すべき点であります、その間に積み重ねられた発掘調査成果とそこから明らかになったことがらにより、遺跡の理解がいっそう深められていることと思います。

ひとつひとつの調査は小さくとも、その調査成果が結びついて富士市の歴史をものがたり、そしてまた日本全体の歴史を紐解く一助となっていきます。

現地調査および報告書刊行にあたり、皆さまのご指導・ご助力に深く感謝申し上げるとともに、今後とも埋蔵文化財の保存にご理解・ご協力いただけますよう、お願い申し上げます。

平成26年3月  
富士市教育委員会  
教育長 山田幸男



## 例　言

1. 本書は、静岡県富士市久沢字龍戸 113 外 8 番に所在する、沢東 A 遺跡第 1 次調査地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、金子健一郎氏による遊技場建設事業に伴い、埋蔵文化財の保護および記録保存のために、富士市教育委員会が実施した。調査体制、担当者は第 1 章第 4 節に記す。
3. 本書の執筆は若林美希（文化振興課臨時職員）（第 1 章～第 4 章、第 5 章 2 節の一部）・佐藤祐樹（文化振興課上席主事）（第 5 章 1 節、2 節の一部）が行い、編集は若林による。
4. 現地調査における記録写真は調査担当者が撮影した。  
整理作業における遺物写真は、集合写真（A 地点、SX01、SB02、SB07、SB19、SB27）を杉本和樹氏（西大寺フォト）が、それ以外を小田貴子（文化振興課臨時職員）が撮影した。  
写真図版表紙に使用した航空写真は富士市役所広報広聴課の提供による。
5. 本書で報告した調査に関する図面類・発掘記録・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。
6. 発掘調査及び本書の作成にあたり、次の方々に多大なご協力とご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。  
稻村　繁　　鈴木敏則　　馬飼野行雄　　山本恵一　　渡井一信　　渡井英啓　　（五十音順、敬称略）

## 凡　例

1. 現地調査は、磁北を基準として任意に設定した 10m 方眼グリッドを使用して行い、必要に応じて 5m ごとのグリッドも設定した。「A と B の間の 5m ライン」は「A/B」と表記する。  
また、このグリッドは世界測地系に基づく座標北より 7.4° 西に傾いている。
2. 本書で示す座標値はすべて世界測地系（平成 14 年 4 月施行）に変換したものを使用する。また、本書で示す方位は座標北、レベル高は海拔である。抄録に記した緯度・経度は A 1 グリッド北西角の数値である。
3. 拝図の縮尺は、各図に添付したスケールです。写真図版の縮尺はすべて任意である。
4. 本書における標記は次のとおりである。  

Tr : トレンチ	SB : 壘穴建物跡	SH : 挖立柱建物跡	SD : 溝状遺構	SS : 集石遺構
SE : 戸戸跡	SX : 性格不明遺構	SK : 土坑	Pit : ピット	
5. 建物跡の主軸方位は、座標北からの傾きの角度表示（例：N-15°W = 座標北から西へ 15° 傾く）。  
カマドを有する建物跡の場合は、カマドがある壁と対面する壁それぞれの中点を通る線を主軸とし、カマドがない建

物跡や残存部の少ない建物跡の場合は、残存する壁の傾きから推定した。

6. カマド袖の右・左については、カマド正面に向かった際の右・左で示した。

7. 建物跡のセクション図では、以下のように塗り分けることで、層序の違いを示した。

遺構覆土 挖方埋土 焼土 地山 粘土

8. 土器の実測図では、断面を以下のように塗り分けることで種類の違いを示した。

土師器 須恵器 陶器

9. 土器および土層などの色調は『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議局監修)に準拠した。

10. 本書で用いる土器の編年は、主として以下の文献を参考にした。

・土師器

池谷初恵 1999 「駿河伊豆型平底壺について」『東国土器研究 第5号』東国土器研究会

北川恵一 1988 「「駿東型の壺」の初現と終末について」『沼津市博物館紀要12』沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館

山本恵一 1989 「静岡県東部の古墳時代後期の土師器について」『沼津市博物館紀要13』沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館

山本恵一 1995 「静岡県下の6～7Cの土師器 一主に駿河東部・伊豆北部の現状についてー」『東国土器研究 第4号』東国土器研究会

山本恵一 1999 「駿河の古墳時代中期の土器 一東駿河を中心にしてー」『東国土器研究 第5号』東国土器研究会  
・須恵器

鈴木敏則 1998 「律令時代土器編年の概要」『駿子北遺跡 遺物編（本文）』財团法人浜松市文化協会

鈴木敏則 2004 「第5章第1節 有玉古窯出土須恵器のまとめ」『有玉古窯』浜松市教育委員会

# 目 次

カラー図版

序

例 言

凡 例

目 次

## 第1章 調査の概要

第1節 本発掘調査に至る経緯	1
第2節 本発掘調査	1
第3節 整理作業	2
第4節 調査の体制	2

## 第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 調査履歴	5
第4節 基本層序	7

## 第3章 試掘調査

第1節 試掘調査について	8
第2節 性格不明遺構	9
第3節 試掘トレンチ出土遺物	10

## 第4章 本発掘調査

第1節 本発掘調査について	12
第2節 竪穴建物跡	14
第3節 掘立柱建物跡	64
第4節 集石遺構	67
第5節 井戸跡	67
第6節 溝状遺構	69
第7節 ピット・土坑	71
第8節 包含層出土遺物	71

## 第5章 総括

第1節 潤井川流域における須恵器流入以降の土器様相	75
第2節 沢東A遺跡の成立と展開	81

付表 遺構概要一覧表

出土遺物觀察表

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第2章 道路の概要	
第1節 地理的環境	
第1図 沢東A道路の位置と周辺地図図	3
第2節 歴史的環境	
第2図 周辺道路分布図	4
第3節 調査現歴	
第3図 沢東A道路 調査履歴図	5
第4図 第3次調査地点出土 手持勾玉	6
第5図 A地点出土遺物	6
第6図 第1・4次調査地点 調査区配図図	6
第4節 基本順序	
第7図 基本順序	7
第3章 試掘調査	
第1節 試掘調査について	
第8図 試掘調査 道構・遺物出土状況図	8
第2節 性格不明遺構	
第9図 SX01	9
第10図 SX01出土遺物	9
第3節 試掘トレント出土遺物	
第11図 試掘トレント出土遺物	11
第4章 本発掘調査	
第1節 本発掘調査について	
第12図 第1次調査地点・第4次調査地点 道構分布状況図	12
第13図 第1次調査地点 検出道構全体図	13
第2節 積穴建物跡	
第14図 SB01	15
第15図 SB01カマド	16
第16図 SB01出土遺物	17
第17図 SB02	17
第18図 SB02カマド	19
第19図 SB02出土遺物	19
第20図 SB03	20
第21図 SB03カマド	20
第22図 SB04	21
第23図 SB04出土遺物	22
第24図 SB05	22
第25図 SB05カマド	23
第26図 SB05出土遺物	23
第27図 SB06	24
第28図 SB06カマド	25
第29図 SB06出土遺物	25
第30図 SB07	26
第31図 SB07カマド	27
第32図 SB07出土遺物	27
第33図 SB08	28
第34図 SB08出土遺物	28
第35図 SB09	29
第36図 SB09カマド	30
第37図 SB09出土遺物	31
第38図 SB10	32
第39図 SB10カマド	33
第40図 SB10出土遺物	33
第41図 SB11	34
第42図 SB11出土遺物	35
第43図 SB12	35
第44図 SB12出土遺物	35
第45図 SB13・SB15	36
第46図 SB13カマド	37
第47図 SB13出土遺物	39
第48図 SB14	40
第49図 SB14カマド	40
第50図 SB16	41
第51図 SB16カマド	42
第52図 SB16出土遺物	42
第53図 SB18	43
第54図 SB18カマド	44
第55図 SB18出土遺物	44
第56図 SB19	45
第57図 SB19カマド	46
第58図 SB19出土遺物	47
第59図 SB20	48
第60図 SB20カマド	49
第61図 SB20出土遺物	49
第62図 SB21	50
第63図 SB21出土遺物	51
第64図 SB22	52
第65図 SB22カマド	54
第66図 SB22出土遺物	54
第67図 SB26	55
第68図 SB26出土遺物	55
第69図 SB23	56
第70図 SB24	57
第71図 SB25出土遺物	57
第72図 SB25	58
第73図 SB27	59
第74図 SB27 遺物・礎の出土状況	60
第75図 SB27出土遺物	61
第76図 SB28	63
第77図 SB28出土遺物	63
第3節 竪立柱建物跡	
第78図 SH01	64
第79図 SH02	65
第80図 SH03	66
第4節 集石道構	
第5節 井戸跡	
第81図 SS01・SE01	68
第82図 SS01出土遺物	68
第83図 SE01出土遺物	68
第6節 溝状道構	
第84図 SD01	69
第85図 SD01出土遺物	69
第86図 SD02	70
第7節 ピット・土坑	
第87図 ピット出土遺物	71
第88図 1施設 ピット・土坑全体図	72
第8節 包含層出土遺物	
第89図 包含層出土遺物	74

## 挿表目次

第5章 総括	
第1節 潟井川流域における須恵器流入以降の土器様相	
第90図 潟井川流域の道路	75
第91図 潟井川流域の土器様相(1)	
〔I段階(TK208～TK23・TK47)〕	76
第92図 潟井川流域の土器様相(2)	
〔II-1段階(MT15)〕	77
第93図 潟井川流域の土器様相(3)	
〔II-2段階(TK10)〕	77
第94図 潟井川流域の土器様相(4)	
〔II-3段階(TK43)〕	77
第95図 潟井川流域の土器様相(5)	
〔III-1段階(TK209～飛鳥I)〕	78
第96図 潟井川流域の土器様相(6)	
〔III-1段階(TK209～飛鳥I)〕	79
第97図 潟井川流域の土器様相(7)	
〔III-2段階(飛鳥II～飛鳥III)〕	80
第2節 芝東A道路の成立と展開	
第98図 時期別道路分布変遷図	82
第99図 芝東A道路周辺の遺構・遺物出土状況	84
第100図 潟井川流域における古墳時代中期から後期の様相	85
第101図 集落形成期の須恵器と石製模造品	86
第2章 道路の概要	
第3節 調査梗概	
第1表 芝東A道路調査履歴一覧	6
第5章 総括	
第2節 芝東A道路の成立と展開	
第2表 墓穴建物跡変遷一覧	83

## カラー図版目次

カラー図版 1

SB27 出土遺物集合

カラー図版 2

沢東A道路を西から望む

本調査I地区南壁上層堆積状況

本調査II地区南壁上層堆積状況

カラー図版 3

本調査I地区全景(東から)

カラー図版 4

A地点出土遺物集合

試掘調査6Tr出土須恵器大甕(Tr-8)

カラー図版 5

SX01

SX01 出土遺物集合

カラー図版 6

SB02 出土遺物集合

SB07 出土遺物集合

カラー図版 7

SB19

SB19 出土遺物集合

カラー図版 8

SB27

SB27 遺物出土状況

## 写真図版目次

PL.1

1. 沢東A道路を西から望む

2. 試掘調査2Tr-SX01

3. 試掘調査3Tr堆積検出状況

4. 試掘調査1Tr-SB3 遺物出土状況(Tr-7)

5. 試掘調査6Tr 遺物出土状況(Tr-8)

PL.2

1. SB01

2. SB01 カマド

3. SB01 遺物出土状況

4. SB02

5. SB02 カマド

6. SB02 遺物出土状況

7. SB03

8. SB03 カマド

PL.3

1. SB05

2. SB05 カマド

3. SB04

4. SB06

5. SB06 カマド

PL.4

1. SB07・SE01

2. SB07 カマド

3. SB07 遺物出土状況(SB07-4)

4. SB10

5. SB10 カマド

PL.5

1. SB09

2. SB09 カマド

3. SB09 遺物出土状況(SB09-10, 14)

4. SB09 遺物出土状況(SB09-17)

5. SB09 遺物出土状況(SB09-18)

6. SB09 遺物出土状況(SB09-16)

7. SB11

8. SB11 遺物出土状況(SB11-2)

PL.6

1. SB08

2. SB12・SB16

3. SB16

4. SB16 カマド

5. SB13

6. SB13 カマド

7. SB13 遺物出土状況(SB13-29)

PL.7

1. SB15

2. SB18

3. SB18 カマド

4. SB20

5. SB20 カマド

6. SB20 遺物出土状況(SB20-3, 5)

7. SB21

8. SB21 内遺物出土上塙(SB21-3)

PL.8

1. SB19

2. SB19 カマド

3. SB19 遺物出土状況(SB19-2, 11)

4. SB19 遺物出土状況(SB19-4)

5. SB19 遺物出土状況(SB19-1, 9)

PL.9

1. SB14

2. SB22

3. SB19 遺物出土状況(SB19-2, 11)

4. SB19 遺物出土状況(SB19-4)

5. SB25

PL.10

1. SB27

2. SB27 遺物出土状況①

PL.11

1. SB27 遺物出土状況②

2. SB27 遺物出土状況③

3. SB27 遺物出土状況④

4. SB27 遺物出土状況⑤

5. SB27 遺物出土状況⑥

6. SB27 遺物出土状況⑦

7. SB27 遺物出土状況⑧

8. SB27 遺物出土状況⑨

PL.12

1. SB23

2. SB24

3. SB28

4. SB28 遺物出土状況(SB28-2)

5. SS01

6. SS01 南北セクション

7. SD01

PL.13

1. SH01

2. SH02

3. SH03

4. PH007 机残存状況

5. 本調査I地区ピット検出全量(南東から)

PL.14

SB27 出土遺物集合

PL.15

A地点。SX01 出土遺物

PL.16

SX01、試掘トレンチ出土遺物

PL.17

試掘トレンチ出土遺物

PL.18

SB01 出土遺物

PL.19

SB02 出土遺物

PL.20

SB04、SB05、SB06、SB07、SB08 出土遺物

PL.21

SB07、SB08 出土遺物

PL.22

SB09、SB10 出土遺物

PL.23

SB11、SB12、SB16 出土遺物

PL.24

SB13 出土遺物

PL.25

SB13、SB18 出土遺物

PL.26

SB19 出土遺物

PL.27

SB20、SB21 出土遺物

PL.28

SB21、SB22、SB25、SB26、SB28 出土遺物

PL.29

SB27 出土遺物

PL.30

SB27 出土遺物

PL.31

SB27 出土遺物

PL.32

SE01、SS01、SD01、ピット、包含層出土遺物

PL.33

包含層出土遺物

PL.34

包含層出土遺物

# 第1章 調査の概要

## 第1節 本発掘調査にいたる経緯

平成3年、金子健一郎氏（以下、事業者）は富士市久沢字瀧戸113外8筆（6,578.70m<sup>2</sup>）において遊技場建設事業を計画した。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「沢東A遺跡」の範囲内であり、昭和63年、貨倉庫新築造成工事計画（その後工事計画は中断）に伴って富士市教育委員会（以下、市教委）が試掘調査（昭和63年12月5日～12月20日）を実施した範囲の西半分にあたる。この試掘調査では、古墳時代後期の堅穴建物跡や祭祀土坑などの遺構と古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器・須恵器などの遺物が出土している。また、試掘調査範囲の東半分については、平成5年に本発掘調査（第4次調査）が

行われている（富士市教育委員会1997）。

平成3年2月25日、事業者から埋蔵文化財発掘の届出があり、市教委はこれを静岡県教育委員会（以下、県教委）に進達した（平成3年3月7日付、富教文体第260号）。昭和63年の試掘調査の結果を踏まえ、県教委からは工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があり（平成3年3月16日付、教文3-130号）、市教委はこれを事業者に伝達した（平成3年4月2日付、富教文第2号）。

### 参考文献

富士市教育委員会1997『沢東A遺跡・第V地区』

## 第2節 本発掘調査

市教委と事業者とで協議した結果、有限会社天特興産代表取締役 金子武正氏（以下、天特興産）が発掘調査に関わる業務を事業者から受任し、富士市に発掘調査を依頼することとなり、市教委は文化財保護法第98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を県教委ならびに文化庁長官に提出した（平成3年5月10日付、富教文第34号）。

平成3年5月13日、天特興産と富士市長 鈴木清見との間で「発掘調査委託契約書」ならびに「沢東A遺跡埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」を締結し、開発地の内、店舗建物や調整池などが建設される部分（1,730m<sup>2</sup>）について、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は富士市教育委員会教育長 山本 厚のもと、文化振興課職員が担当し、平成3年5月20日から9月30日にかけて行われた。調査対象範囲に2区画の本調査区を設け、重機により表土を掘削し遺構確認面を検出した後、磁北に則った10m方眼のグリッドを基準

として、人力により遺構・遺物の検出・記録を行った。

調査の結果、主として古墳時代後期から奈良時代の堅穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状遺構などの遺構と、コンテナ20箱分の土師器・須恵器などの遺物が出土した。

文化財保護法第65条ならびに遺失物法第1条に基づき、「埋蔵文化財発見届」（平成3年10月2日付、富教文第117号）を富士警察署長に、「埋蔵文化財保管証」（平成3年10月2日付、富教文第118号）を県教委に提出した。その後、県教委教育長により埋蔵文化財の認定がなされている（平成4年1月16日付、教文2-59号）。

本発掘調査に引き続き、発掘調査概報の刊行に向けた整理作業を行い、平成4年3月13日にこれを刊行した（富士市教育委員会1992）。その後、「沢東A遺跡埋蔵文化財発掘調査受託業務の完了報告ならびに受託費用の精算について」（平成4年3月30日付、富教文第225号）を天特興産に提出したことにより、沢東A遺跡埋蔵文化財発掘調査受託業務は完了した。

## 第3節 整理作業

発掘調査報告書（本書）刊行のための整理作業は、平成24年7月から開始した。概報で報告したものと含めて、出土遺物の接合再検討・復元・図化・写真撮影、発掘記録図面類・観察表等の整理、遺構図・遺物図のトレイス作業、報告の執筆などを行い、これらを編集して報告書を作成した。

平成26年3月31日、沢東A遺跡第1次調査地点埋蔵文化財発掘調査に関わる一連の作業は、本書の刊行をもって終了した。

本書にて報告する図面・発掘記録・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会にて保管している。

## 第4節 調査の体制

本書で報告する一連の調査は、以下の体制で実施した。

### 試掘調査（昭和63年度）

#### 〔事務局〕

富士市教育委員会 教育長	山本 厚
教育次長	伊藤 錠英
文化体育課 課長	小野 塤
課長補佐	渡邊 誠
係長	杉本 篤

#### 〔調査担当〕

文化体育課 主事	渡井 義彦
	久松 義昭

### 本発掘調査（平成3年度）

#### 〔事務局〕

富士市教育委員会 教育長	山本 厚
教育次長	伊藤 錠英
文化振興課 課長	小長谷秀夫
課長補佐	小出 禮節
係長	佐野 誠一

#### 〔調査担当〕

文化振興課 指導主事	中尾 欣司
主事	久松 義昭
主事	前田 勝己
主事補	影山 英之

### 整理作業（平成24・25年度）

#### 〔事務局〕

富士市教育委員会 教育長	山田 幸男
教育次長	鈴木 清二
文化振興課 課長	渡井 義彦
主幹	前田 勝己

#### 〔整理作業担当〕

文化振興課 上席主事	佐藤 祐樹
臨時職員	若林 美希

#### 〔整理作業補佐〕

文化振興課 臨時職員	船葉万智子
	井上 尚子
	小田 貴子
	金刺 才己 (H24)
	三輪真佐子 (H25)
	加藤 咲子 (H24)
	金田 純子 (H25)
	石川都久子
	望月 真弓
	渡辺美規子

## 第2章 遺跡の概要

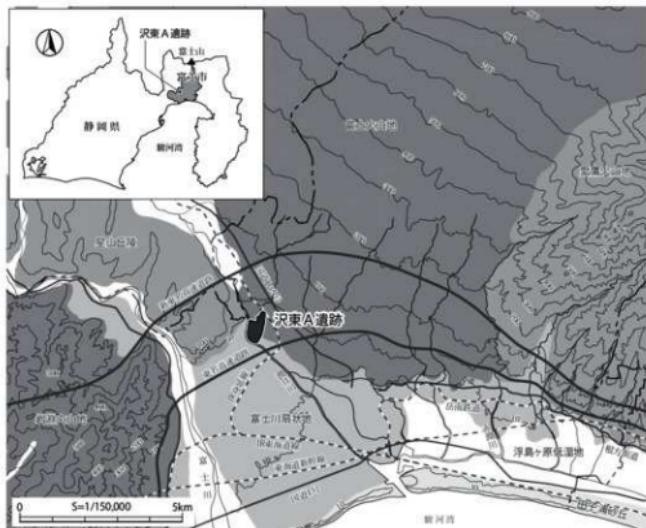
### 第1節 地理的環境

富士市は静岡県の東部に位置し、その地理的環境を概観すると、駿河湾を南に臨み、北には富士山がそびえ、山裾を南西に広げている。西には岩本山を有する星山丘陵が、東には死火山である愛鷹山が存在する。西方には北から流下した富士川が駿河湾に注ぎ、富士山西麓から流れる潤井川、愛鷹山に源流をもつ須津川や赤淵川など、多数の河川が流れている（第1図）。

こうした環境にある富士市域の地形は、富士山や愛鷹山の新旧火山活動により形成された丘陵地、富士川や潤井川が運搬した土砂の堆積により形成された沖積平野、河川の放出砂礫が駿河湾の沿岸流や波浪によって運搬され形成された田子浦砂丘、砂丘の内側につくられた湖沼に沖積層が堆積して発達した浮島ヶ原低湿地など、変化に富んだ様相をみせている。

地形の基盤のひとつである富士山の噴火活動は、小御岳火山の噴火（數十万年前）に始まり、古富士火山（8万年～1万6千年前）、新富士火山（1万4千年前～現在）と大きく3期に分けられる。不透水性の古富士泥流の上に、透水性の新富士火山溶岩流が広がるため、新富士火山溶岩流の末端には数多くの湧水地が存在する。また、浮島ヶ原低湿地は稻作の適地として、古代より、肥沃な生産基盤であったとみられる。

本書で報告する沢東A遺跡は、古墳時代から律令期の集落跡である。潤井川と凡夫川が合流する地点の東岸、大瀬戸扇状地西側先端部の緩やかな丘陵上の標高20～40mに位置する。潤井川が氾濫すれば、その影響が及んだであろうが、そこに集落を営み続ける意味がある土地であったと考えられる。



第1図 沢東A遺跡の位置と周辺地形図

## 第2節 歴史的環境

沢東A遺跡は、駿河湾から富士宮市域へと通じる水路である潤井川と、東西を結ぶ陸路が交差する場所に立地する、古墳時代中期から律令期の集落跡である。沢東A遺跡の西側、潤井川を挟んだ星山丘陵の南側斜面に立地する高徳坊遺跡では、弥生時代後期の土器と竪穴建物跡8軒が検出されている。この土器には、遠江（静岡県西部）の影響が認められ、地域間交渉が活発になってきたことを示している（富士市教育委員会2012）。また、古墳時代中期に位置づけられる可能性がある須恵器片が出土しており、対岸に立地する沢東A遺跡との関わりも想定され得る。

沢東B遺跡は沢東A遺跡の東に位置し、過去の調査で奈良時代の竪穴建物跡4軒、掘立柱建物跡4棟が調査されている（富士市教育委員会1998）。沢東A遺跡でも北寄りでは主として奈良時代の集落跡が検出されており（第2次調査地点）、古墳時代に比べ奈良時代には北東方向へ集落域が拡大したと捉えられる。

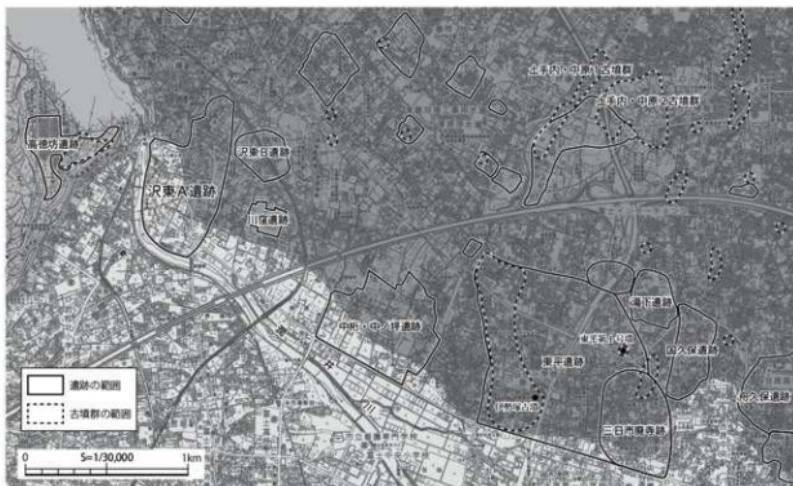
沢東A遺跡の東、沢東B遺跡の南に位置する川窪遺跡では、古墳時代前期（大晦III式期）に位置づけられる遺物と、方形周溝墓の可能性がある溝状構が出土してい

る（富士市教育委員会2008）。

沢東A遺跡と同様に潤井川東岸の遺跡である中柄・中ノ坪遺跡では、古墳時代中期から平安時代の集落跡が確認されている（富士市教育委員会2004・2007）。沢東A遺跡とは、立地、時期が共通している。また、中柄・中ノ坪遺跡では8世紀代が空白域となっており、8～9世紀に隆盛する計画的集落と見られ古代富士宮郷の中核とされる東平遺跡と、その前後に営まれる自然発生的集落としての中柄・中ノ坪遺跡という関係性で捉えられている。

### 参考文献

- 富士市教育委員会 1998『沢東B遺跡』
- 富士市教育委員会 2004『中柄遺跡』
- 富士市教育委員会 2007『中柄・中ノ坪遺跡 第2地区』
- 富士市教育委員会 2008『平成17・18年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2012『高徳坊遺跡』『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市埋蔵文化財調査報告 第51集

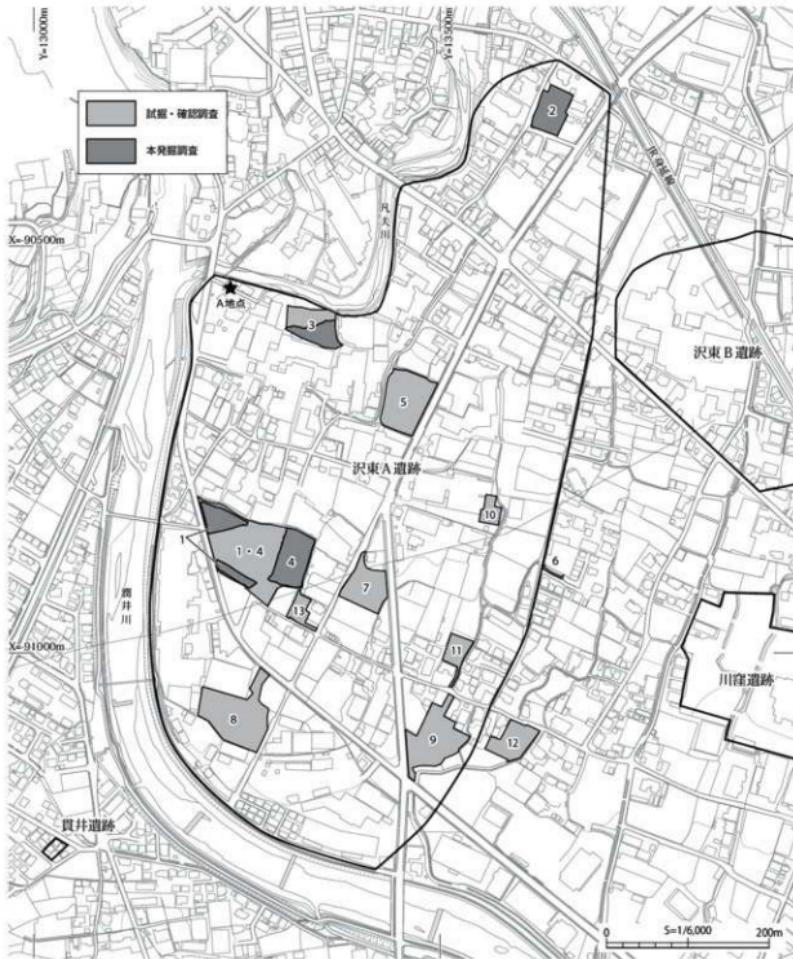


第2回 周辺遺跡分布図

### 第3節 調査履歴

沢東A遺跡は、昭和46年に行われた採土工事の際に、カマド跡とみられる焼土塊と数点の甕、古墳時代後期初頭に位置づけられる土器群（第5図）が出土した（A地点）ことにより発見された遺跡である。

その後、これまでに隣接地を含め、12回の試掘・確認調査と、4回の本発掘調査が行われ（平成26年3月現在）、古墳時代中期から奈良時代の集落跡が確認されている（第3図、第1表）。



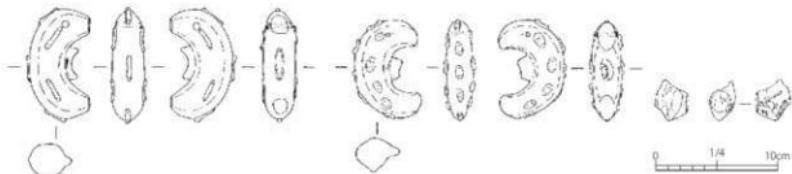
第3図 沢東A遺跡 調査履歴図

第1表 沢東A遺跡調査履歴一覧

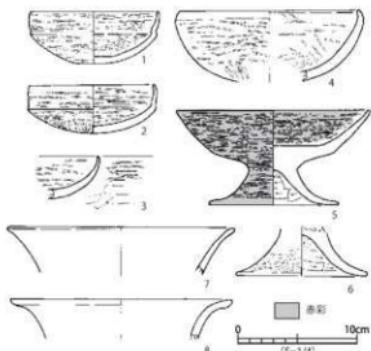
調査地点名	(地区名)	調査年度	調査種類	調査の契機	調査の期間	主な時代	主な構造	主な遺物	報告書
1次調査地点 4次調査地点		S03	試掘	貨食庫建設	S03.12.5 ~ 12.20	古墳後期～奈良	竪穴建物跡 32軒 溝状遺構 1基 溝状遺構 8条 土坑 20基	土師器・須恵器	本古
1次調査地点 (I・II地区)	H03	本発掘	造技場建設		H3.5.20 ~ 9.30	古墳後期～奈良	竪穴建物跡 27軒 溝状遺構 2条 獨立柱建物跡 3棟 井戸跡・集石遺構	土師器・須恵器・陶器 ヘマタイト入り小器	A 本古
2次調査地点 (III地区)	H04 H05 H06	試掘 本発掘 試掘	宅地造成 宅地造成 資材貯蔵造成		H5.2.10 ~ 2.19 H5.4.5 ~ 6.14 H6.4.20 ~ 5.12	奈良 中世・近世	竪穴建物跡 9軒 独立柱建物跡 1棟 竪穴建物跡 19軒 独立柱建物跡 1棟 祭跡跡・配石遺構	土師器・須恵器 かわづけ・鉄貨	B
3次調査地点 (IV地区)	H06	本発掘	資材貯蔵造成		H6.9.16 ~ H7.1.7	古墳	竪穴建物跡 44軒 独立柱建物跡 6棟	土師器・須恵器 子持玉・石製模造品 ガラス小玉・鶴形 土質鉢	C
4次調査地点 (V地区)	H07	本発掘	倉庫建設		H7.4.18 ~ 12.17	古墳中期～末期	竪穴建物跡 44軒 独立柱建物跡 6棟	土師器・須恵器・磁石	D
5次調査地点	H12	試掘	工場建設		H12.4.12 ~ 4.21	古墳初期～平安	溝状遺構	土師器・須恵器	E
6次調査地点 (隣接地)	H12	試掘	宅地造成		H13.2.8	古墳前期	なし	土師器	E
7次調査地点	H15	試掘	資材貯蔵建設		H16.3.6 ~ 3.15	古墳	竪穴建物跡?	土師器・須恵器	F
8次調査地点	H16	試掘	工場建設		H16.8.6 ~ 8.18	なし	なし		G
9次調査地点	H18	試掘	工場建設		H18.12.21 ~ 12.22	なし	なし		H
10次調査地点	H19	試掘	仓库建設		H19.10.25	なし	なし		F
11次調査地点	H19	試掘	共同住宅建設		H20.3.17	なし	なし		F
12次調査地点 (包囲地外)	H21	試掘	集合住宅建設		H21.11.19	中世・近世	水田跡	陶器	I
13次調査地点	H24	試掘	集合住宅建設		H24.8.6 ~ 8.9	古墳	竪穴建物跡	土師器・須恵器	

報告書（未記載、発行はすべて富士市教育委員会による。）

- A『沢東A遺跡 球磨文化財発掘調査報告』(1992)  
 B『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集 沢東A遺跡第2次調査』(1995)  
 C『沢東A遺跡 畠上(不燃建物跡)発掘調査』(1995)  
 D『沢東A遺跡 第V地区 第4次調査発掘調査報告書』(1997)
- E『富士市内遺跡発掘調査報告書』(平成11・12年度) (2012)  
 F『平成15・19年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』(2009)  
 G『平成16年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』(2006) ⑩ 地区として報告。  
 H『平成17・18年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』(2008)  
 I『平成21年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』(2011)



第4図 第3次調査地点出土 子持勾玉



第5図 A地点出土遺物



第6図 第1・4次調査地点 調査区配置図

これまでの調査成果を概観すると、古墳時代の集落跡は第1次・第3次・第4次・第13次調査地点で、奈良時代の集落跡は第1次・第2次調査地点で確認されている。第7次調査地点の南西隅でも堅穴建物跡と見られる遺構が検出されているが、それより南および東に位置する第6次・第8～12次調査地点では遺構は確認されていない。

第5次調査地点では性格不明の溝状遺構とともに、

古墳時代前期のS字状口縁台付甕や壺が出土している。

また、第3次調査地点では、子持勾玉（第4図）や石製模造品などの祭祀遺物を伴う祭祀遺構（配石遺構・祭祀遺物埋納土坑）が発見されている。本書で報告する試掘調査のSX01や、本調査のSS01・SE01も、明らかな祭祀遺物は出土していないものの、祭祀に関係する可能性も考えられる遺構であり、水辺の集落が行う祭祀の姿も想定される。

## 第4節 基本層序

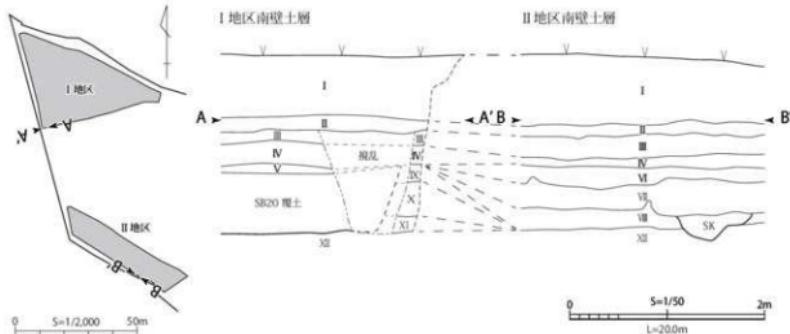
本書で報告する沢東A遺跡第1次調査地点（I地区・II地区）の基本層序を第7図に示す。

I地区とII地区では土層の堆積状況がやや異なる。

本地点は、新富士火山の活動に起因する曾比奈溶岩流Iの上に堆積した大畠扇状地堆植物層（XII層）を基盤としている。河川の氾濫を要因とする堆積層（IV-V層）

も認められ、富士川や潤井川などの氾濫の被害が及んでいた様子が確認される。

また、調査時には台風に伴う大雨により調査区が冠水する事態も生じており、遺構検出面での透水性の低さが実証されている。



色調	しまり	粘性	大潤川Ⅶ	大沢川Ⅶ	砂	地山削剥面	灰白色粒子	備考
I	褐色土							底土
II	黄灰色土 (2.5Y4/1)	強	強		少量			水田耕作土
III	褐灰色土 (1.0YR5/1)	強	強		少量			旧水田耕作土
IV	黄灰色土 (2.5Y4/1)	強	弱	少量	多量 多量 (軽石)			河川の氾濫による堆積
V	オリーブ黑色砂質土 (3Y3/1)	強	弱		ごく少量			河川の氾濫による堆積。記の堆積がラミナで入る。
VI	黒褐色土 (7.5YR3/1)	強	強	少量	微量 少量 少量 (軽石)			中近世含鉱層か
VII	灰黃褐色土 (1.0YR4/2)	強	弱	少量	少量 多量 (軽石)			古墳時代後期含鉱層
VIII	黒色土 (1.0YR2/1)	強	弱	少量	少量 少量 少量	微量		II地区での遺構検出面
IX	にぶ~黄褐色土 (1.0YR5/4)	強	やや強		ごく少量 多量	微量		1地区での遺構検出面
X	黒褐色土 (1.0YR3/1)	強	やや強		少量 少量	微量		黒ボク土壤化している。
XI	黒色土 (1.0YR2/1)	強	やや強		少量 少量 多量 少量			黒ボク土壤化している。
XII	暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)	ごく強	弱		ごく少量 少量			大畠扇状地堆植物層

第7図 基本層序

# 第3章 試掘調査

## 第1節 試掘調査について

試掘調査では、南北方向のトレンチを対象地の東寄りに3本（1・2・3トレンチ）、西寄りに2本（4・5トレンチ）、東西方向には断続的に1本のトレンチ（6トレンチ）を設定した。土層の堆積状況に合わせて重機により段階的に掘り下げた後、人力により精査し、遺構や遺物の検出を行った。また、必要に応じてサブトレン

チを設定し、遺構プランや切り合い関係の確認を行った。

竪穴建物跡は32軒検出され、1・2・3トレンチの南寄りに集中していた。これらの竪穴建物跡については、平成7年度に本発掘調査が実施されている（第4次調査地点、V地区）。2トレンチの南寄りでは、覆土内に多量の土器や川原石、粘土塊を含むSX01（次節にて報



第8図 試掘調査 遺構・遺物出土状況図

告)が検出された。その他に、1・2・3トレンチでは溝状遺構8条、中・近世土坑20基が検出されている。

対象地の西寄りでは、5トレンチで竪穴建物跡の可能性がある方形プランを1箇所、溝状遺構を1条検出した

のみで、4・6トレンチでは遺構は確認されなかった。しかし、遺物の出土量は多く、6トレンチでは須恵器大甌の破片が集中して出土(第11図-8)するなど、遺構が存在する可能性は皆無ではないと考えられた。

## 第2節 性格不明遺構

SX01

遺構(第9図)

位置: 試掘調査2トレンチ

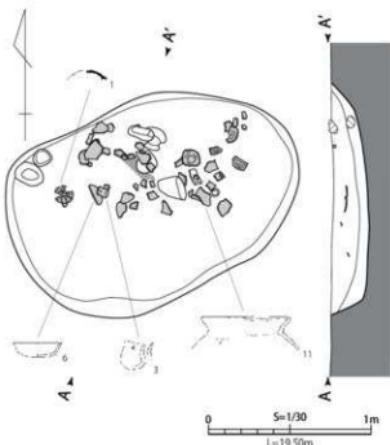
重複関係:(古) 試掘第20号住居址→SX01(新)

残存状況: 長軸182cm、短軸121cm、深さ26cmの梢円形の皿状を呈する。

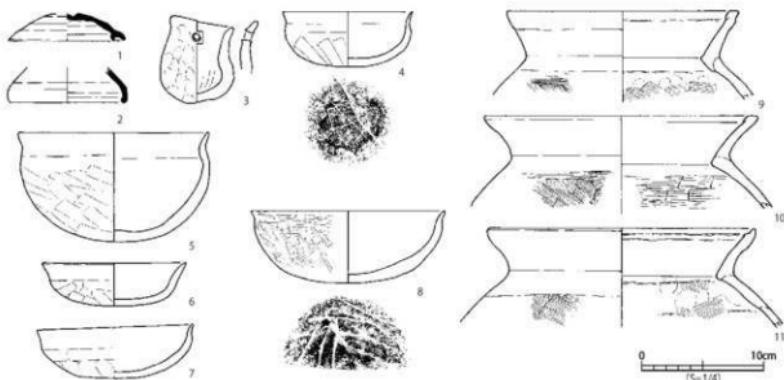
覆土: 詳細は不明であるが、2層に分層でき、レンズ状に堆積していた。覆土中から土器・須恵器が焼土や粘土塊、川原石とともに出土している。

出土遺物(第10図)

11点図示した。1の須恵器蓋は、摘みが剥離しているが、返りのある摘み蓋である。天井径は9.6cmで、天井部は回転ヘラケヅリしている。2は半球形を呈する須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境には棱を有し、口縁部はやや内湾し端部を丸く仕上げている。器径は推定で9.1cmを測る。1・2は遠江編年のIV期(7世紀中葉~



第9図 SX01



第10図 SX01 出土遺物

後葉)に位置づけられる。

3は土師器の小壺である。体部は筒状で、頸部がややくびれる。丸底であるが自立する。頸部には、対面する位置に土器焼成前に穿たれた2ヶ所の孔があり、一方は外から内へ、もう一方は内から外へ穿孔されているようにも見える。また、上から見ると口縁が梢円形となって、その短軸方向に孔が穿たれていることから、棒状の工具を一気に突き通してふたつの孔を穿ったのではないかと推測される。

4～8は土師器の壺、あるいは瓶である。4・7は半球形の体部と木葉痕の残るやや平らな底部で、体部と口縁部の境に棱をもち、口縁部が先細りになり外反する。4は体部外面をヘラケズリし、7はヘラナデで整えている。5は木葉痕がわずかに残る丸底に、半球形の深い体部と外反する口縁部をもつ瓶である。口縁部と体部の境の棱は甘い。6は須恵器環蓋模倣の壺とみられるが、体部と口縁部の境の棱は不明瞭で下方に位置し、平底気味である。8は半球形の体部に外反する短い口縁部がつく瓶である。底部はやや平底気味で木葉痕が残り、口縁部と体部の境の棱は不明瞭である。体部外面にはヘラミガ

キが施される。4～8は7世紀代に位置づけられる。

9～11は頸部がくの字状に屈曲し肩が張る、球胴を呈するとみられる駿東型の壺である。いずれも、肩部の内外面にハケ目調整が施され、口縁部は内面に粘土を折り返したように肥厚させている。11では端部を段状につくっている。

#### 所見

出土した遺物はおおむね7世紀代に位置づけられるようである。また、試掘調査の第20号住居址と重なっており、住居址が廃絶し埋没してから掘り込まれた様子が確認されている。ただし、第4次調査では、この住居址に合致する建物跡が検出されていないため、詳細な時期は特定できない。

本遺構は、第10図-3のような特異な形の小壺が出土していることから、発掘調査概報(富士市教育委員会1992)では1号祭祀土坑として報告されているが本書では、性格不明遺構として報告することとした。

#### 参考文献

富士市教育委員会 1992「沢東A道路 埋蔵文化財発掘調査概報」

## 第3節 試掘トレンチ出土遺物

試掘調査ではコンテナ15箱分の遺物が出土した。

今回は4・5・6トレンチ出土遺物を中心に整理作業を行い、1・2・3トレンチ出土の未報告遺物を含む8点をここで報告する(第11図)。

1は4トレンチで出土した須恵器のハソウである。口縁部の長さは不明だが、頸部は太く、体部最大径が肩部にある。肩部には細い突帯が巡り、その下に文様帯が巡る。注口は孔のみで、文様帯の中位付近に位置する。頸部には波状文が施されていることが確認できる。このハソウは遠江I期後葉～II期(6世紀初頭～前葉)に位置づけられる。2は5トレンチで出土した須恵器高环の壺部である。体部は半球形を呈し、底部はヘラケズリ調整されている。体部と口縁部の境には段状の棱が2条巡り、口縁部は外へ開いて端部を丸く仕上げている。棱の下には波状文が施されているが、やや粗雑で薄い。遠江III期後葉(6世紀末葉)に位置づけられる。

3は1トレンチの溝状遺構覆土から出土した、平底で、

やや平たい球形を呈する土師器壺の胴部である。底部・胴部とも外面はナデ、あるいはミガキによりなめらかに整えられている。4は1トレンチから出土した土師器の直口壺である。底部は失われているが、胴部はやや平たい球形を呈し、口縁部は外へ開く。器面が荒れているが、外面はヘラナデ調整されているようである。

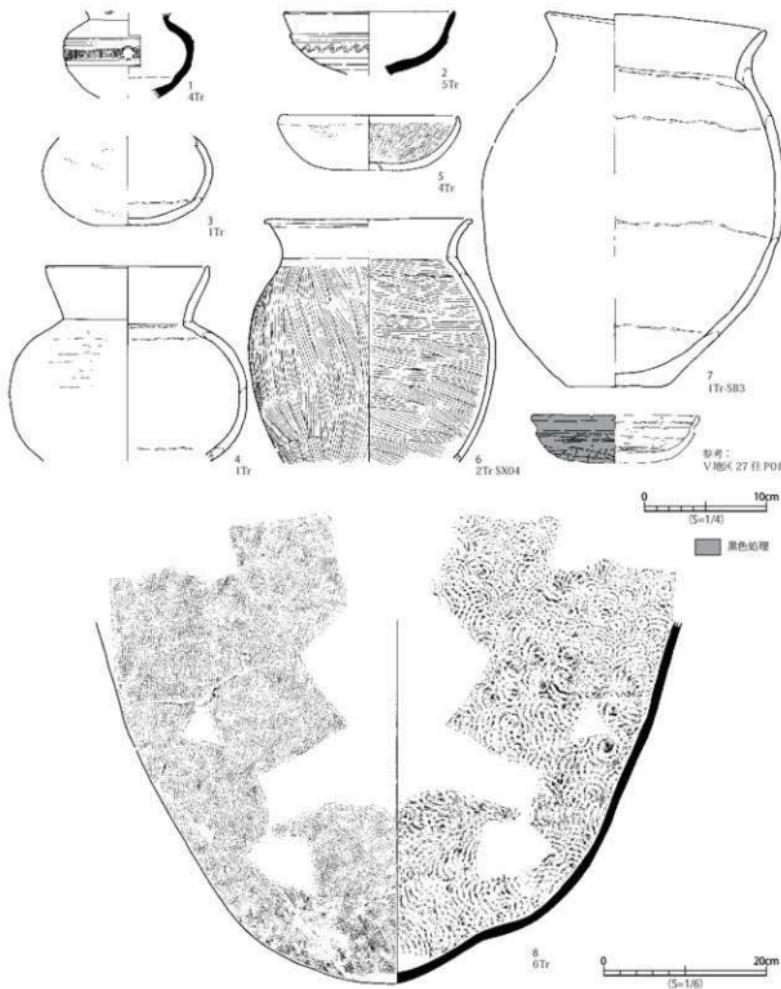
5は4トレンチから出土した土師器壺である。体部は平底気味の半球形を呈し、口縁部が内湾する。外面は摩滅が激しく不明瞭であるが、内外面ともヘラミガキが施されているようである。

6の土師器壺は2トレンチ(SX04)から出土した。肩が張らない長胴で、口縁部は外反し、端部外面を沈線状にヘラナデすることで端部を丸く成形している。外面に粗いハケ目調整を施し、口縁部はハケ目をナデ消している。7の土師器壺は1トレンチの「3号住居址カマド」から出土したもので、長胴で口縁部が外反し、内外面ともナデ調整されている。この遺構は本調査(第4次調査)

で調査された第27号住居跡と同一遺構と考えられ、本調査ではカマドは検出されなかったが、カマドが位置したと推定される場所と甕の出土位置は一致する。第27号住居跡では土脚器環1点が報告されており、7世紀前

半に位置づけられている。

8は6トレンチで出土した須恵器大甕の胸部である。底部は丸く、外面には格子目タタキ、内面には同心円状の当て具の痕跡が残る。



第11図 試掘トレンチ出土遺物

# 第4章 本発掘調査

## 第1節 本発掘調査について

平成3年度に実施した本発掘調査（第1次調査）の対象地は、昭和63年度試掘調査対象地の西半部分である。試掘調査では明確な遺構はほとんど検出されなかつたが、遺物の出土量は多く、遺構が存在する可能性が残る範囲であった。対象地のうち、店舗および事務所建物の建設が予定される北西部（I地区）と、調整池などの関連施設の建設が予定される南部（II地区）を本調査区とし、磁北を基準とした10m方眼グリッドを設定

して調査を行った。重機により遺構確認面まで掘削した後、人力により遺構および遺物の検出、記録を行った。

その結果、遺構は竪穴建物跡27軒（SB01～28、ただしSB17は欠番とする。）、掘立柱建物跡3棟（SH01～03）、集石遺構1基（SS01）、井戸跡1基（SE01）、溝状遺構3条（SD01～03）、ピット201基、土坑13基を検出し、遺物はコンテナ20箱分の土師器・須恵器などが出土した。



第12図 第1次調査地点・第4次調査地点 遺構分布状況図



第13図 第1次調査地点 検出遺構全体図

SB01

遺構（第14・15図）

位置：A1 グリッド（1地区）

重複関係：なし

主軸方位：N-16.75°-W

残存状況：カマド右袖部分を土坑（SK23）によって欠損しているが、全体としては良好に残存している。主軸（南北）幅 4.40m、直交（東西）幅 4.96m、検出面からの深さは 30cm を測り、平面形は東西にやや長い方形を呈する。

覆土：大體スコリアを含む黒褐色土の自然堆積層。

壁溝：カマド付近や東壁の一部が切れるが、幅 14 ~ 22cm、深さ 10cm ほどではほぼ全周する。

柱穴：4 基検出された。柱穴径は 44 ~ 58cm、深さは 28 ~ 47cm を測る。

その他の遺構：検出されなかった。

床：掘り方に黒褐色土を入れ、上部に黄色砂を敷き固くしめて床面としている。

カマド：北壁の中央に位置する。右袖は土坑（SK23）により欠損するが、左袖と煙道を検出した。左袖は、削り出した地山を基礎にして、暗褐色土・黒色土で形成し、黄灰色粘土で表面を覆っている。その後、掘り方に土を入れて燃焼室としている。

煙道が長く、燃焼室の立ち上がりから 122cm を測る。左袖幅 46cm、左袖長 75cm、左袖前端から煙道端までの全長は 220cm となる。

地山を削り出してカマドの基礎としていることから、建物掘り方の時点でカマドの位置を決定していた可能性が考えられる。

#### 出土遺物（第16図）

17 点図示した。1・2・16 が須恵器、他が土師器である。

1 の壺蓋は推定器径 11.8cm、器高 4.5cm の半球形を呈する。天井部は平らにヘラケズリされ、体部と口縁部の境には沈線が施される。7世紀前半（遠江III期末葉）に位置づけられる。2 の壺身は推定器形 13.4cm、器高 4.3 cm で、体部と口縁部の高さがほぼ 1 : 1 である。底部は丁寧にヘラケズリされるが、口唇部は丸く仕上げられている。壺身 B 類あるいは C 類に分類できるもので、6 世

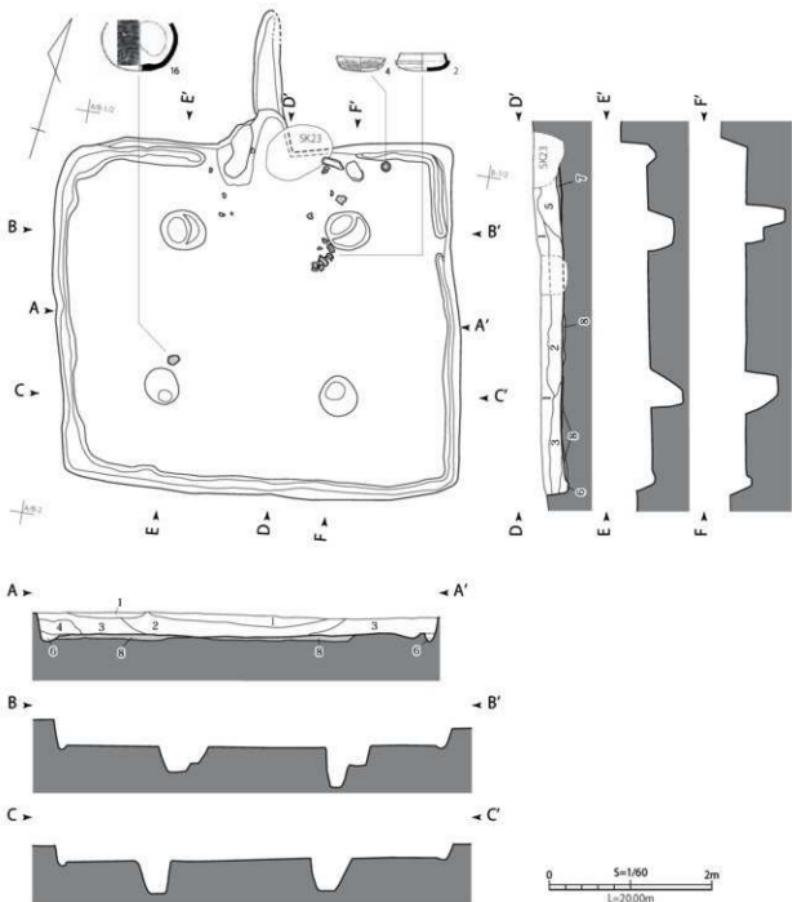
紀前半（遠江II期～III期前葉）に位置づけられる。16 は壺の胴部と考えられ、底部がやや平らになるものの、ほぼ球形を呈し、底部～胴部下半は回転ヘラケズリ調整される。

3 ~ 10 は土師器壺である。3 は須恵器壺身を模倣しており、口縁部は短くやや内傾し、推定器形は 14.4cm を測る。須恵器壺身 D 類に近い形態のものとして、6 世紀後半（遠江III期中～後葉）のものと考える。4 ~ 10 は須恵器壺蓋を模倣した壺である。口縁部と体部の境に棱をもち、口縁部が外へ開くもの（7・8）、口縁部と体部の境の棱がやや不明瞭なもの（4）、口縁部と体部の境に明瞭な棱をもち、口縁部が外へ開くが口縁端部は内湾するもの（5・6・9・10）がある。8・9 は外側に黒色処理が施されている。5 ~ 10 は 6 世紀後半に、4 は 7 世紀後半に位置づけられると考える。

11 は手づくねのミニチュア壺である。12 は高壺の坪底部～脚上部で、脚部は太い柱状を呈するようである。13 は腰東型壺の口縁部である。口唇部内側に粘土紐を貼り付けて肥厚させ、端部には沈線が巡る。また、口唇部外側にも若干の肥厚が認められる。7世紀前半に位置づけられる。14 も口唇部を肥厚させる壺で、残存部に認められる調整などは 13 と近いものであるが、色調は橙色を呈し、胎土は粗く、白色粒子が多く含まれる等、13 と比べてやや軟質な土器という印象である。TK23 ~ MT15 併行のものと考えられる。15 は土師器の鍋で、8世紀後半から9世紀に位置づけられるものである。17 は球形を呈する土師器壺の胴部である。

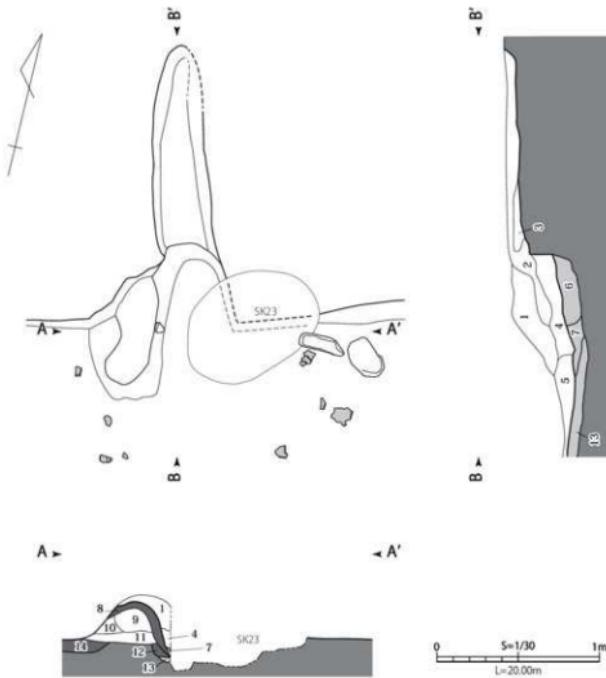
#### 所見

出土遺物の時期は、6世紀前半から8・9世紀まで幅広いが、その中心は6世紀後半から7世紀前半にあるものとみられ、建物跡もこの時期に位置づけておく。



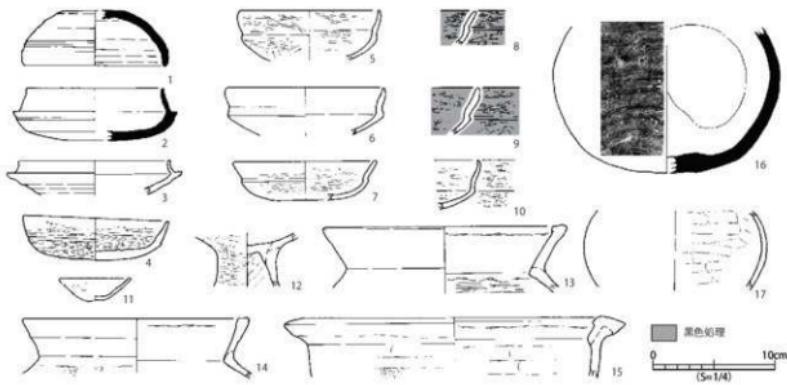
	大湖R3/7	大湖R3/7	謹	白色粒子	粘土	炭化物	しより	粘性	その他
1 黒褐色土 (7.5YR3/2)	少	ごく微	ごく少	少	ごく微	細粒・極微	ごく少	弱	やや強 覆土
2 黒褐色土 (10YR2/2)	やや少	ごく微	ごく少	少	ごく微	小ブロック・少	少	やや弱	やや強 覆土
3 黒褐色土 (10YR3/2)	やや少	少	ごく少	少	やや多	小ブロック・やや多	やや多	やや弱	やや強 覆土
4 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2)	ごく微	ごく微	ごく少	少	なし	なし	なし	やや強	やや強 黄色砂を多量に含む。
5 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2)	少	ごく微	ごく少	少	多	中ブロック・多	多	弱	やや弱 カマド粘土の流れ
6 黑褐色砂質土 (7.5YR3/2)	やや少	ごく微	やや多	ごく微	なし	なし	なし	やや強	やや弱 黄色砂をブロック状に多量に含む。
7 硫土・粘土									
8 黑褐色砂質土 (10YR3/2)	なし	ごく微	なし	ごく微	なし	なし	なし	曲	やや弱 掘り方理土

第14回 SB01

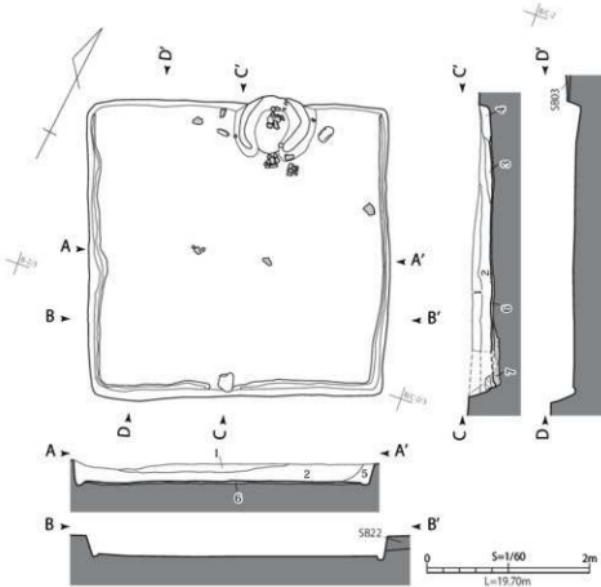


	大湖川河	大沢川河	礁	白色粒子	燧土	粘土	炭化物	しまり	粘性	その他
1 黒褐色弱粘質土	(7.5YR3/2)	ごく微 微	少	ごく微 微	少	少	やや多 少	少	やや弱 やや強	黄色鉛をやや多量に含む。
2 明褐色砂質土	(7.5YR3/3)	ごく微 微	なし	やや多 少	少	少	少	やや弱 やや強	カマド煙道部の崩れ	
3 明褐色砂質土	(7.5YR3/3)	ごく微 微	なし	少	多	少	やや多 少	やや強	カマド煙道部の崩れ	
4 黒褐色弱粘質土		ごく微 微	ごく微 微	少	多	やや多 少	やや多 少	やや弱 やや強		
5 橙色粘土・燧土										照拂室内
6 黑褐色弱粘質土		ごく微 微	ごく微 微	少	ごく微 微	少	なし	やや強	やや強	カマド壁裏方理土
7 明灰黄色砂質土	(2.5Y4/2)	ごく微 微	少	少	やや多 少	多	少	やや強	弱	カマド壁裏方理土
8 黄灰褐色粘土				なし	少	ごく多 少	少	やや弱 強	強	カマド地の化粧土
9 黑色土	なし	少	なし	微	なし	なし	なし	やや強	やや弱	カマド地盤成土
10 明褐色土	なし	微	なし	少	なし	少	少	やや強	やや強	カマド地盤成土
11 明褐色土	なし	微	なし	なし	なし	微	少	やや弱 やや強	やや強	カマド地盤成土
12 黄灰色粘土	なし	なし	なし	なし	なし	微	ごく多 少	やや強	強	カマド地盤成土
13 明灰黄色砂質土	ごく微 (10YR3/2)	ごく微 なし	少	ごく微 なし	なし	なし	なし	なし	強	カマド壁裏方理土
14 黑褐色砂質土	(10YR3/2)	なし	ごく微 なし	ごく微 なし	なし	なし	なし	強	やや弱	建物壁裏方理土

第15図 SB01 カマド



第16図 SB01出土遺物



	大溝II	大溝II	縫隙	白色粒子	埴土	粘土	炭化物	しまり	粘性	その他
1	暗褐色土 (7.5YR3/3)	少	ごく微	少	ごく少	なし	小アカリ・少	やや多	やや強	やや弱 黄色砂をやや多量含む。
2	暗褐色土 (7.5YR3/3)	やや多	ごく微	やや多	ごく少	なし	ごく少	少	やや強	やや弱 黄色砂をほどんど含まない。
3	黒褐色土 (7.5YR3/1)	少	ごく微	ごく少	多	大アカリ・多	多	やや強	やや強	カマド焼
4	褐色砂質土 (7.5YR5/4)	ごく少	ごく微	なし	少	なし	強	強	砂質の強い粘土。カマド焼	
5	暗褐色砂質土 (7.5YR3/3)	ごく少	ごく微	ごく少	ごく少	なし	なし	やや強	やや弱	
6	黒褐色土 (7.5YR3/2)	ごく少	ごく微	少	ごく少	なし	ごく少	なし	やや強	羅里方言土
7	暗褐色砂質土 (7.5YR3/3)	少	ごく微	なし	なし	なし	少	強	弱	羅里方言土

第17図 SB02

## SB02

遺構（第17・18図）

位置：B2グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB04→SB03・SB22→SB02（新）

主軸方位：N-26.8°-W

残存状況：主軸（南北）幅3.60m、直交（東西）幅3.70m、検出面からの深さは13～23cmを測り、平面形は方形を呈する。

覆土：大淵スコリアを含む暗褐色土の自然堆積層。

壁溝：幅8～14cm、深さ3～6cmを測り、西壁、東壁、南壁で検出された。南壁の中央付近が一部途切れ、北壁では検出されなかつた。

柱穴：確認されなかつた。

その他の遺構：確認されなかつた。

床：ほぼ全面に黒褐色土による貼り床が施されていた。

また、南壁から80cmほどの部分は掘り方が一段深くなつており、上部に黄色砂を敷き、固く締めて床面を形成していた。

カマド：北壁のやや東寄りに位置する。袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。残存規模は、全長80cm、幅100cm、燃焼室幅40cmを測る。

## 出土遺物（第19図）

7点図示した。

1の須恵器高台杯は8世紀代（遠江V期）に位置づけられるものである。底部外面を回転ヘラケズリして中心に木口痕が残る。

2～6は土器器の甕である。2の小型甕は肩が張らない長胴形で、内外面ともハケ目調整である。4は肩が張らず、ほぼ胴部の最大径から頭部が細曲して短い口縁部が外へ聞く、鍋ともいえる形の甕である。内外面ともハケ目調整である。2と4は胎土が似る。5は外面を縱ハケ目調整し、胎土にはぶい・橙色を呈し雲母を含む、遠江型水平口縁甕の胴部である。3・6は駿東型の長胴甕である。胴部は内外面ともハケ目調整されている。

7の砥石は広い1面と両側面に使用痕が認められる。

## 所見

出土遺物から、8世紀後半～9世紀初頭の建物跡と考えられる。

## SB03

遺構（第20・21図）

位置：A2・B2グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB04→SB03→SB02（新）

主軸方位：N-10.9°-W

残存状況：南東角をSB02に切られ、溝状の擾乱が北壁中央から南西角に向けて入っているため、残存状況は良好とは言えないが、残存部からおおよその規模は推定可能である。主軸（南北）幅2.35m、直交（東西）幅2.25m、検出面からの深さは5～14cmを測り、平面形は方形を呈すると考えられる。

覆土：暗褐色砂質土が堆積しており、焼土と鐵雜状の炭化物を多く含む層が認められる。

壁溝：幅15cm、深さ10～15cmで、検出された壁すべてに認められた。

柱穴：確認されなかつた。

その他の遺構：確認されなかつた。

床：掘り方を床面としている。

カマド：北壁のやや東寄りに位置するが、擾乱により左袖は欠損している。右袖残存部には芯材や粘土が認められないが、覆土には黄橙色粘土が入ることから、天井部などには粘土が使われていたものと考えられる。残存規模は、全長80cm、燃焼室幅30cm、右袖長40cm、右袖幅30cmを測る。

## 出土遺物

図化できる遺物は無かつた。

## 所見

カマド付近から8世紀代に位置づけられる長胴甕片が出土しており、これを本建物跡の時期と考える。

## SB04

遺構（第22図）

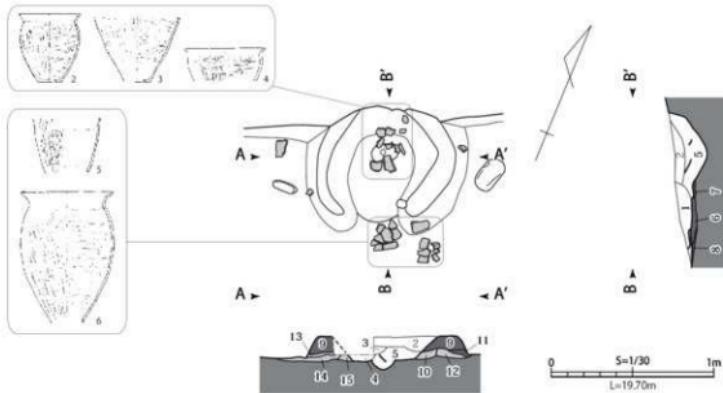
位置：A2・B2グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB04→SB03・SB18・SB02（新）

主軸方位：N-14.7°-W

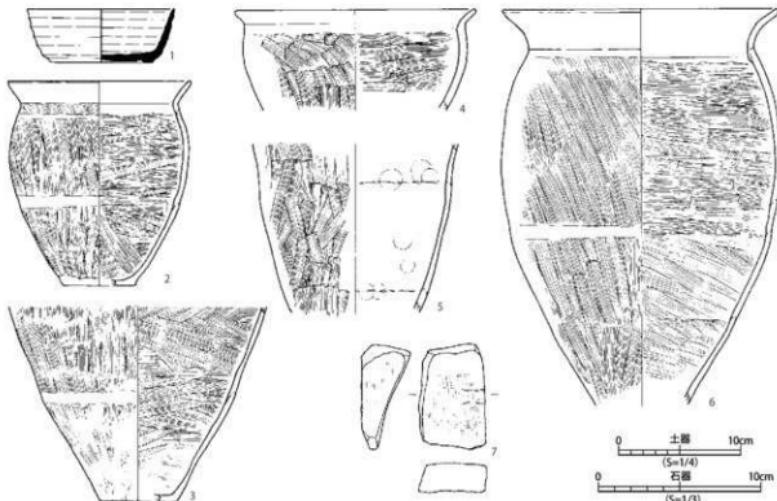
残存状況：SB02とSB03に北東角を、SB18に南東角を切られ、溝状の擾乱が北東角から南壁中央に向けて入っている。主軸（南北）幅8.40m、直交（東西）幅6.48m、検出面からの深さ4～12cmを測り、平面形は長方形を呈する。

覆土：不明

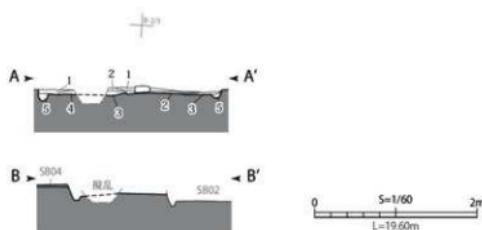
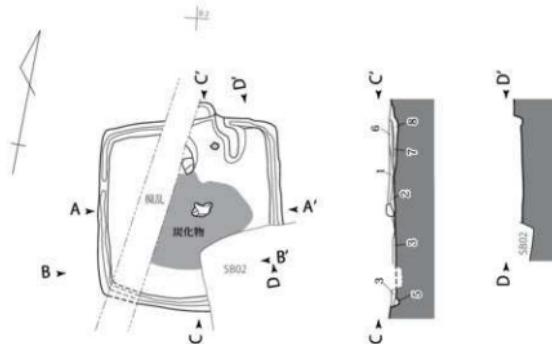


- |             |                           |             |                         |
|-------------|---------------------------|-------------|-------------------------|
| 1 淡黄褐色粘土    | 砂を多量、黒色土をごく少額含む。          | 9 黄灰色粘土     | 黒色土を少量含む。カマド袖構成土        |
| 2 黄灰色粘土     | 砂を多量、炭化物を少量含む。            | 10 暗褐色砂質土   | 炭化物をごく少額含む。カマド袖構成土      |
| 3 暗褐色砂質土    | 粘土をブロック状に含む。              | 11 黄灰色粘土    | 砂をやや多量含む。カマド袖構成土        |
| 4 暗褐色土      | しまり強                      | 12 黄灰色粘土    | カマド袖構成土                 |
| 5 淡黄褐色シルト質土 | 砂と炭化物を多量に含む。ブロック状の粘土が混ざる。 | 13 剛褐色砂質土   | 地山の岩壁。カマド袖構成土           |
| 6 暗褐色砂質土    | 粘土が混ざる。カマド掘り方埋土           | 14 暗褐色土     | しまり強。カマド掘り方埋土           |
| 7 黄色粘土      | カマド掘り方埋土                  | 15 黄褐色シルト質土 | 砂を多量、粘土をごく少額含む。カマド掘り方埋土 |
| 8 暗褐色土      | 建物掘り方埋土                   |             |                         |

第18図 SB02 カマド

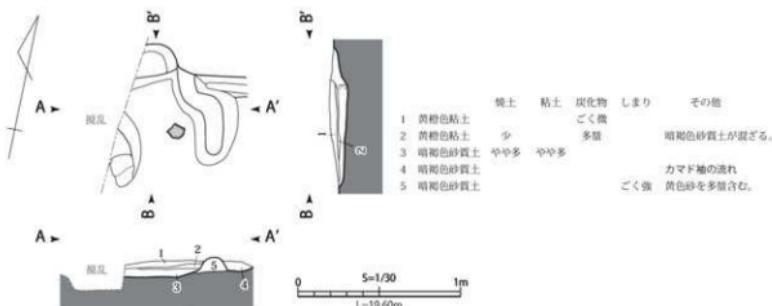


第19図 SB02 出土遺物

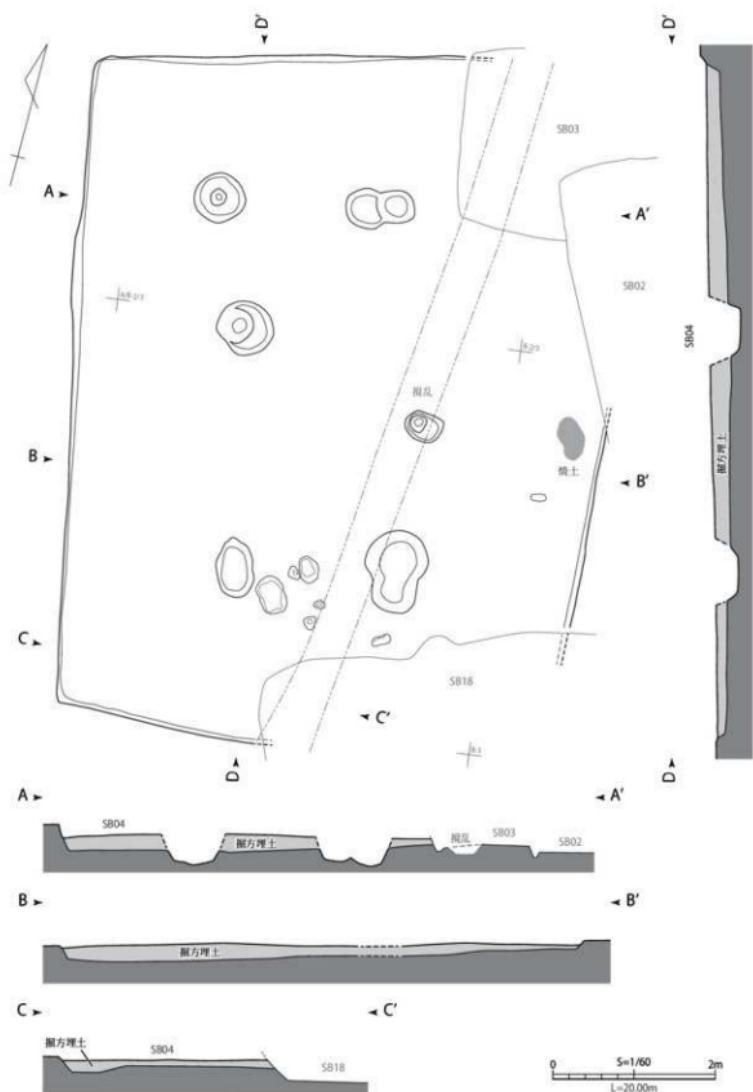


	大灘ロア	大沢ロア	礫	白色粒子	燒土	粘土	炭化物	しまり	粘性
1	暗褐色砂質土	(7.5YR3/3)	ごく強	ごく強	なし	強	少	少	弱
2	暗褐色砂質土	(7.5YR3/3)	ごく強	ごく強	強	多	多	多	やや弱
3	暗褐色砂質土	(7.5YR3/3)	強	強	強	少	少	少	やや強
4	黄灰色粘土ブロック								
5	褐色砂質土	(7.5YR4/3)	強	ごく強	少	微	なし	なし	やや弱
6	黄褐色粘土								ごく強
7	暗褐色砂質土	混入							多量
8	暗褐色砂質土								やや多

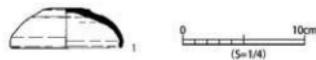
第20図 SB03



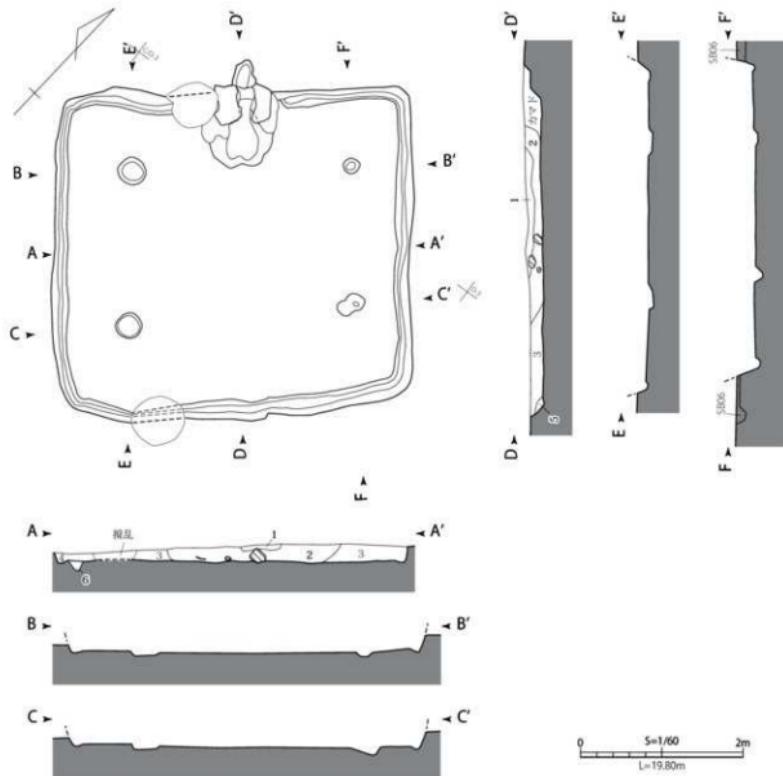
第21図 SB03カマド



第22回 SB04



第23図 SB04出土遺物



第24図 SB05

壁溝：確認されなかった。

柱穴：6基のビットを検出したが、すべてが確実に柱穴となるかどうかは断定できない。

その他の遺構：確認されなかった。

床：掘方に10～20cm厚の埋土を入れ床面としている。

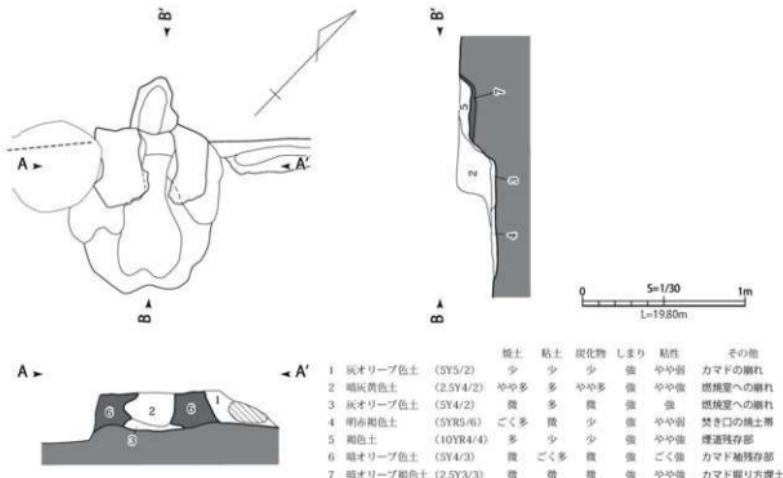
カマド：確認されなかった。東壁中央付近に焼上・炭化物が検出されているが、燃焼施設との関連は不明である。

#### 出土遺物（第23図）

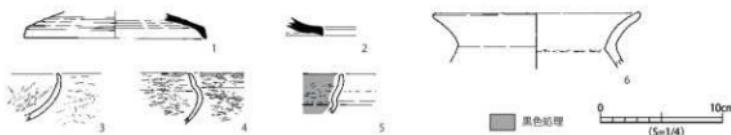
須恵器壺蓋1点を示した。器径9.0cm、器高3.3cmの半球形で、天井部を回転ヘラケズリするが、天井部と口縁部の境には継や沈線は施されない。7世紀中葉（道江IV期）に位置づけられる。

所見

遺構の主軸方向や規模などから、SB25と同時期（6世紀後半）の遺構の可能性が考えられる。図示した須恵器は混入したものと判断する。



第25図 SB05 カマド



第26図 SB05 出土遺物

#### SB05

##### 遺構（第24・25図）

位置：C2・C3 グリッド（I地区）

重複関係：（古）SH02・SB06 → SB05（新）

主軸方位：N-43.5°-W

残存状況：部分的に土坑により切られるが、おむね良好に残存している。主軸（南北）幅4.00m、直交（東西）幅4.40m、検出面からの深さ8～26cmを測る、平面形は東西にやや長い方形を呈する。

覆土：大畠スコリアを含む黒褐色土・茶褐色土の自然堆積層。

壁溝：幅16～26cm、深さ8cmで全周する。

柱穴：4基検出した。径20～34cm、深さ4～10cmを測る。

その他の遺構：確認されなかった。

床：部分的に掘り方に黒褐色土を入れているところが認められるが、大部分は掘り方を床としている。

カマド：北壁の中央に位置する。土坑により左袖の一部が切られている。また、燃焼室の奥行きよりも袖が短いことから、両袖の手前半分ほどが失われているとも考えられる。袖の残存部に芯材は認められず、粘土を用いて形成されている。煙道残存部は燃焼室の立ち上がりから35cmほど外へ延びる。燃焼室から煙道までの全長は130cm、両袖残存部の外幅は90cmを測る。

#### 出土遺物（第26図）

5点図示した。

1は返りの無い須恵器環蓋で、天井部を回転ヘラケズリしている。8世紀代（遠江V期）に位置づけられる。

2は小破片であるが、須恵器高杯の脚部片とみられる。

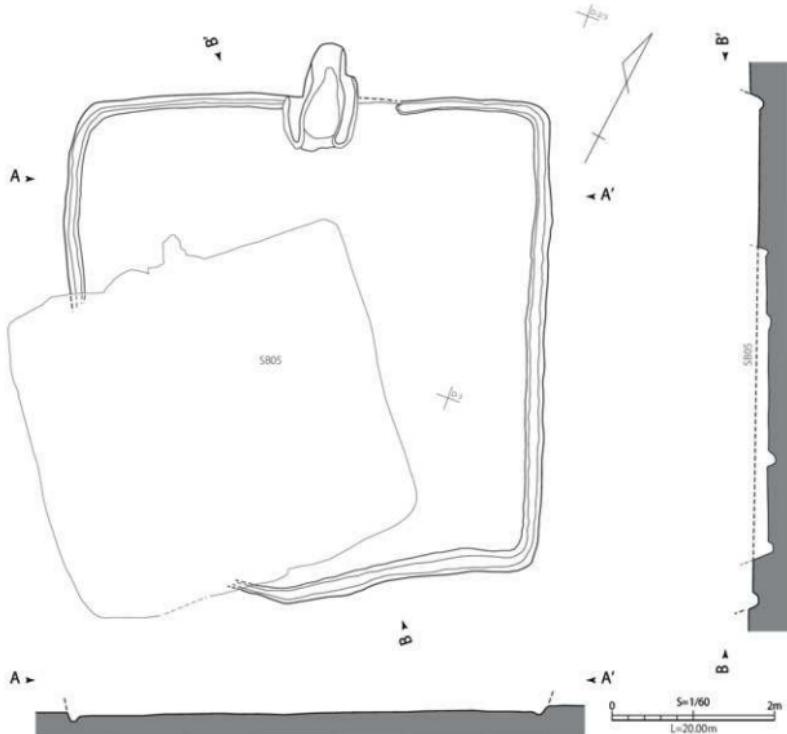
3～5は土師器の环である。3は半球状の体部で口縁が内湾する环で、外面はヘラナデ調整され、内面には粗

いヘラミガキが施されている。4は須恵器环身模倣の环である。内傾する口縁部と半球形を呈する体部の境には明瞭な稜を有する。内外面とも細かいヘラミガキ調整が施されている。5は須恵器环蓋を模倣した环で、体部と口縁部の境には明瞭な稜を有し、口縁部は外に開いて端部が内湾する。内面には黒色処理が施されている。3～5は6世紀後半の遺物と位置づけられる。

6の土師器壺は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部は外反して先細りになり、端部を丸く仕上げている。

#### 所見

出土遺物には時期差が認められるが、8世紀代に位置づけられるものを本建物跡に伴う遺物と捉え、これを本建物跡の時期とする。6世紀後半に位置づけられる土師器環は本建物跡と切り合うSB06に伴う遺物と考える。



第27図 SB06

SB06

## 遺構 (第 27・28 図)

位置: C2・C3・D2・D3 グリッド (1 地区)

重複関係: (古) SB06 → SB05 (新)

主軸方位: N-27.5°W

残存状況: 南西角から建物中央部にかけて、SB05 に切られている。残存部から、主軸 (南北) 幅 6.24m、直交 (東西) 幅 6.00m、検出面からの深さ 5 ~ 8cm を測り、平面形は方形を呈すると推定されるが、南壁中央付近がやや外に張り出すようで、五角形のプランとなる可能性もある。

覆土: 大量スコリアを含む自然堆積層。

壁溝: 幅 16 ~ 28cm、深さ 4 ~ 6cm を測り、検出された壁のすべてで確認された。

柱穴: 確認されなかった。

その他の遺構: 確認されなかった。

床: 掘り方を床面としている。

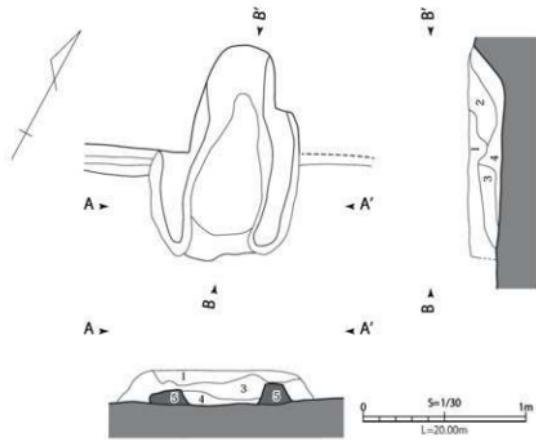
カマド: 北壁の中央に位置する。袖に芯材は認められず、粘土を用いて形成されている。燃焼室は浅く、掘り方をそのまま燃焼室としている。残存規模は、全長 130cm、幅 88cm、燃焼室幅 42cm を測る。

## 出土遺物 (第 29 図)

須恵器広口壺の頸部～口縁部分 1 点を図示した。胴部形態が不明であるが、7 世紀代 (遠江田期後葉～IV 期) に位置づけられるものと考える。

## 所見

本建物跡と切り合う SB05 の出土遺物のうち 6 世紀後半に位置づけられるものを本建物跡に伴うものと捉えて、本建物跡の時期は 6 世紀後半～7 世紀代と考えられる。



	大湖口付	大沢口付	白色粒子	燒土	粘土	炭化物	しまり	粘性	その他
1	灰黄褐色土 (10YR5/2)	少	無	微	少	強	強		
2	に赤い黄褐色土 (10YR4/3)	なし	なし	多	多	多	強	強	
3	に赤い黄褐色土 (10YR5/3)	なし	なし	多	多	少	強	強	
4	に赤い赤褐色土 (SYR5/4)	なし	なし	多	多	多	強	強	
5	浅黄色粘土 (5Y7/4)						強	ごく強	カマド袖生存

第 28 図 SB06 カマド



第 29 図 SB06 出土遺物

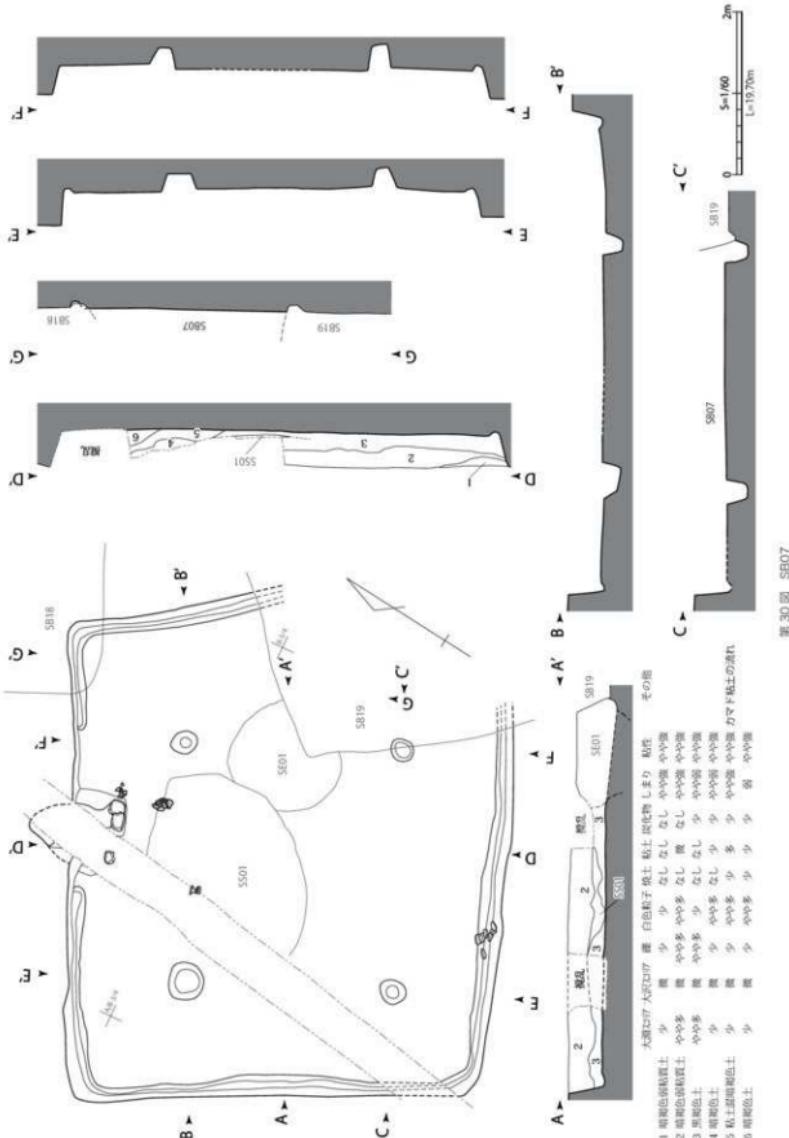
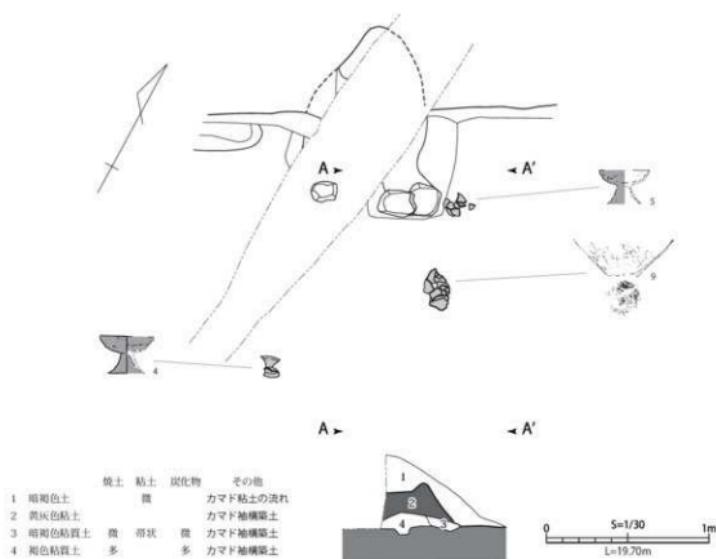
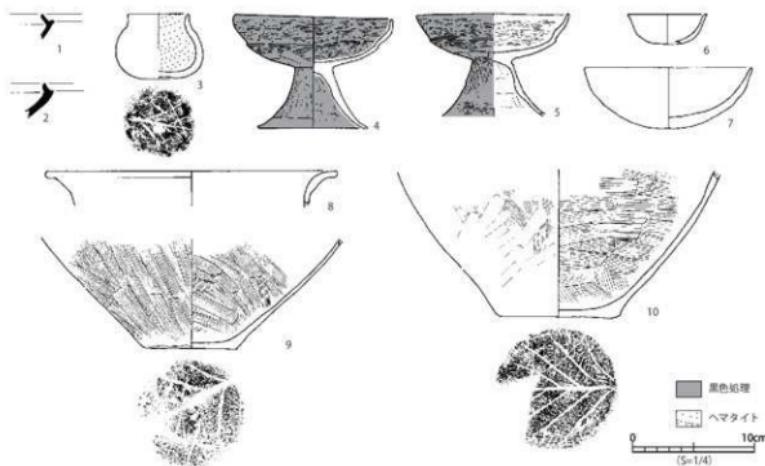


図30 図 SB07



第31図 SB07 カマド



第32図 SB07 出土遺物

## SB07

遺構（第30・31図）

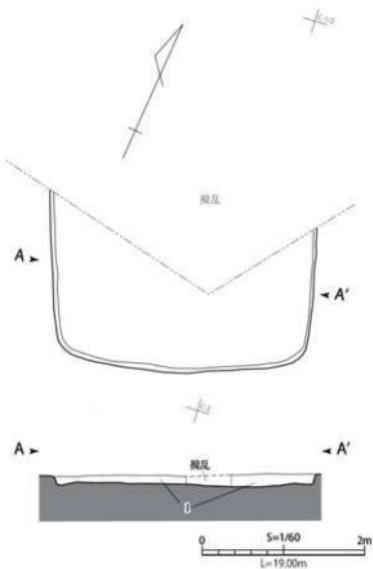
位置：A3 グリッド（I 地区）

重複関係：（古）SB25 → SB07

→ SB18・SB19・SE01・SS01（新）

主軸方位：N:32.4°-W

残存状況：北東角を SB18 に、南東角を SB19 に切られ、溝状の搅乱が北壁中央から南西角に向けて入っている。搅乱によりカマドの大部分が欠損している。残存部から、主軸（南北）幅 5.40m、直交（東西）幅 6.16m、検出面からの深さ 40cm を測り、平面形は東西にやや長い方形を呈すると推定される。



第33図 SB08



第34図 SB08 出土遺物

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土・暗褐色土の自然堆積層。

壁構：カマドの両側を除き、検出された壁のすべてで確認された。幅 16 ~ 28cm、深さ 3 ~ 5cm を測る。

柱穴：4 基検出した。径 28 ~ 46cm、深さ 20 ~ 25cm を測る。

その他の遺構：確認されなかった。

床：掘り方を床面としている。

カマド：北壁の中央に位置するが、搅乱により大部分が欠損しており、検出されたのは右袖のみである。袖は粘土と粘土質で構成され、焚き口寄りに芯材の石が配されていた。残存部で、全長 120cm、幅 104cm、右袖長 68cm を測る。

## 出土遺物（第32図）

10点図示した。

1・2 は須恵器壺身である。どちらも小破片のため器形や法量は復元できなかつたが、口縁部が短いことから、壺身 D・E・F 型式のいずれかに該当すると考える。

3 は土師器の小型壺である。残念ながら出土位置や出土状況の詳細が明らかでなく、確実に SB07 に属するものとは断定できない。ほぼ完形で、内部に赤色顔料が詰まつた状態で発見された。蛍光 X 線定性分析の結果、この赤色顔料はハマタイトであることが判明している。内壁には口縁端部近くまで赤色が付着しており、少なくとも一度はほぼ満杯に詰められていた可能性が考えられる。胴部はやや扁平な球形で、平底の底部には木葉痕が残る。口縁部は短く直立し、胴部との境にはナデによる痕が巡り、この後の少し上に、径 1.5mm、深さ約 2mm の刺突のような痕跡が一箇所だけ認められる。土器焼成前に施されたものとみられるが、意図的なものか偶発的なものは特定出来ない。

4・5 は黒色処理が施された土師器高杯である。須恵器壺蓋を模倣し口縁端部が内湾する壺部とハの字状の脚部を有するもので、7世紀前半に位置づけられる。6 は手づくりのミニチュア壺、7 は体部が半球形を呈する丸底の土師器壺である。8 は壺の口縁部で、口唇部がほぼ水平になるほど外反する。9・10 は球削を呈するとみられる駆逐型壺の胴部下半である。

## 所見

出土遺物から、本建物跡は 7 世紀前半に位置づけられる。

SB08

## 遺構（第33図）

位置：B1・C1 グリッド（I地区）

重複関係：なし

主軸方位：N-24.2°-W

残存状況：北半を擾乱により欠損する。主軸（南北）残存幅 2.20m、直交（東西）幅 3.28m を測り、平面形は方形を呈すると推定される。

覆土：大淵スコリアを含む暗茶褐色土の自然堆積層。

壁溝：確認されなかった。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

床：掘り方を床面としている。

カマド：確認されなかった。

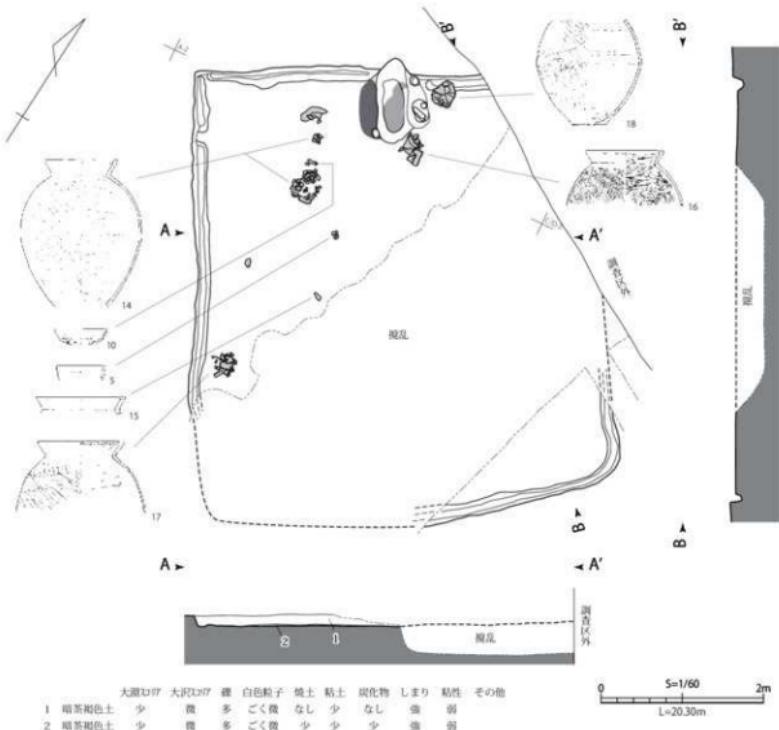
## 出土遺物（第34図）

土師器 1 点を図示した。

壺の頸部から肩部にかけての破片で、頸部は強く屈曲せず、肩部から S 字状のラインを描いて、そのまま口縁部が外反するようである。外面には斜ハケ目調整が、内面には横ヘラナデ調整が施されている。白みを帯びる胎土には雲母が含まれている。遠江型長胴壺の破片とみられる。

## 所見

出土遺物からは、7世紀後半～8世紀代の遺構と位置づけられる。



第35図 SB09

SB09

## 遺構（第35・36図）

位置：C1・C2 グリッド（1地区）

重複関係：（古）SD02 → SB09（新）

主軸方位：N:32.7°-W

残存状況：北東角は調査区外にあり、北東角から南西角にかけて大きく搅乱を受けているため、残存状況は良くない。残存部から、主軸（南北）幅5.70m、直交（東西）幅5.20m、検出面からの深さ12cmを測り、平面形は方形を呈すると推定される。

覆土：大體スコリアを含む暗茶褐色土の自然堆積層。  
壁溝：幅10～20cm、深さ5cm前後で、部分的に途切れるか検出された壁のすべてで確認された。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

床：大部分が掘り方を床としているが、掘り方の凹みに黒色粘質土を入れて平坦にしている部分も認められる。

カマド：北壁の中央に位置する。上部を大きく削られており、燃焼室と袖の下部のみ検出された。数点の砂岩が出土しており、袖の構築に関わるもの可能性がある。

残存部で、全長105cm、両袖外幅84cm、燃焼室幅36cmを測る。

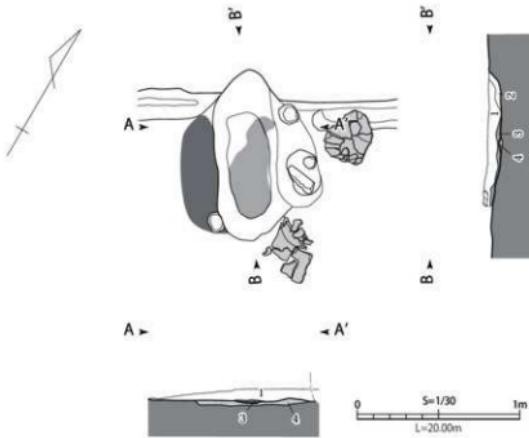
## 出土遺物（第37図）

18点図示した。

1・2は須恵器長頸壺の口頸部である。1の口唇部は断面三角形に肥厚しており、7世紀末～8世紀代（遠江IV期末～V期）に位置づけられる。2は頸部に2条の沈線が巡っている。

3～13は土師器壺である。半球形の体部をもち、口縁端部が内湾するもの（4）、須恵器壺蓋を模倣したもので、体部と口縁部の境に稜をもち、口縁部がやや外へ開くもの（3・7・12・13）、同じく須恵器壺蓋を模倣したもので、体部と口縁部の境に稜をもち、口縁部が外へ開くが口縁端部は内湾してS字状を呈するもの（6・8～11）などがある。13は内面に黒色処理が施されている。これらの壺は6世紀後半～7世紀前半に位置づけられる。

14～18は駿東型の甕である。いずれも胴部は外外面ともハケ目（あるいはナデ）調整し、頭部はくの字状に屈曲している。14は口縁端部を内側にやや肥厚させ、



	大潤むけ	大沢むけ	潤	白色粒子	燒土	粘土	炭化物	しまり	粘性	その他
1	暗茶褐色土	少	潤	少	潤	少	少	やや強	やや強	
2	暗茶褐色土	少	なし	少	潤	少	やや多	少	やや強	
3	褐色焼土	なし	なし	なし	なし	ごく多	潤	やや多	やや強	カマド燃焼室
4	暗褐色土	なし	なし	少	潤	なし	なし	強	弱	カマド掘り方埋土

第36図 SB09 カマド

肩が張り、やや長い球胴を呈する。15・16・17も口縁端部を内側に肥厚させるが、その上面を平らに整える意図がみられる。18は口縁部を欠くが、胎土や調整、胴部の形などから駿東型の壺の胴部と考えられる。これらの壺は7世紀前半に位置づけられる。

## 所見

出土遺物から、6世紀後半～7世紀前半の建物跡と考えられる。

SB10

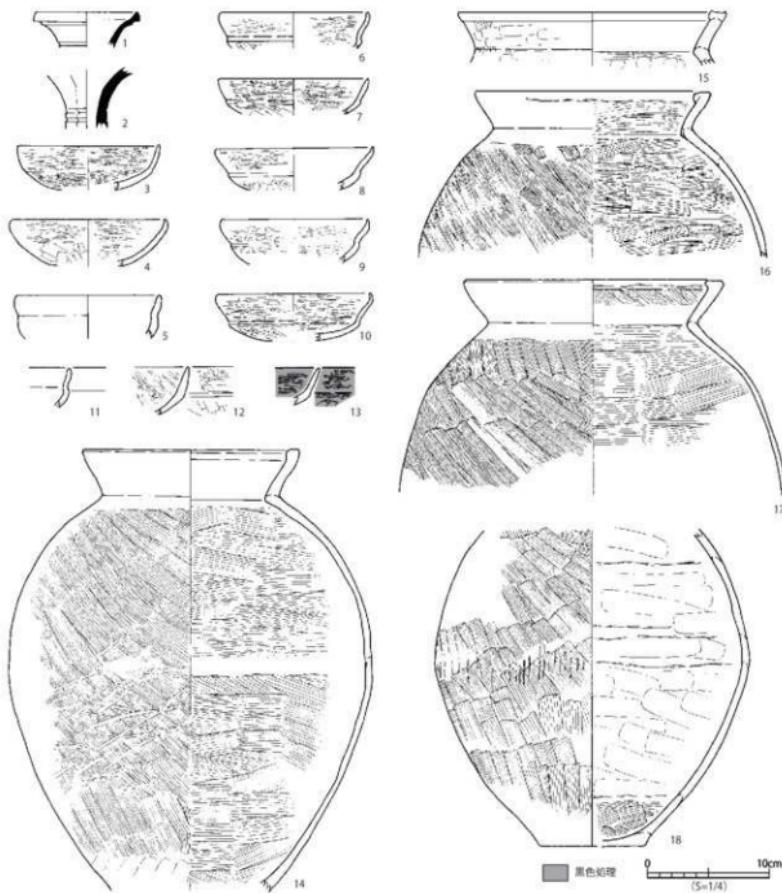
遺構（第38・39図）

位置：E3・E4 グリッド（1地区）

重複関係：（古）SD02 → SB10（新）

主軸方位：N-35.1°-W

残存状況：南半は調査区外にある。主軸（南北）検出幅2.80m、直交（東西）幅3.50m、検出面からの深さ35cmを測り、検出部分から推定される平面形は方形である。



第37図 SB09出土遺物

壁溝：幅 18 ~ 30cm、深さ 2 ~ 4cm を測り、検出部分は全周する。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

床：大部分は掘り方が床面であるが、部分的に粘土・焼土混じりの硬質な貼り床が施されている。

カマド：北壁のやや東寄りに位置し、両袖・煙道・燃焼室が良好に残存している。袖の芯材は確認されず、粘土を主体として袖が構築されている。規模は、全長 118cm、両袖外幅 102cm、燃焼室幅 44cm を測る。

#### 出土遺物（第40図）

5 点図示した。

I の須恵器环身は小破片のため法量は不明であるが、口縁部の長さから 6 世紀後半から 7 世紀前葉（环身 D・E 型式）のものと考えられる。

2・3 の土師器環は体部と口縁部の境に明瞭な棱をも

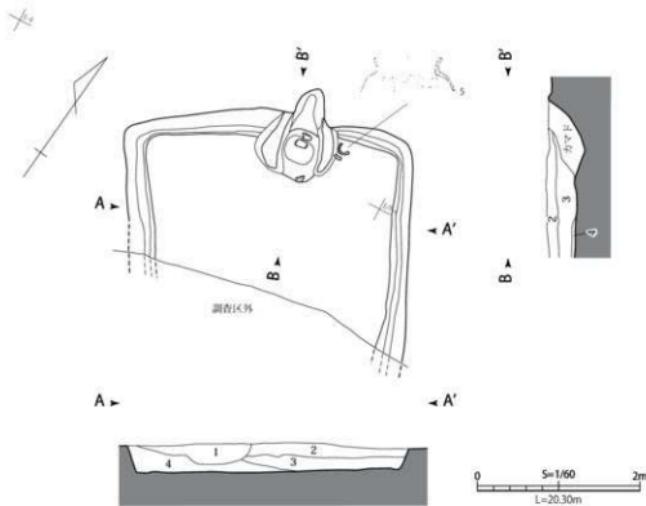
ち、口縁部が外へ開き端部が内湾するもので、6 世紀後半に位置づけられる。

4 は胎土から同一個体と判断したが、口縁部と胴部が接合しなかったため、図上で推定に基づく復元をしたものである。一応、土師器の壺とする。丸底の底部と筒状の胴部、胴部とほぼ同径で直立する口縁部からなり、器壁は厚く、内外面に板状工具によるとみられるナデ調整が施される。

5 の土師器壺は、肩部が張り、頸部がくの字状に屈曲するか口縁部はあまり外に開かず、口縁端部がやや肥厚して平らに整えられ外傾する。駿東型の壺と同様の胎土で、その初期のものと考えられる。

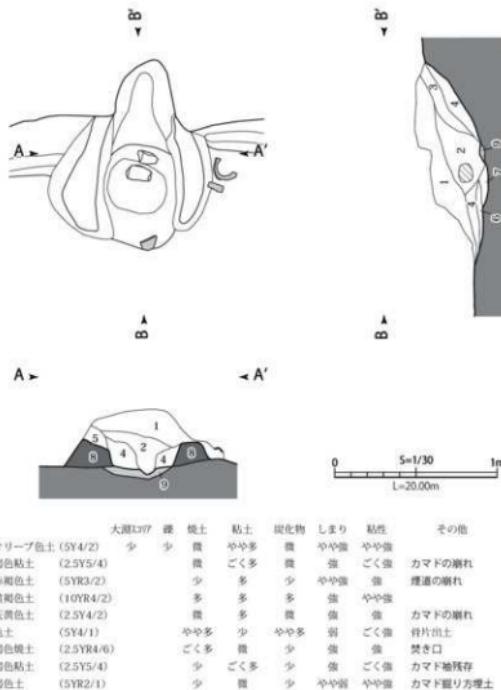
#### 所見

出土遺物から、本建物跡の時期は 6 世紀後半～7 世紀前葉と考えられる。



	大瀬付帯	大沢付帯	圓	白色粒子	燒土	粘土	炭化物	しまり	粘性	その他
1	褐色色土 (7.5YR3/3)	少	微	少	微	微	微	強	やや強	
2	暗褐色土 (7.5YR3/3)	少	微	やや多	微	少	微	強	やや強	
3	黒褐色土 (7.5YR2/2)	少	微	少	微	微	少	弱	強	
4	黒褐色土 (10YR3/2)	少	微	少	微	微	少	強	やや強	

第38図 SB10



第39図 SB10 カマド

## SB11

遺構（第41図）

位置：E3 グリッド（I地区）

重複関係：（古）SD02→SB11（新）

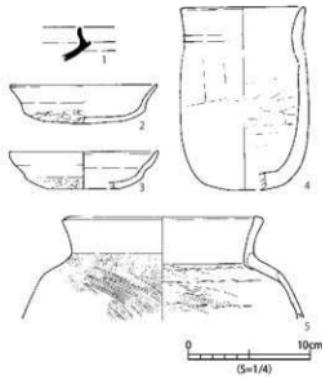
主軸方位：N-5.4°W

残存状況：北東部分は調査区外である。検出された範囲からは、主軸（南北）幅6.20m、直交（東西）幅5.84m、平面形はおおむね方形を呈すると推定される。検出面からの深さは10cmを測る。

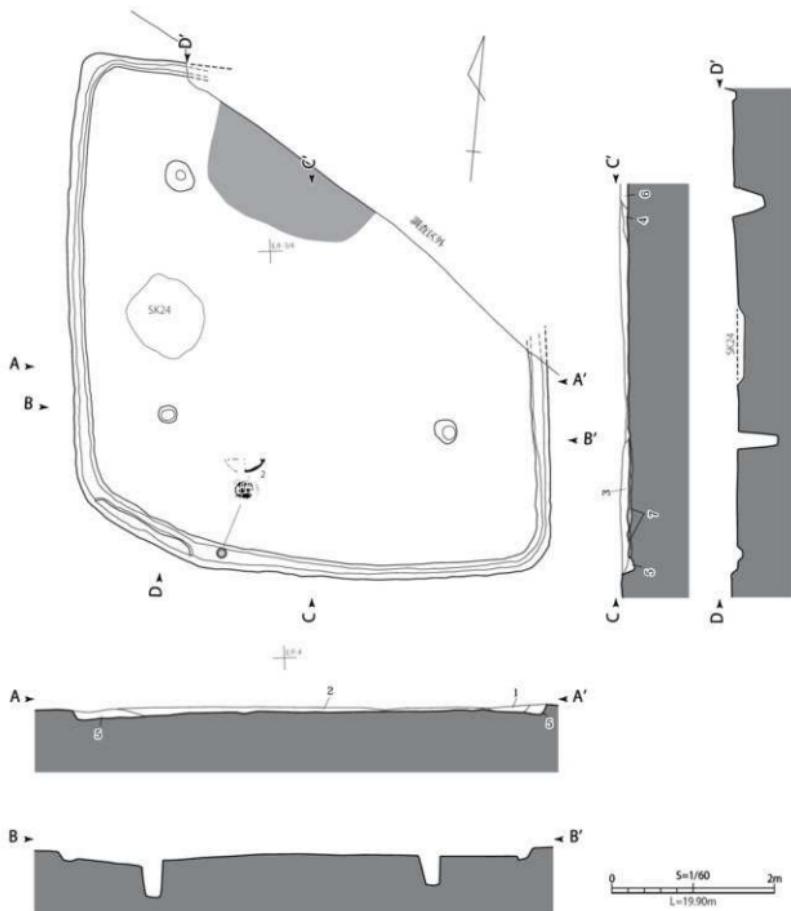
覆土：大灘スコリアを含む自然堆積層。

壁溝：幅20～30cm、深さ5～10cmで、検出された壁のすべてで確認された。

柱穴：北西・南西・南東の3基が検出された。北東の柱穴は調査区外に位置すると考えられる。径は20～40cm、深さは40cmほどを測る。



第40図 SB10 出土遺物



	大割287	大沢287	礫	白色粒子	燒土	粘土	炭化物	しまり	粘性	その他
1	オリーブ色土 (2.5Y4/3)	少	微	少	微	多	少	やや強	やや強	
2	灰オリーブ色土 (7.5Y5/2)	少	微	やや多	微	やや少	やや多	少	やや強	齒
3	オリーブ黒色土 (7.5Y3/2)	少	微	少	微	微	微	弱	強	
4	灰オリーブ色土 (7.5Y5/3)	微	少	微	少	アホケ状・多	少	強	やや強	
5	オリーブ黒色土 (10Y3/2)	少	微	少	微	微	微	少	やや強	
6	粘土									カマド粘土の流れ
7	オリーブ灰白色土 (10Y4/2)	少	微	少	微	少	微	やや強	やや強	掘り方理土

第41図 SB11

その他の遺構：確認されなかった。

床：厚さ3～5cmの硬質な貼り床が部分的に認められる。

カマド：確認されなかったが、床面の北寄りに粘土の抜がりが認められ、調査区外の北壁に位置する可能性がある。

#### 出土遺物（第42図）

8点図示した。

1は須恵器壺蓋である。小破片のため法量の復元はできないが、天井部と口縁部の境に沈線が巡り、口唇部が丸く仕上げられている。2の須恵器壺身は、口縁部が受部からわずかに突出する程度にごく短く、器径9.8cmの小型であり、壺身F型式（遠江IV期前葉）に分類できる。底部はヘラケズリされ、窓印とみられる「井」形のヘラ描きが認められる。

3は内外面に赤彩が施された土師器環片、4は外面に赤彩が施された高环脚鋸部片である。

5～8は土師器甕の口縁部片である。5は端部を丸く仕上げ、内外面ともヘラナデ調整されている。6は頸部がくの字状に屈曲し、口唇部内面は沈線を浅く巡らせることでやや肥厚させたようにみえる。口縁端部は面をもつように整えられ、沈線が巡る。7は頸部がくの字状に屈曲し、口唇部内面には粘土を貼り付けて肥厚させている。鞍東型甕の口縁部片である。8は短く厚手の口縁部で、口唇部内面の肥厚は粘土紐を貼り付けて、大きく突出するように整えられている。甕よりは鍋に近いものかもしれない。

所見

2の須恵器壺身から、本建物跡の時期は7世紀中葉と考える。

#### SB12

##### 遺構（第43図）

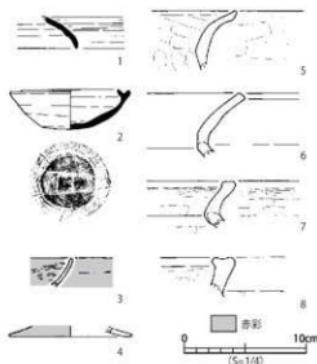
位置：B4・C4グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB12→SB16（新）

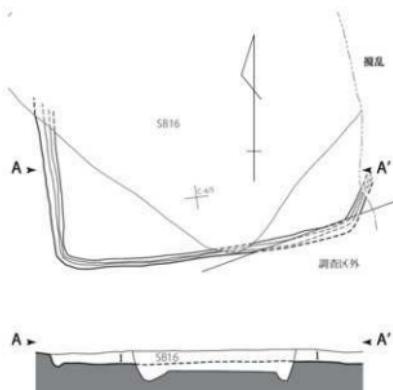
主軸方位：不明

残存状況：SB16と搅乱に切られて大部分を欠損し、南壁の一部は調査区外にあるため、南東角と南西角の一部分のみが検出された。南北残存幅2.00m、東西残存幅3.88m、検出面からの深さは8～10cmを測る。残存部から推定される平面形は方形である。

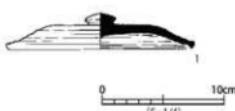
覆土：大體スコリアを含む暗茶褐色土の自然堆積層。



第42図 SB11出土遺物



第43図 SB12



第44図 SB12出土遺物

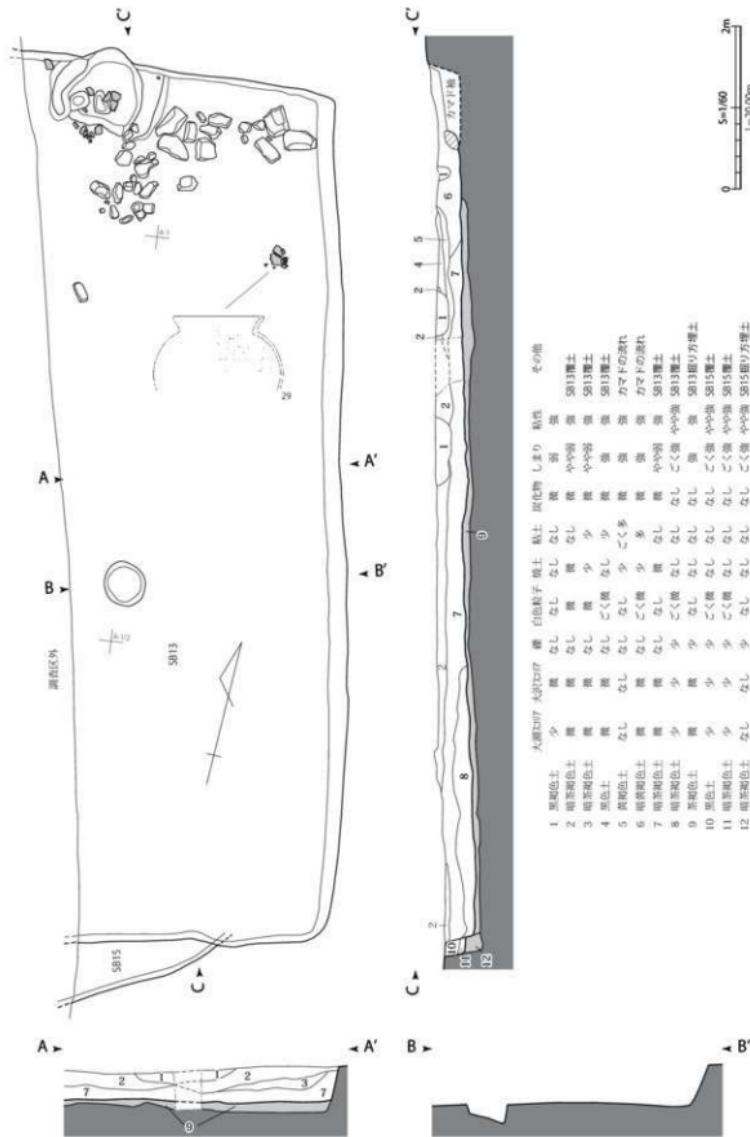


図45 SB13-SB15

壁溝：幅 10 ~ 16cm、深さ 5cm を測り、検出された壁のすべてで確認された。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

床：残存部分では、掘り方を床面としている。

カマド：確認されなかった。

#### 出土遺物（第44図）

須恵器壺蓋 1 点を図示した。返りの無い摘み蓋で、天井部が平らになり、摘みが小型化している。8世紀代（遠江編年V期）に位置づけられるが、これは切り合うSB16 に伴う遺物と考えられる。

#### 所見

図示した遺物は SB16 に伴うものと考え、SB16 の遺物の中で古い時期のものを本建物跡に伴う遺物と判断す

ると、本建物跡は 6世紀後半～7世紀と推測される。

#### SB13

##### 遺構（第45・46図）

位置：AI グリッド（I 地区）

重複関係：（古）SB15 → SB13（新）

主軸方位：N-13.9°W

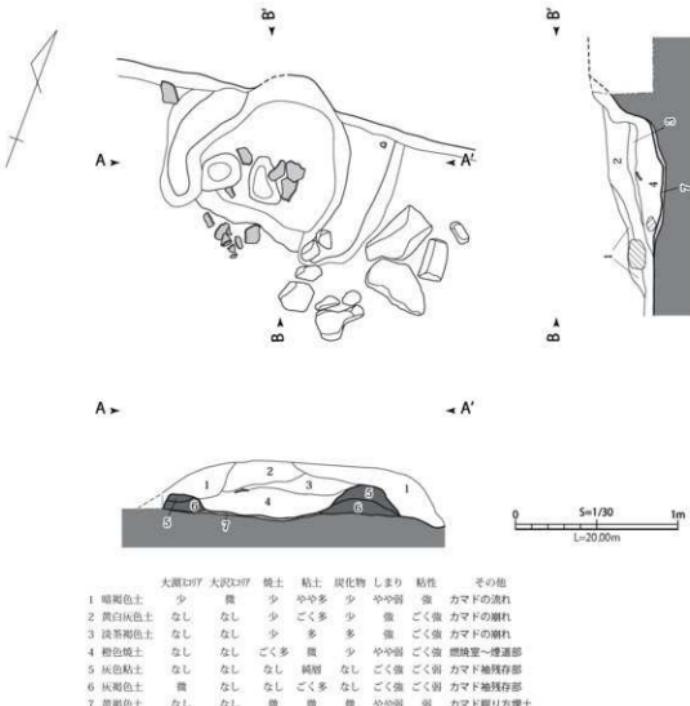
残存状況：西半分が調査区外にあり、東半分のみ検出された。主軸（南北）幅 10.92m、直交（東西）検出幅 3.80m を測る。

覆土：大瀬スコリアを含む褐色土の自然堆積層。

壁溝：確認されなかった。

柱穴：柱穴とは断定できないが、ビットを 1 基検出した。

長径 56cm、短径 50cm、深さ 23cm を測る。



第46図 SB13 カマド

その他の遺構：確認されなかった。

床：掘り方に5～10cmの厚さで黒褐色土を入れて床面としていた。

カマド：北壁に位置し、両袖と燃焼室が残存している。全長110cm、両袖外幅144cm、燃焼室幅80cmを測る。

カマド周辺には大小の礫が散乱しているが、残存する袖では芯材は確認されず、袖は粘土を主体として構築されているようである。そのため、これらの礫がカマドに関わるものかは特定できない。

#### 出土遺物（第47図）

33点図示した。

1～5は須恵器である。1の壺蓋は器径11.0cm、器高3.4cmで、体部と口縁部の間に沈線は認められない。天井部は回転ヘラケズリ調整されるが、粗雑である。2の壺蓋には短い返りがつく。3は無蓋長颈壺の口縁部で、段をもち、口唇部が断面三角形を呈する。内外面ともに自然袖が掛かっている。4・5は器径が8.5cm前後で、口縁部がごく短く、受部からわずかに突出する程度の环身（环身F型式）である。これらの須恵器はおむね7世紀後半（遠江IV期）に位置づけられる。

6～32は土師器である。6は口縁が内湾し体部が半球形を呈するとみられる壺あるいは瓶である。内外面ともヘラミガキ調整されている。17も壺あるいは瓶で、体部は半球形を呈するとみられ、口縁部は直立に近い。7～9は口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部が短く直立に近い壺である。15・16・18・21の壺は口縁部と体部の境の後が下方に位置し、口縁部が外へ開く。12～14・19・20の壺も同様に、口縁部と体部の境の後が下方に位置し口縁部が外へ開くが、口縁端部が内湾する。これらの須恵器模倣壺の一群は6世紀後半に位置づけられる。

22も壺の破片であるが、底部片のため分類はできない。10・11は半球形の体部に、外反する短い口縁部がナデにより成形されている。11の底部には木葉痕が認められる。23・24は高壺である。23は全体的に厚手のつくりで、壺部の形態は不明であるが、脚部は太く、壺部底部からハの字状に開く。24は半球形の壺部を有するようである。脚部は太く、残存部分は柱状を呈する。

25は甌あるいは鍋の口縁部片で、直立に近い口縁部の端部を肥厚させて面をつくり、ハケ目調整後ナデで平らに整えている。26は鍋の口縁部である。頸部がくの

字に屈曲し、口縁部を内側に肥厚させ、上面を平らに整えている。

27～32は甌である。27は頸部がくの字に屈曲し、口縁部が内外面ともやや肥厚する腹東型甌である。28の口縁部片は、先細りして端部を丸く仕上げている。29・30も腹東型甌である。29は肩が張る球胸で、口縁端部の肥厚は断面三角形がやや退化はじめている段階に見える。30は胴部下半のみであるが、底部が小さく脇が張り、ハケ目調整後、外面にはヘラミガキが施されている。31も腹東型甌であるが、口縁端部の肥厚はごくわずかに認められる程度である。32は肩が張り、頸部がくの字に屈曲するが、口縁部は肥厚せず、内傾する面をもって端部を丸く仕上げている。腹東甌とは胎土が異なるように見える。

33は石砥である。長さ5.15cm、幅3.05cm、厚さ1.05cm、重さ21.57gと小型であるが、小口面を除く4面に使用的痕跡が認められる。

#### 所見

出土遺物には、6世紀後半のものと7世紀後半～8世紀前半のものが認められる。本建物跡はSB15を切ってつくられていることから、7世紀後半～8世紀前半のものを本建物跡の遺物と捉えて、これを本建物跡の時期と考える。6世紀後半の遺物はSB15に伴うものの可能性が考えられる。

#### SB15

##### 遺構（第45図）

位置：A1グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB15→SB13（新）

主軸方位：不明

残存状況：北側の大部分がSB13に切れ、西側は調査区外にあるため、南壁のごく一部のみが検出された。検出された南壁の長さは1.92m、検出面からの深さは25cmを測る。

覆土：大淵スコリアを含む自然堆積層。

壁溝：確認されなかった。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

床：検出部分では、掘り方に暗茶褐色土を入れて床面としている。

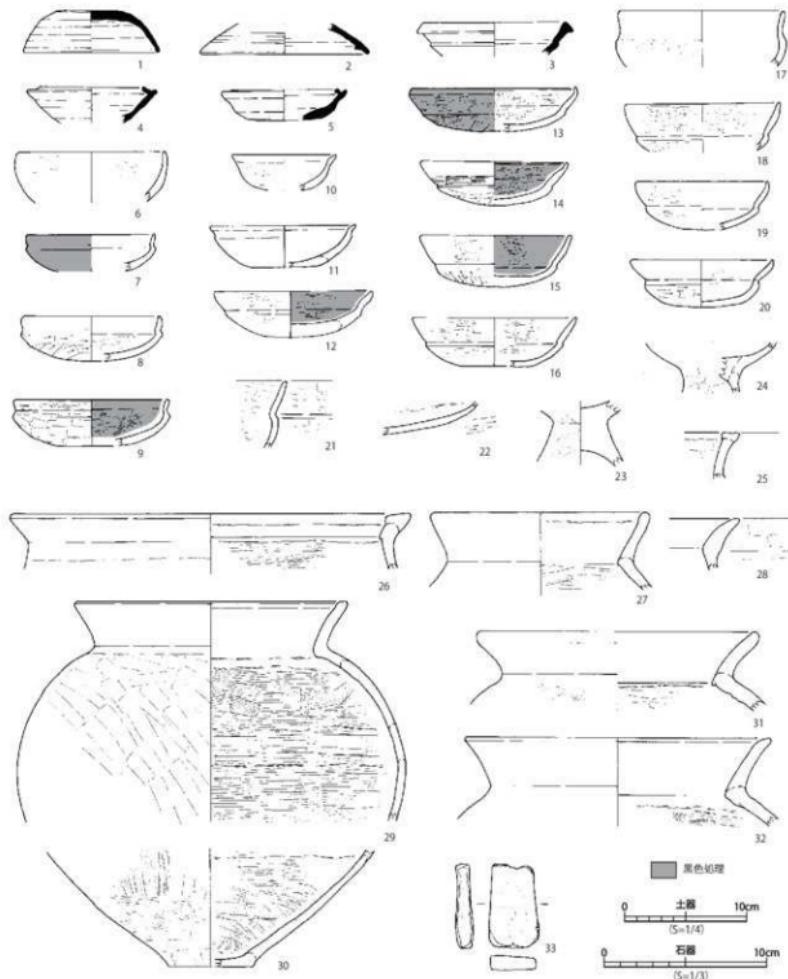
燃焼施設：確認されなかった。

## 出土遺物

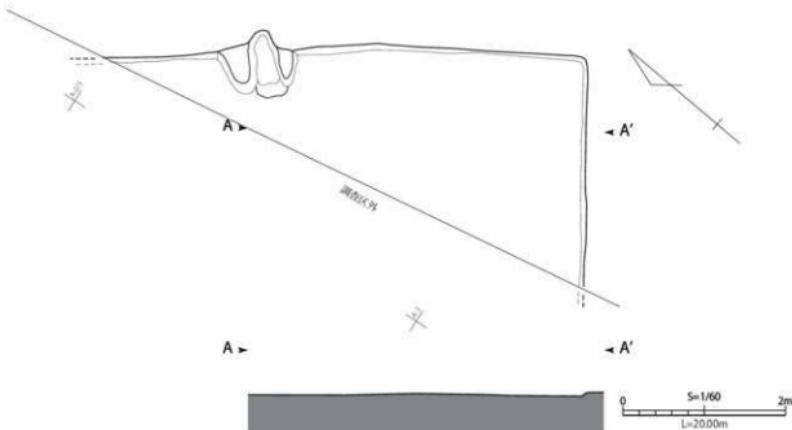
図示できるものは無かった。

## 所見

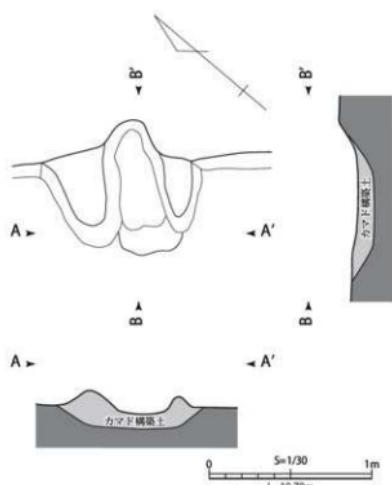
本建物跡を切るSB13の出土遺物のうち、古手のものを本建物跡に伴うものとして、6世紀後半の建物跡と考える。



第47図 SB13出土遺物



第48図 SB14



第49図 SB14 カマド

#### SB14

##### 遺構（第48・49図）

位置：A2・A3 グリッド（1地区）

重複関係：なし

主軸方位：N-49.8°-E

残存状況：西側の大部分が調査区外にあり、カマドが位置する東壁と南壁の一部のみ検出された。主軸（東西）検出幅2.80m、直交（南北）検出幅6.00m、検出面からの深さは5cmを測る。

覆土：不明

壁構：確認されなかった。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

床：不明

カマド：東壁に位置し、両袖と燃焼室が残存していた。全長74cm、両袖外幅86cm、燃焼室幅24cmを測る。袖の芯材は検出されず、灰褐色粘土を用いて構築されていたようだが、土に廃油が染みており、掘り方理土との境が不明瞭であった。

##### 出土遺物

固化できる遺物は無かった。

##### 所見

出土遺物も遺構の切り合い関係も無いため、遺構の時期は特定できない。

## SB16

遺構（第50・51図）

位置：B4・C4 グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB12→SB16（新）

主軸方位：N-37.4°E

残存状況：カマド右袖を含む南東角を搅乱によって欠損する。その他はおむね良好に残存している。主軸（南北）幅4.30m、直交（東西）幅4.20m、検出面からの深さ25cmを測り、平面形は方形と推定される。

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土の自然堆積層。

壁溝：カマドの脇を除く、検出された壁のすべてで確認された。幅16～28cm、深さ9cmを測る。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

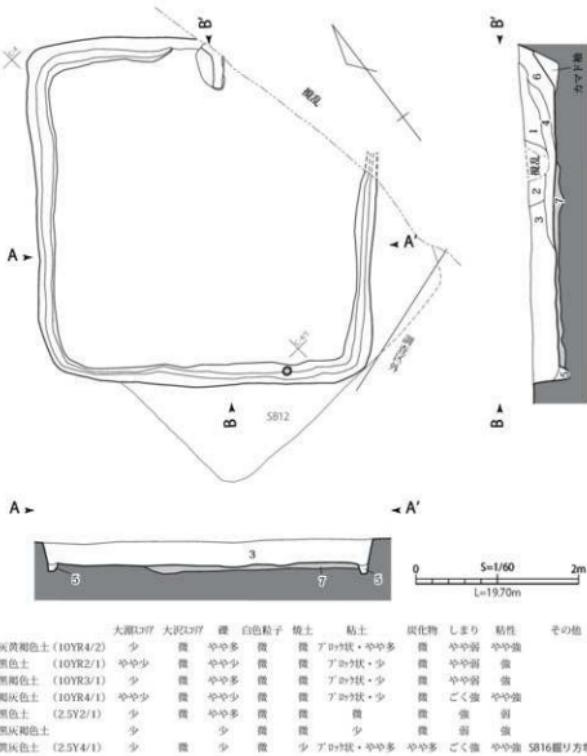
床：部分的に、粘土・焼土を含む黄灰色土によるごく硬質な貼り床が認められる。

カマド：搅乱により大部分を欠損するが、北壁のやや東寄りに位置するとみられる。検出された左袖は黒色土に黄灰色粘土を重ねて構築されたようである。左袖長60cm、左袖幅28cmを測る。

出土遺物（第52図）

10点図示した。

1～3は須恵器高台壺である。1は回転ヘラケズリ調整された底部が高台よりも下へ張り出すタイプで、7世紀末～8世紀初頭（遠江IV期末～V期前半）に位置づけられる。2・3は、回転ヘラケズリ調整された平らな



第50図 SB16

底部の高台杯で、8世紀代（遠江V期）のものである。

4～9は土師器である。4は口縁部が内湾する半球形の杯とみられる。5は壺の底部片で、ナデで整えられた平底である。6は須恵器壺蓋を模倣した片であるが、口縁部と体部の境の後が甘くなっている。7の高环は、丸底の环部と根元からハの字に聞く脚部を有するようである。8・9は遠江型水平口縁甕の口縁部である。

10は砥石で、広い面の1面と1側面を使用している。径約4mmの孔が1ヶ所開けられている。

4～7の土師器と10の砥石は、6世紀後半から7世紀代のものと位置づけられ、本建物跡と切り合うSB12に伴う遺物と考えられる。

## 所見

出土遺物には時期差が認められるが、新しいものを本建物跡に伴うものと捉え、8世紀代の建物跡と考える。

## SB18

### 遺構（第53・54図）

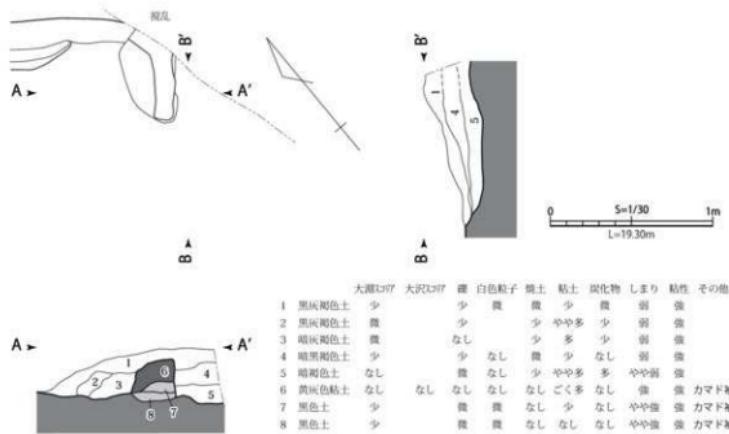
位置：A2・A3・B2・B3 グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB04・SB07→SB18（新）

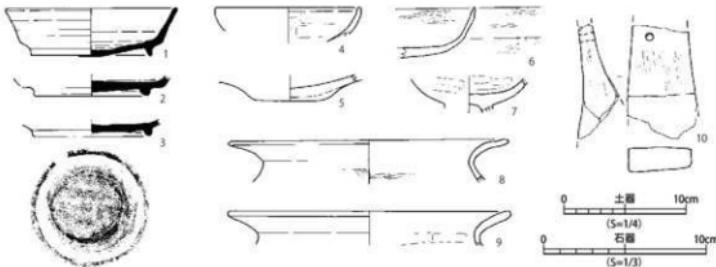
主軸方位：N-22.1°-W

残存状況：北西角付近を南北方向の溝状の搅乱により切られるが、全体としてはおおむね良好に残存している。

主軸（南北）幅3.80m、直交（東西）幅4.28m、検出



第51図 SB16 カマド



第52図 SB16出土遺物

面からの深さ 15 ~ 40cm を測り、平面形は東西にやや長い方形を呈する。

覆土：大潤スコリアを含む暗褐色土の自然堆積層。

壁溝：北壁と南西角を除く、西壁・東壁・南壁で検出された。幅 24 ~ 34cm、深さ 5 ~ 9cm を測る。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

床：掘り方を床面としていた。

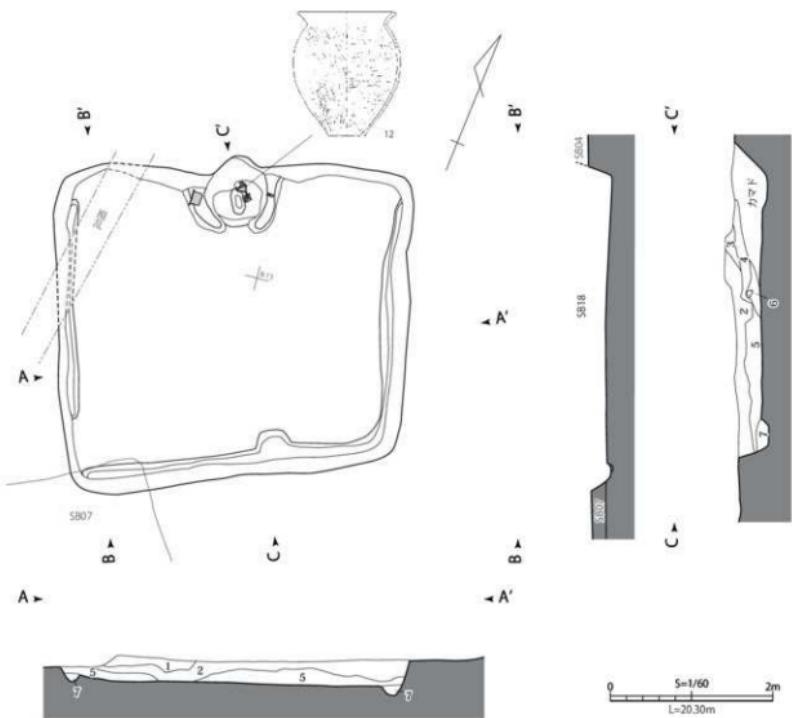
カマド：北壁の中央に位置する。袖に芯材は確認され

ず、暗褐色土と灰黄色粘土で構築されている。全長 95cm、両袖外幅 110cm、燃焼室幅 58cm を測る。

#### 出土遺物（第 55 図）

12 点図示した。

1 は須恵器壺の口縁部で、推定口径は 22.5cm を測る。口縁部は外反し、外面は沈線で帯状に区画され波状文が施される。2 は小破片のため口径の復元はしなかったが、須恵器壺の口縁部と考える。内面に自然釉が掛かる。3・4 は須恵器高台壺の底部である。3 は底部が平らなこと



大潤江口 大沢江口 壺 白色粒子 煙土 粘土 炭化物 しまり 黏性 その他

1 黒色粘質土	微	微	微	なし	なし	強	
2 暗褐色砂質土	少	微	少	やや多	なし	なし	やや強 やや強
3 暗褐色粘質土	微	なし	少	やや多	なし	やや多	カマド粘土の流れ
4 粘土混明褐色土	微	少	質	少	やや多	多	やや強 やや強
5 暗黒褐色粘質土	少	微	少	少	なし	少	やや弱 やや強
6 白色砂質土	少	微	やや多	少	少	やや多	やや弱 やや弱
7 黑褐色砂質土	微	微	なし	少	なし	なし	やや弱 やや弱

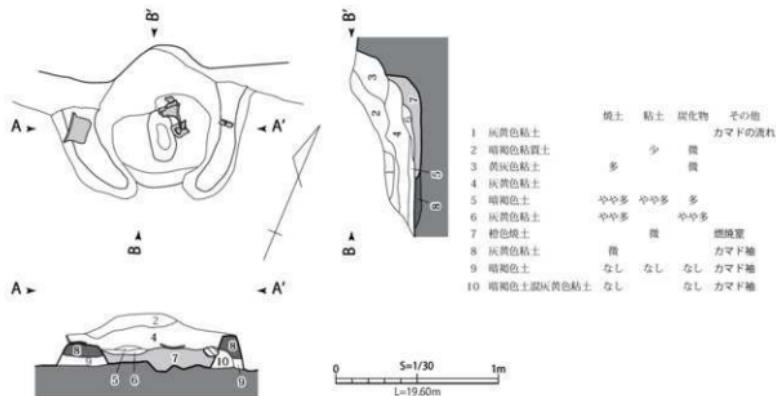
第 53 図 SB18

から8世紀代(遠江V期)に、4は底部が高台の接地面まで張り出していることから8世紀前葉(遠江V期前葉)に、それぞれ位置づけられる。

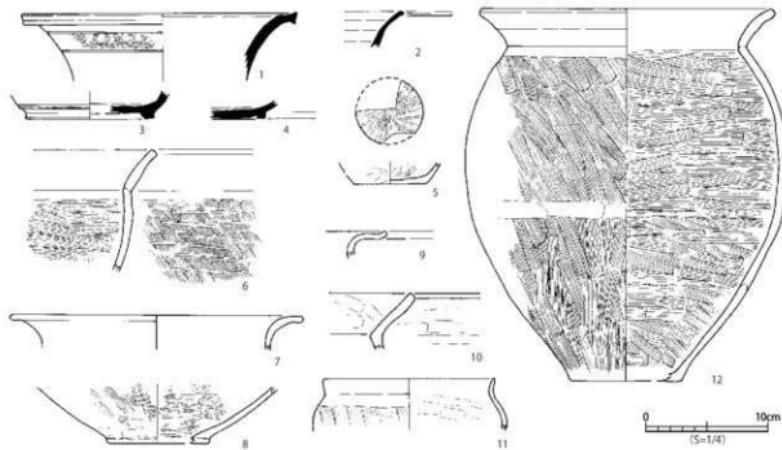
5の土師器環は、外面をナデでなめらかに整え、内面には底部・体部とも放射状のヘラミガキが施されている。

6は土師器の腹東型鍋、胴部内面には横ハケ目調整が、外面には斜ハケ目調整後ヘラミガキが施される。

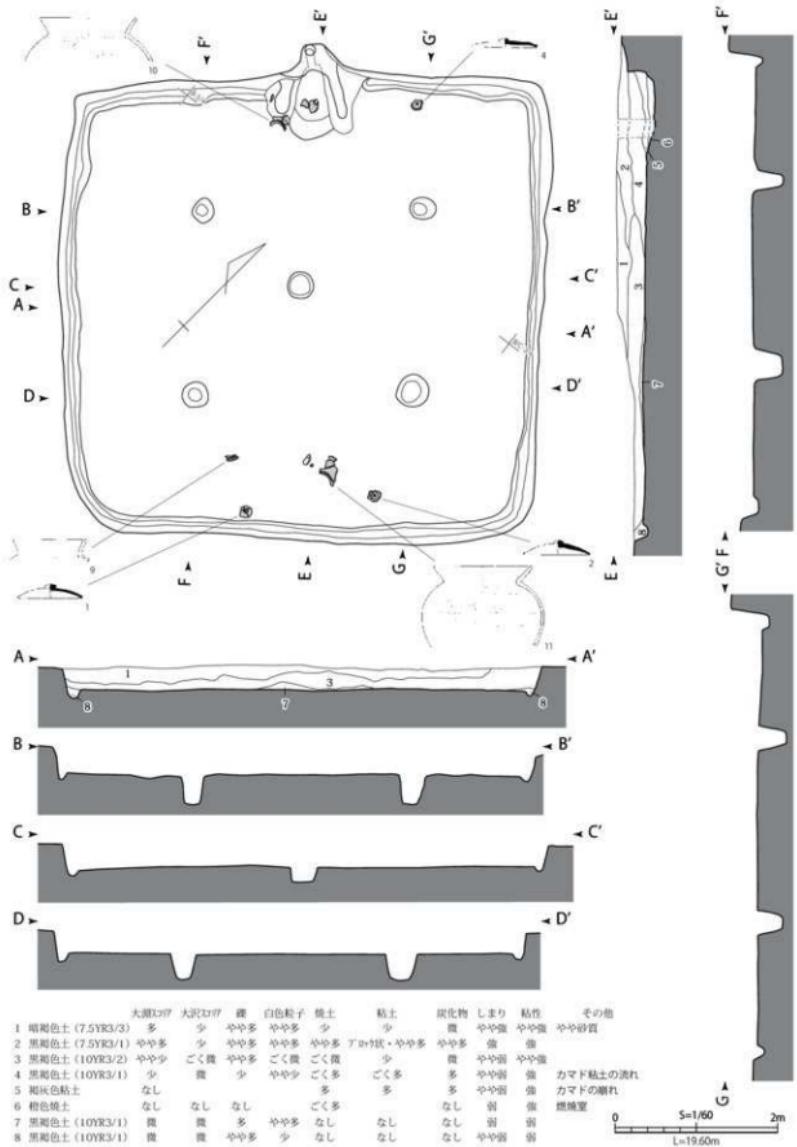
7～12は土師器甕である。7・9は遠江型水平口縁甕の口縁部である。胎土はにぶい黄橙色で雲母が含まれる。8は底部片であるが、胴部が大きく外へ開き、球胸形を呈するとみられる。底部には木葉痕が残り、内面には横ハケ目調整が、外面には斜ハケ目調整後、ヘラナデとヘラミガキが施されている。10は頸部がくの字状に屈曲し、内外ともヘラナデ調整される口縁部片である。



第54図 SB18 カマド



第55図 SB18出土遺物



第56回 SB19

肩部には縦のハケ目調整が認められる。11は短い口縁部がほぼ直立し、肩部が張る小型甕である。胎土は7・9の遼江型水平口縁甕と似て、にぶい黄橙色を呈し雲母を含む。12は胴部内外面をハケ目調整し底部に木葉痕を残す甕であるが、胴部外面にヘラミガキは施されず、やや長胴である。胎土や調整からは腰東型甕と考える。これらの甕は8世紀前半に位置づけられる。

#### 所見

出土遺物から、本建物跡は8世紀前半の遺構と考えられる。

#### SB19

##### 遺構（第56・57図）

位置:A3・B3 グリッド（1地区）

重複関係：（古）SB25 → SB07 → SE01 → SB19（新）

主軸方位：N-45°W

残存状況：良好に残存していた。主軸（南北）幅5.80m、直交（東西）幅6.00m、検出面からの深さ37cmを測り、平面形は方形を呈する。

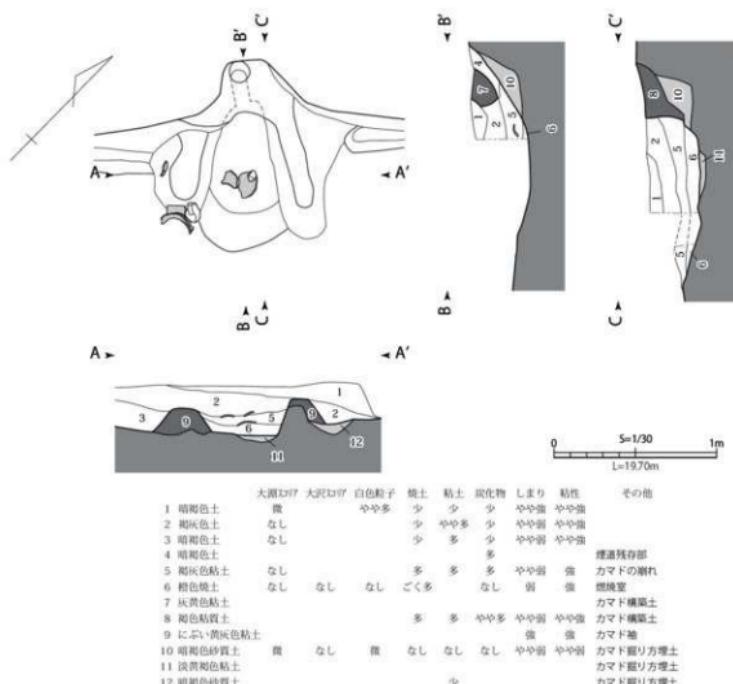
覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土の自然堆積層。

壁溝：幅16～28cm、深さ5～10cmで全周する。

柱穴：5基検出した。径は25～40cm、深さは、四方の4基は25～35cmだが、中央の1基は15cmでやや浅い。その他の遺構：確認されなかった。

床：掘り方を床面としていた。

カマド：北壁の中央に位置する。残存状況は良好で、径12cm、長さ32cmの煙道も残存していた。セクション図には表されていないが、右袖は地山を削り出した上に砂岩の袖石を据えて黄灰色粘土で構築されていた。全長115cm、両袖外幅106cm、燃焼室幅38cmを測る。



第57図 SB19カマド

## 出土遺物（第58図）

15点図示した。

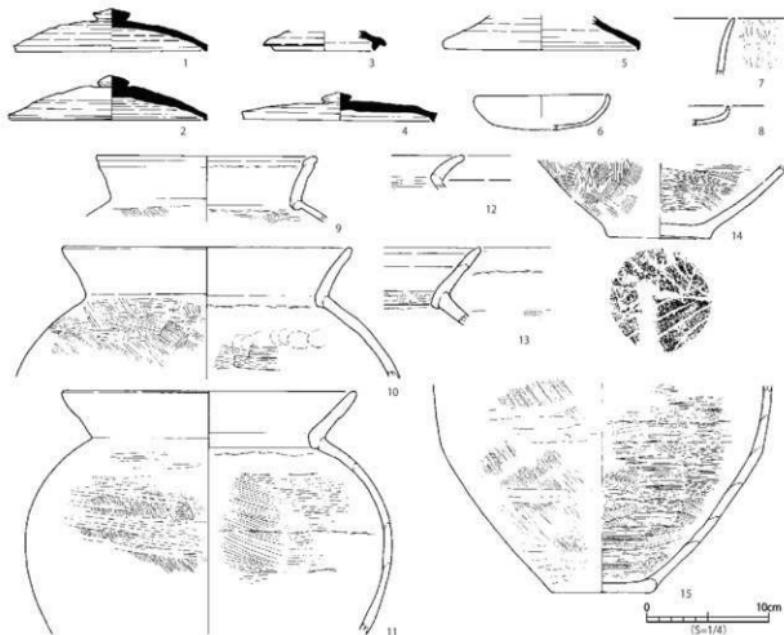
1～5は須恵器の蓋で、1・2・4は返りをもたない摘み蓋である。天井部は回転ヘラケズリされ、宝珠形の摘みがつく。5は破片であるが、おそらくは1・2・4と同様の摘み蓋と思われる。3は返りを有する蓋で、推定器径10.0cmを測る。1・2・4は8世紀代（遼江V期）に、3は7世紀中葉～後葉（遼江IV期）に位置づけられる。6～15は土師器である。6・8は平たい半球状の体部で口縁部が内湾する丸底の坪である。内外面ともナデ調整されている。7は直口壺の口縁部である。外面に縱線のヘラミガキ調整が施される。

6～8の3点は他の遺物よりも古手であることから、SB19に切られているSB25に伴う遺物の可能性がある。

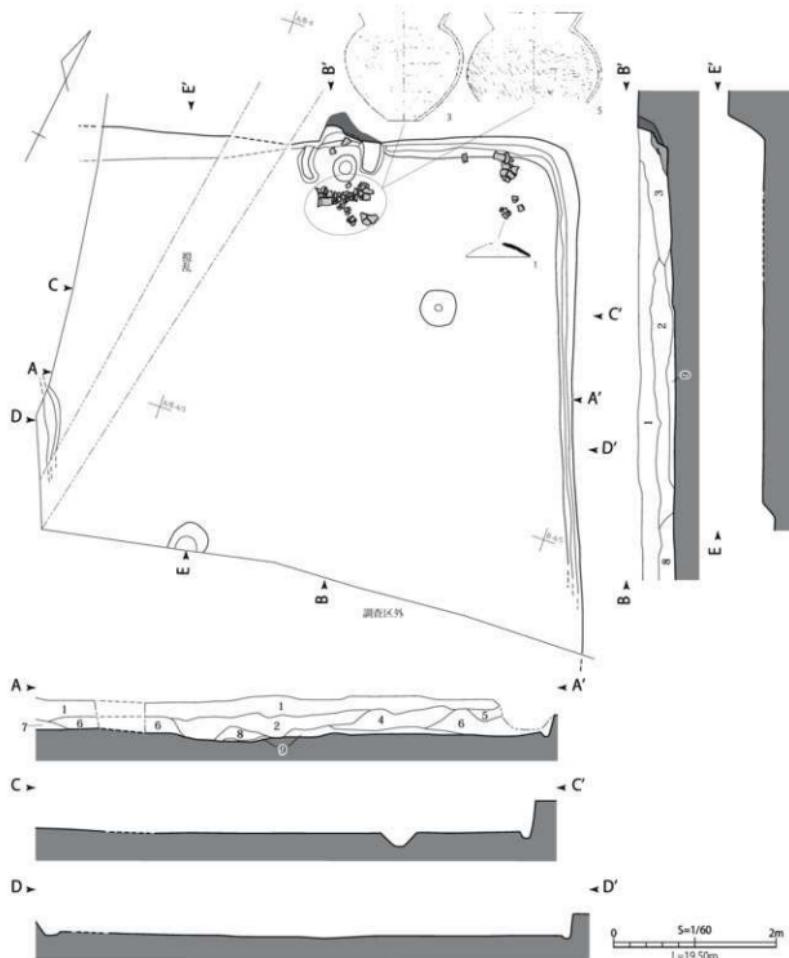
9～15は甕である。9は口縁部内面に粘土を貼り、外面には沈線を巡らせることで、口縁端部を内外面ともに肥厚させたように形作っている。頭部から肩部にかけ

て、斜めハケ目調整後、横ナデ調整されている。胎土が他の甕とは異なり、表面は黄橙色だが芯の部分は黄灰色を呈し、須恵器に似た硬い質感である。10・11は肩部が張り頸部がくの字に屈曲する甕で、肩部外面にはハケ目調整後にヘラミガキが施されている。口縁端部の肥厚は認められない。12の口縁部は外反し、端部がやや細くなっているナデにより丸く仕上げられている。13の口縁部は内側に面をもつように端部が細くなる。肩部外面には斜めハケ目調整が認められる。14・15は胴部下半のみであるが、腹東型の甕である。14は15に比べて底部から胴部への開きが大きく、より球胴となるように思われる。いずれも底部外面には木葉痕が残り、内外面ともハケ目調整され、外面にはヘラミガキが認められる。所見

出土遺物には時期差が認められるが、6～8は切り合うSB25に伴う遺物と考えて、本建物跡の時期は須恵器蓋や腹東型甕などから、8世紀代と位置づけられる。



第58図 SB19出土遺物



大湖口? 大沢口? 褶 白色粒子 焼土 粘土 炭化物 しまり 黏性 その他

1 黒褐色粘質土 (7.5YR3/1)	微	微	少	なし	なし	微	弱	やや弱
2 黒褐色粘質土 (10YR3/1)	微	なし	微	なし	なし	少	弱	やや弱
3 黒色土	やや多	費	やや多	少	なし	なし	やや弱	やや弱
4 黒褐色粘質土 (7.5YR3/1)	少	費	少	少	なし	なし	費	やや弱
5 黒褐色粘質土 (7.5YR3/1)	少	少	少	少	なし	なし	やや弱	やや弱
6 黒褐色粘質土 (7.5YR3/1)	微	微	少	なし	なし	微	やや弱	やや弱
7 黒褐色粘質土 (7.5YR3/1)	費	微	多	なし	なし	なし	やや弱	弱
8 黒褐色粘質土 (7.5YR3/1)	費	微	なし	なし	なし	微	やや弱	やや弱
9 黒褐色粘質土 (10YR2/2)	少	少	少	なし	なし	なし	やや弱	やや弱

第59図 SB20

SB20

遺構（第59・60図）

位置：A4 グリッド（I地区）

重複関係：なし

主軸方位：N-26.5°W

残存状況：西壁・南壁が調査区外にあり、全体の規模は不明である。また、壁や床の一部が南北方向に溝状の複乱を受けている。主軸（南北）検出幅3.20m、直交（東

西）検出幅3.30m、検出面からの深さ40cmを測る。検

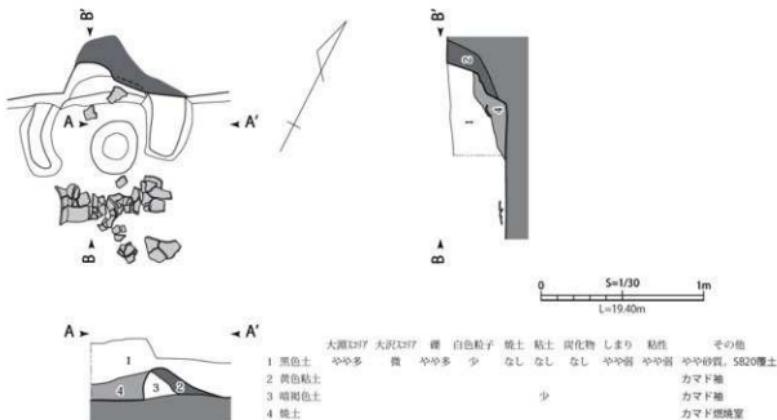
出範囲から推定される平面形は方形である。

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土の自然堆積層。

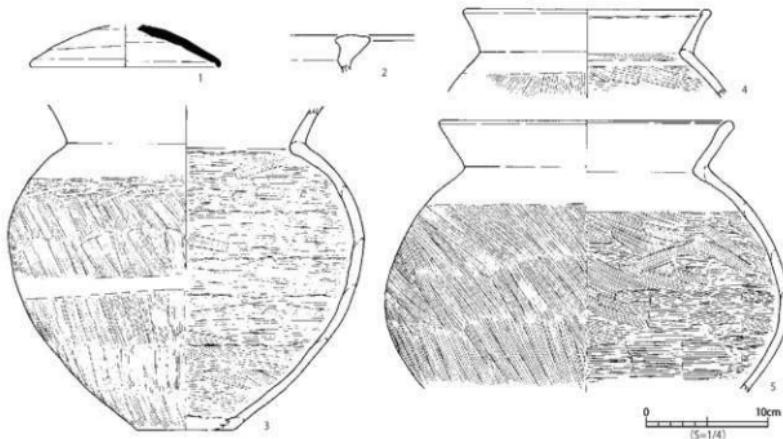
壁溝：北壁の西半部分を除く、検出された壁のすべてで確認された。幅10～15cm、深さ8cmを測る。

柱穴：北東と南西の2基を検出した。径22～24cm、深さ12～16cmを測る。

その他の遺構：確認されなかった。



第60図 SB20 カマド



第61図 SB20 出土遺物

床：掘り方を床面としていた。

カマド：北壁のやや東寄りに位置するとみられる。袖の掘り方は壁構とつながって掘り込まれ、袖に芯材は確認されず、暗褐色土と黄色粘土で構築されている。全長70cm、両袖外幅105cm、燃烧室幅60cmを測る。

#### 出土遺物（第61図）

5点図示した。

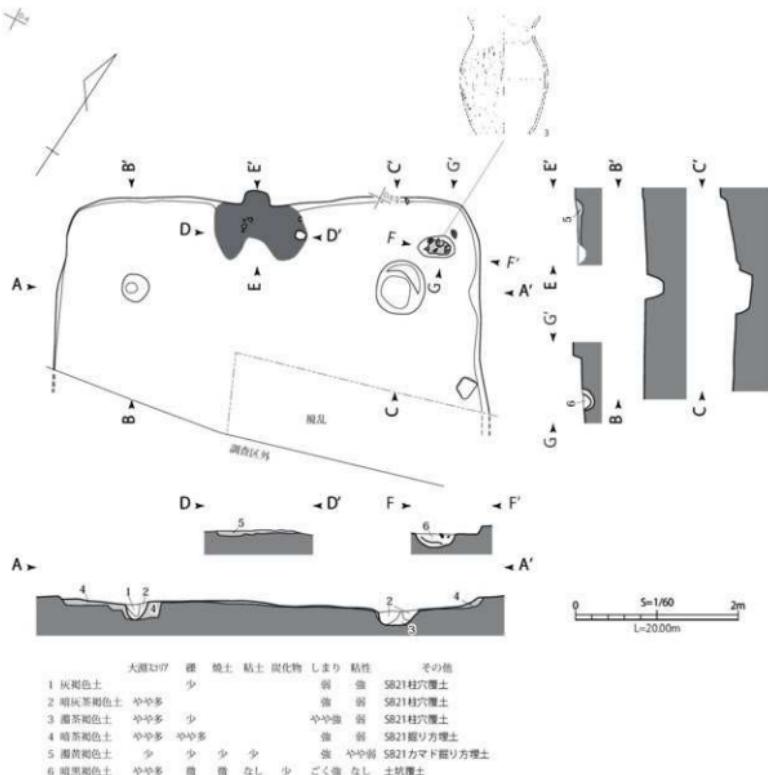
1は返りの無い須恵器壺蓋で、天井部は回転ヘラケズリし、剥離してしまっているが偽みがあったことが確認できる。8世紀代（遠江V期）に位置づけられる。

2は土師器鍋の口縁部片である。口縁部を断面三角形に肥厚させている。3～5は土師器壺である。3は残存部が少ないものの、口縁端部を除いて全体像が復元でき

た。肩部が張り、最大径が胴部の上位に来る球胴の壺である。底部の残存部分に木葉痕は認められず、ナデたようになめらかに整えられている。胴部内外面はハケ目調整され、肩部外面にはヘラミガキも施されている。4は口縁部内面を肥厚させ、端部に沈線を巡らせている。内外面ともハケ目調整され、頸部内側の屈曲部がシャープに丁寧に整えられている。5は胴部下半を欠くが、最大径が胴部中位に来る球胴の壺である。口縁端部を内側に肥厚させ、胴部は内外面ともハケ目調整である。

#### 所見

出土遺物から、本建物跡の時期は8世紀代と考えられる。



第62図 SB21

SB21

## 遺構（第62図）

位置:D4 グリッド（I 地区）

重複関係：（古）SB21 → SH01（新）

主軸方位：N-33.5°-W

残存状況：南半分が調査区外にあり、上部を大きく削平されているため残存部はごく浅い。主軸（南北）検出幅 2.80m、直交（東西）幅 5.20m、検出面からの深さは 1 ~ 10cm ほどである。検出範囲から推定できる平面形は方形である。

覆土：不明である。

壁溝：確認されなかった。

柱穴：北西・北東の 2 基を検出した。径は、北西が 33cm、北東が 65cm、深さはいずれも 20cm である。北西柱穴の掘り方には、貼り床と同じ土が入っている。

その他の遺構：北東角に土坑 1 基を検出した。長径 45cm、短径 26cm、深さ 16cm の楕円形土坑で、土器師甕の口縁～胴部（第63図-3）が横位で出土した。覆土には少量の炭化物が含まれ、ごく固くしまっていた。

床：掘り方の凸凹に暗茶褐色土を入れて平坦面を作り、床としていた。

カマド：北壁の中央にカマドの残存と見られる粘土の広がりと掘り方を検出した。粘土の範囲は全長 90cm、幅 115cm である。

## 出土遺物（第63図）

土師器 5 点を図示した。

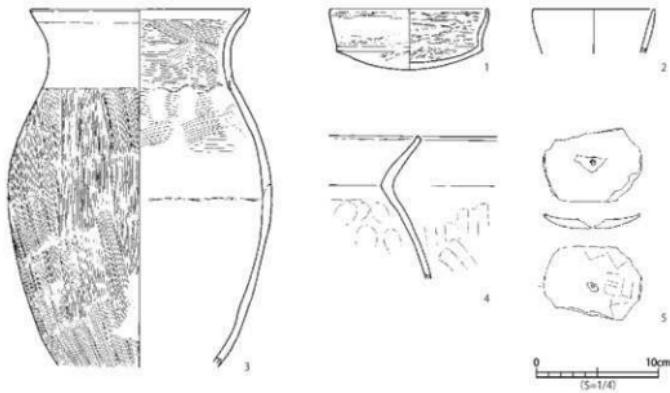
1 は須恵器壺蓋を模倣した壺である。底部は丸底で、体部と口縁部の境に明瞭な棱をもち、体部高よりも長い口縁部は緩やかな S 字を描いて端部が内湾する。須恵器壺蓋を比較的忠実に模倣したものとみられ、6世紀前半に位置づけられる。2 は直口壺の口縁部である。

3・4 は甕である。3 は頸部が強く屈曲せず、外反する口縁部から長胴の胴部へと緩やかな S 字を描いている。山梨県や神奈川県などの関東地方西部にみられる長胴甕と形態的に近いようである。4 は頸部の屈曲がくの字を描き、肩部はあまり張らずにまで肩状となる。いずれも 6世紀前半に位置づけられると考える。

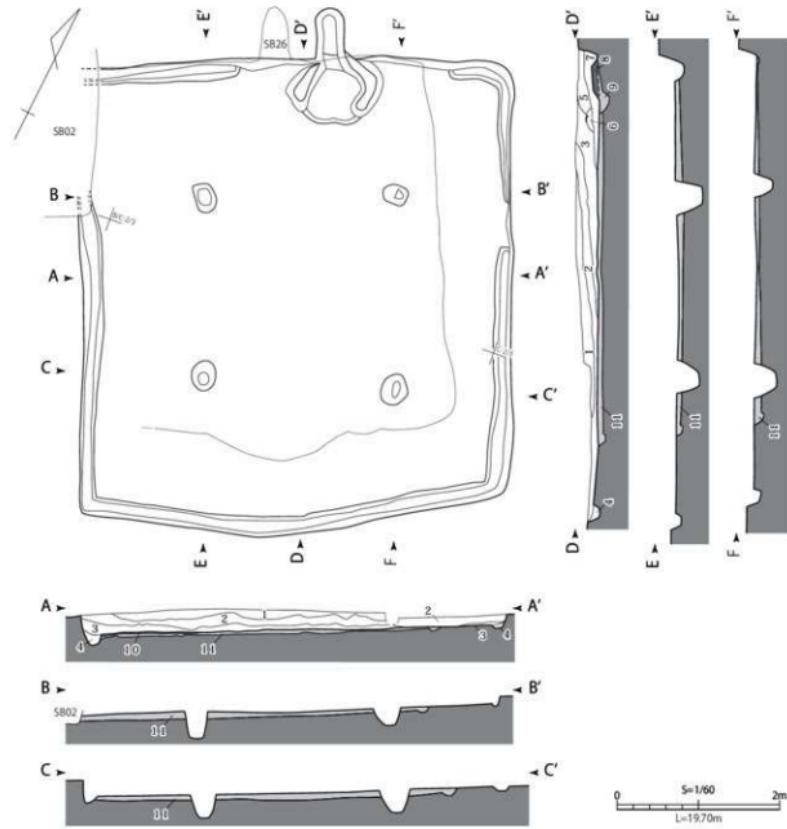
5 は壺の底部片で、土器焼成後、丸底の底部に外面から打圧を加えて穿孔している。

## 所見

出土遺物から、6世紀前半の建物跡と考える。



第63図 SB21 出土遺物



	大源川77	大沢川77	種	白色粘土	燒土	粘土	炭化物	しまり	粘性	その他
1	暗褐色土	(7.SYR3/3)	やや多	少	多	ごく微	ごく微	ごく強	強	やや強
2	暗赤褐色砂質土	(5YR3/2)	やや多	少	多	少	少	少	ごく強	やや弱
3	黒褐色砂質土	(7.SYR2/2)	やや多	少	多	少	少	少	少	やや弱
4	灰褐色砂質土	(7.SYR4/2)	やや少	なし	少	やや多	なし	なし	弱	やや強
5	黒褐色砂質土	(2.5YR3/2)	やや多	なし	やや多	少	多	多	やや弱	やや弱
6	黒褐色砂質土	(1.0YR2/2)	ごく強	なし	少	少	なし	ごく少	少	やや弱
7	オリーブ褐色土	(2.5Y4/4)	無	少	少	やや多	ごく多	微	やや強	力マドの流れ
8	暗オリーブ色粘土	無	なし	なし	なし	少	ごく強	やや強	強	力マド補
9	暗褐色土	無	無	やや多	少	多	やや多	なし	やや弱	やや強 力マド掘り方理土
10	褐色粘質土	(7.5YR4/4)	ごく強	なし	少	多	多	多	強	強 5B22床面構造土
11	黒褐色粘質土	(5YR2/2)	ごく強	なし	少	少	なし	なし	ごく強	強 5B22床面構造土

第64図 SB22

## SB22

遺構（第64・65図）

位置：B2・C2 グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB26 → SB22 → SB02（新）

主軸方位：N-26.6°-W

残存状況：北西角を SB02 に切られるが、その他は良好に残存していた。主軸（南北）幅 5.80m、直交（東西）幅 5.30m、検出面からの深さは 30cm である。平面形は方形であるが、南壁の中央がやや外へ張り出しており、第4次調査でみられた「五角形 A」ともいえる。

覆土：大淵スコリアを含む自然堆積層。

壁溝：カマド両側と東壁の一部で途切れるが、残存部のほぼ全ての壁に認められる。幅 24cm、深さ 12cm である。

柱穴：4 基検出された。建物のプランに対して整然と配されている。径は 25 ~ 40cm、深さは 22 ~ 34cm である。その他の遺構：確認されなかった。

床：SB22 は SB26 の造り替えと考えられ、SB26 のプランよりも東へ 80cm、南へ 90cm ほど拡張している。プランが重なる部分は、SB26 の床に褐色土を入れて貼り床としているが、拡張された部分は掘り方か味面である。カマド：北壁のやや東寄りに位置する。煙道の残存状況からみると、SB26 を SB22 に造り替える際にカマドの位置も東へ 70cm ほど移動している。上部は削平されていたが、煙道・袖・燃焼室が残存していた。左袖は SB26 カマドをつぶした後に粘土を用いて作られていたが、右袖の残存部は地山の削り出しのようであった。袖の芯材は検出されなかった。煙道は長く、壁から外へ 60cm のびており、煙道端から燃焼室端までの全長は 140cm、両袖外幅は 60cm、燃焼室幅は 30cm である。

出土遺物（第66図）

土師器を 9 点図示した。

1 ~ 6 は壺である。1 は須恵器壺身を模倣した壺で、推定器径 14.5cm を測り、口縁部が受部より 1cm ほど高く出る器形から、須恵器壺身 D1 型式に近いものとして、6世紀後半（遼江中期中葉）に位置づけられる。2 は底部が大きく剥離しているが、口縁部が内湾し体部が半球形を呈するものとみられる。内面には放射状に丁寧なヘラミガキが施されている。3 ~ 6 は須恵器壺蓋を模倣した壺で、体部と口縁部の境の棱が明瞭で口縁部が外へ開くもの（4）、体部と口縁部の境の棱が明瞭で口縁部が外に開き端部が内湾するもの（5・6）、体部と口縁部の

境の棱がやや不明瞭で口縁端部が内湾するもの（3）がある。

7 は高壺の壺部と脚部の接合部分の破片である。脚部の器壁は薄く、根元からハの字状に広がるようである。

8 の壺は頸部がくの字に屈曲し、口縁端部が断面三角形に肥厚するものである。

9 は腰盤型の壺の底部である。全形は不明だが、あまり胴が張らない形になるようみえる。

所見

出土遺物から、本建物跡の時期は 6世紀後半と考える。

## SB26

遺構（第67図）

位置：B2 グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB26 → SB22 → SB02（新）

主軸方位：N-26.6°-W

残存状況：SB22 へと造り替えられた建物跡と考えられ、煙道と壁溝で確認された。平面形は、南壁の中央付近が半円形に外へ 40cm ほど張り出、やや変形した方形である。第4次調査でみられた「五角形 B」ともいえる。主軸（南北）最大幅 4.90m、直交（東西）幅 4.40m である。

壁溝：カマド部分を除き、検出部分は全周していた。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

床：掘り方を床としていたと考えられる。

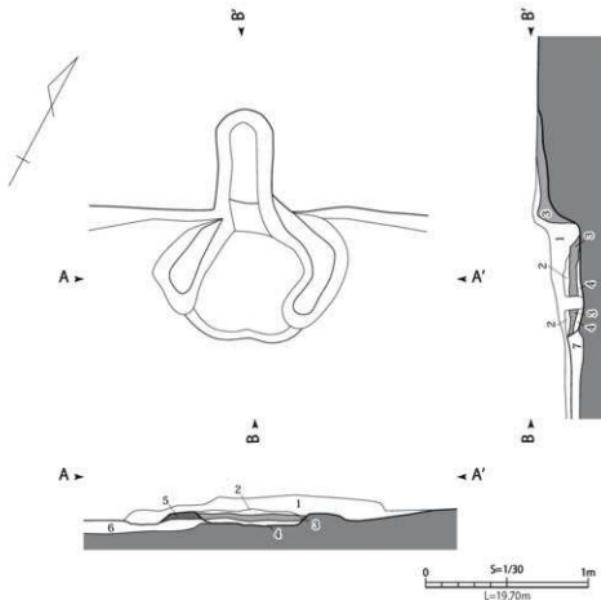
カマド：北壁や東寄りに位置する。建物の造り替え時に壊されたものとみられ、煙道と掘り方のみが検出された。煙道は長く、壁から外へ 60cm ほどのびている。

出土遺物（第68図）

土師器壺を 1 点図示した。体部と口縁部の境に明瞭な棱をもち、口縁部は外へ開き、口縁端部が内湾する壺である。丁寧なヘラミガキ調整の後、内面には黒色処理が施されている。6世紀後半に位置づけられる。

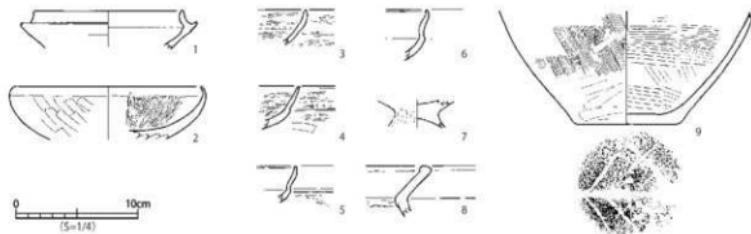
所見

遺構の検出状況および出土遺物から、本建物跡は SB22 へと造り替えられたものと考えられ、SB22 と同時期（6世紀後半）に位置づけられる。

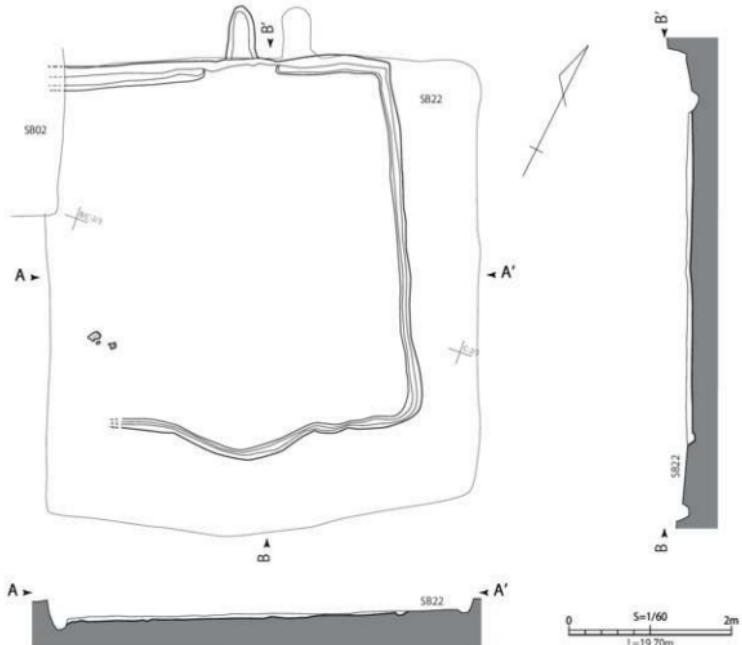


	大頭30g	大沢30g	礫	白色粘土	燒土	粘土	炭化物	しまり	粘性	その他
1 オリーブ褐色土	微	少	少	やや多	ごく多	微	やや強	やや強	カマドの流れ	
2 喀斯特土	ごく微	微	少	やや多	やや多	なし	強	やや強		
3 粗色燒土	なし	なし	なし	ごく多	少	多	やや弱	やや強		
4 喀斯特土				やや多	やや多					
5 黒オリーブ色粘土	なし	なし	なし	なし	少	ごく微	やや強	強	カマド堆	
6 喀斯特土	微	微	やや多	少	多	やや多	なし	やや弱	やや強	カマド籠り方理土
7 黒褐色粘質土 (SYR2/2)	ごく微	なし	少	少	なし	なし	なし	なし	なし	SB26籠り方理土

第65図 SB22 カマド



第66図 SB22 出土遺物



第67図 SB26



第68図 SB26出土遺物

## SB23

## 遺構（第69図）

位置：C3・C4 グリッド（I 地区）

重複関係：（古）SB24 → SB23（新）

主軸方位：N-44.2°-W

残存状況：上部が全体的に削平され、壁溝と柱穴、カマド掘り方のみが検出された。主軸（南北）幅 5.60m、直交（東西）幅 3.90m、検出面からの深さは 2～5cm、南北に長い方形の建物跡である。

覆土：大體スコリアを含む暗茶褐色土の自然堆積層。

壁溝：幅 15～25cm、深さ 5～10cm で全周する。

柱穴：4 基検出された。径は 25～35cm、深さは 10～15cm である。

その他の遺構：検出されなかった。

床：掘り方を床としていたとみられる。

カマド：北壁の中央に掘り方が確認されたが、規模や構築方法は不明である。

## 出土遺物

固化できる遺物は無かった。

## 所見

遺構の時期は特定できない。

## SB24

## 遺構（第70図）

位置:C3・C4グリッド（1地区）

重複関係：（古）SB24→SB23（新）

主軸方位：N-18.0°-W

残存状況：SB23に北壁と床面の大部分を切られ、また上部が全体的に削平されており、壁溝だけが検出された。

主軸（南北）幅4.40m、直交（東西）幅4.25m、検出面からの深さは2cmで、平面形は方形である。

覆土：壁溝内には大湖スコリアを含む暗黒褐色土が堆積していた。

壁溝：検出されたのは幅15～20cm、深さ1～5cmで、

カマドがあったとみられる北壁西寄りの一部が途切れるが、あとは全周するようである。

柱穴：確認されなかった。

その他の遺構：確認されなかった。

床：不明である。

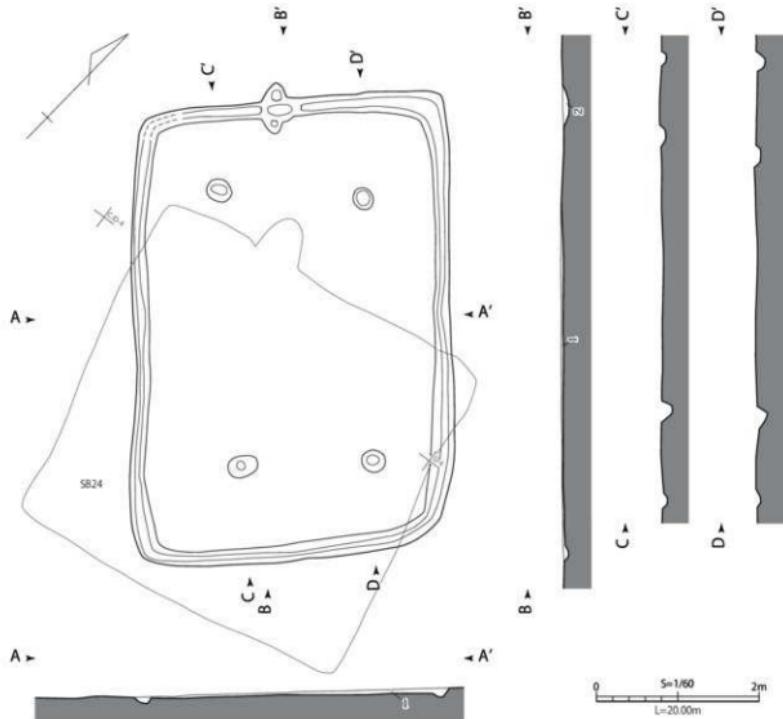
カマド：壁溝が途切れる北壁の西寄りに位置したとみられるが、規模や構築方法は不明である。

## 出土遺物

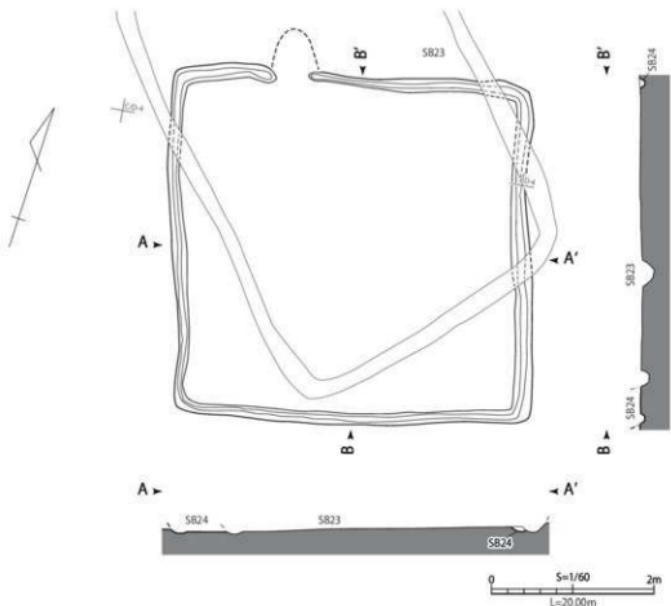
園化できる遺物は無かった。

## 所見

遺構の時期は特定できない。



第69図 SB23



第70図 SB24

## SB25

遺構（第72図）

位置：B3・B4グリッド（I地区）

重複関係：(古)SB25→SB07→SB19(新)

主軸方位：N-15.6°-W

残存状況：SB07とSB19に西壁・北壁と床面の広範囲を切られ、また搅乱により南東角・南西角を欠損する。

主軸（南北）幅8.10m、直交（東西）幅7.30m、検出面からの深さは15～25cmで、推定される平面形は方形である。

覆土：大體スコリアを含む黒褐色砂質土と暗褐色砂礫質土の自然堆積層。

壁構：検出された壁のほぼ全てで確認された。幅16～24cm、深さ5cmである。

柱穴：4基検出された。径は32～40cm、深さは25～35cmである。

その他の遺構：確認されなかった。

床：掘り方を床面としていた。

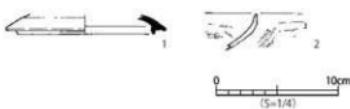
カマド：検出されなかった。

出土遺物（第71図）

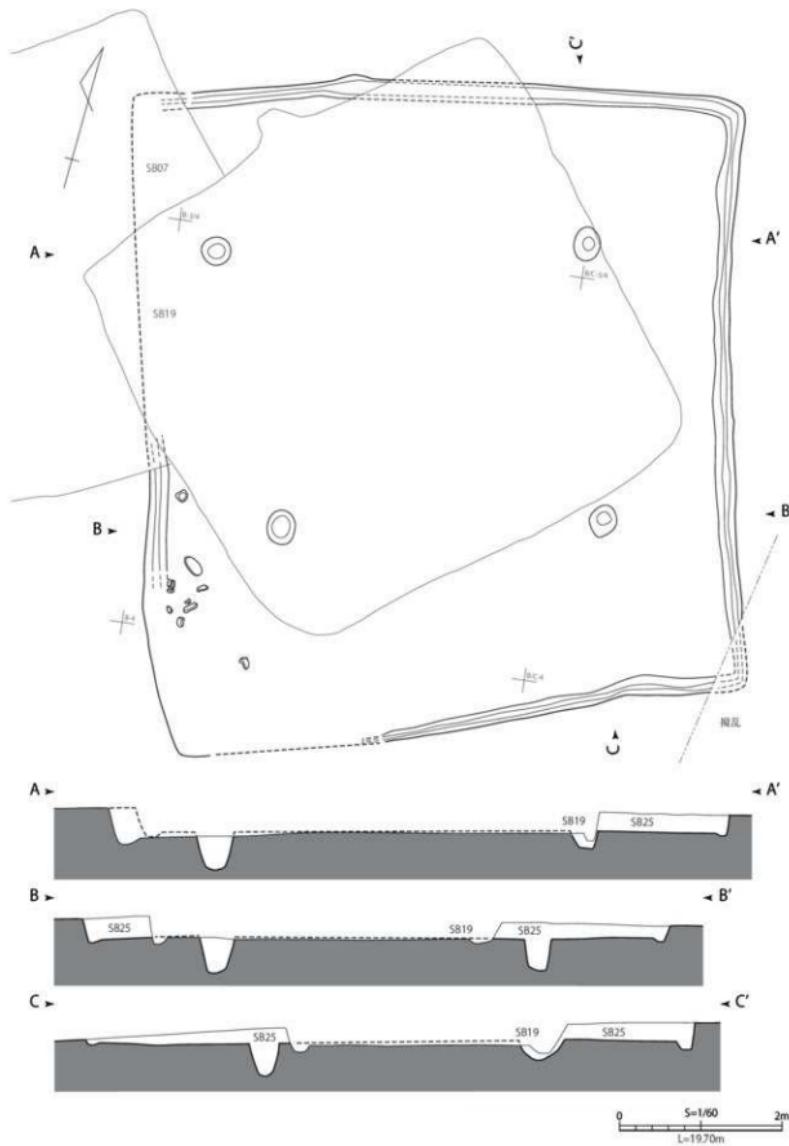
2点図示した。1は返りを有する須恵器壺蓋で7世紀中葉～後葉（遠江IV期）に位置づけられる。2の环は、外面をヘラケズリした後、内外面ともヘラミガキしている。半球形の体部と内湾する口縁部の境にはヘラケズリによる弱い棱が認められる。須恵器壺身を模倣した环とすると6世紀後半に、椀とすると7世紀前半に位置づけられる。

所見

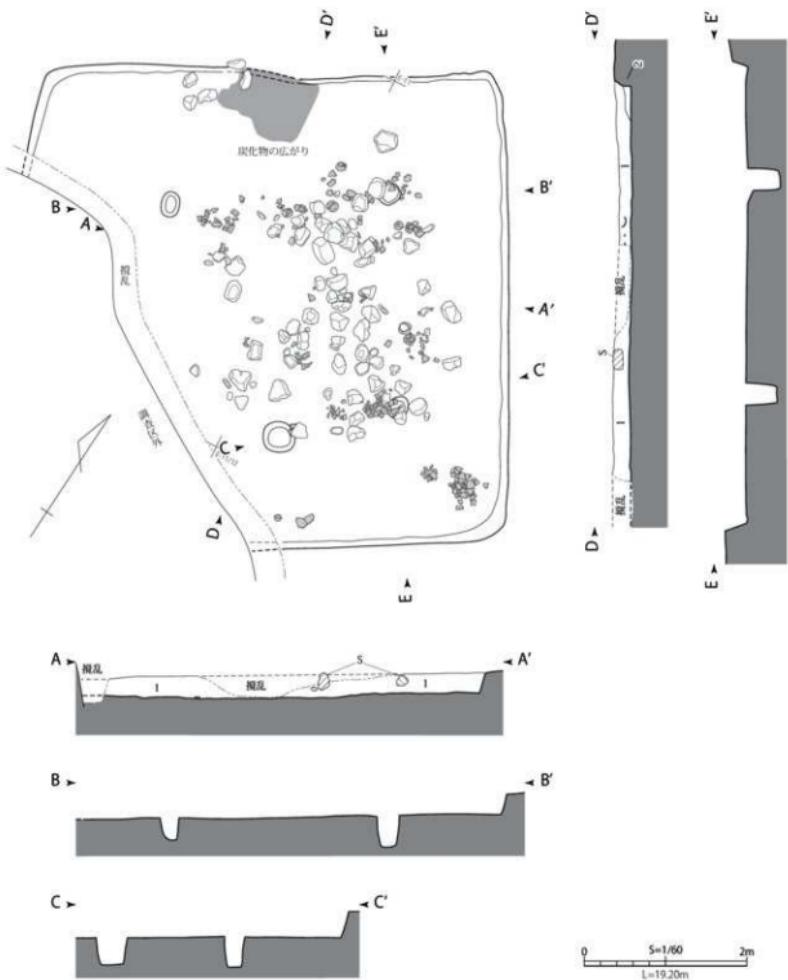
図示できた遺物が少ないが、出土遺物および遺構の切り合い関係からは、6世紀後半の建物跡と考えられる。



第71図 SB25出土遺物



第72図 SB25



1 暗褐色土 (2.5YR2/1) 少  
白色粒子 炭化物 しまり 黏性  
2 黒褐色土 (5YR1/1) 少  
なし なし 微 多 やや弱 ごく強

## SB27

遺構（第73・74図）

位置:D11・E11 グリッド（II地区）

重複関係：なし

主軸方位：N:33.4°-W

残存状況：南西角は調査区外にあり、調査区の壁に沿って溝状の搅乱を受けているが、検出された部分は良好に残存していた。主軸（南北）幅5.75m、直交（東西）幅5.90m。検出面からの深さは30cmである。検出部分から推定される平面形は方形である。

覆土：大淵スコリアを含む暗褐色土の自然堆積層。

壁溝：検出されなかった。

柱穴：4基検出されたが、すべてを主柱穴とするには位置が偏っているため、南西の主柱穴は調査区外に位置する可能性がある。径は25～30cm、深さは30～40cmである。

その他の遺構：遺構は検出されなかったが、床面に多数の土器と礫が散乱していた。

床：掘り方を床面としていたようである。

カマド：確認されなかった。覆土中には粘土が一切確認

されていないが、北壁中央に南北70cm、東西120cmの範囲で泥状の炭化物の広がりが検出されており、ここに何らかの燃焼施設があった可能性が考えられる。

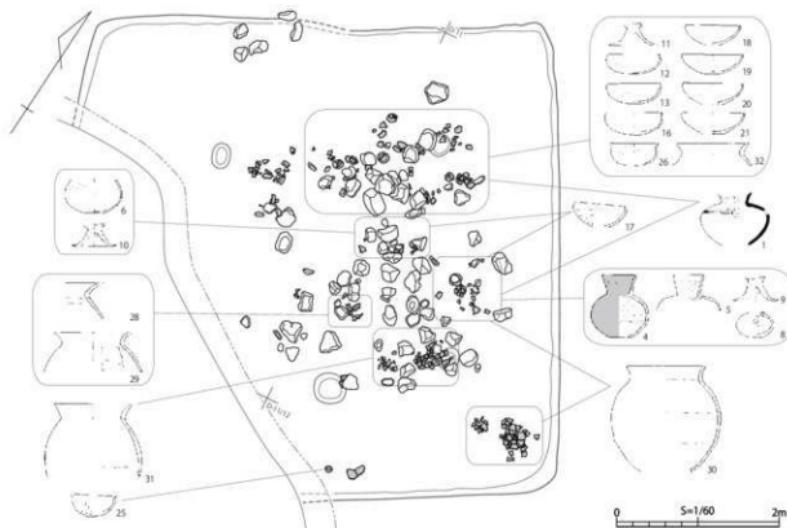
出土遺物（第75図）

33点図示した。1～3が須恵器、4～33が土師器である。

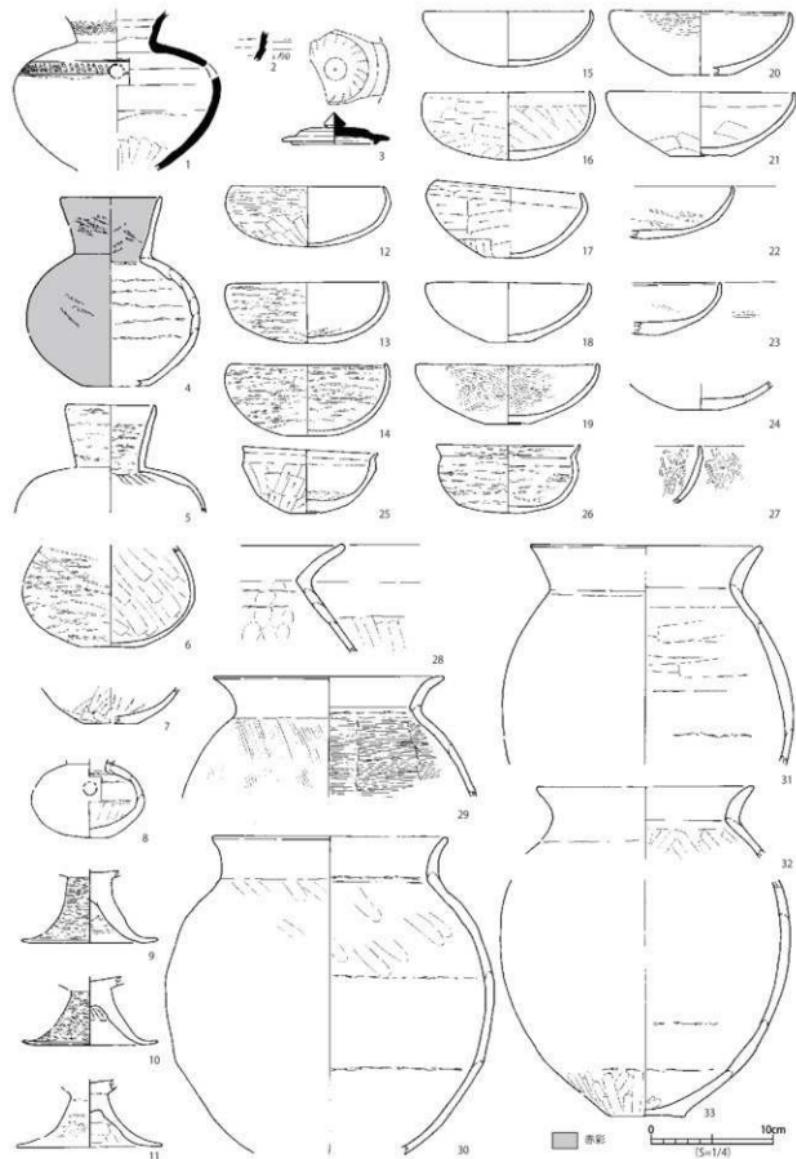
1のハソウは、底部と口縁部が失われているが、体部最大径（肩部径）17.0cm、頸部径6.4cmを測る大型のものである。頸部には柳描波状文が、肩部には2条の沈線で区画された文様帯がめぐる。鈴木敏則氏によりTK208併行と位置づけられている（鈴木1999）。2は小破片であるが、突帯状の棱と柳描波状文が認められ、半球形環部高窓とみられる。遠江編年の三期後葉（6世紀末葉）に位置づけられる。3の蓋は、断面三角形の摘みが付き、平らな天井部に櫛齒状の押圧痕が放射状にはどこされている。推定天井部径8.9cm、推定口径6.7cm、器高2.7cmを測り、長頸壺の蓋と考えられる。

4・5は直口壺である。4の体部はやや平たい球形を呈し、外面全面および口頭部内面に赤彩が施されている。

5の体部は下半を欠くが、4よりも平たくつぶれた球形



第74図 SB27 遺物・礫の出土状況



第75図 SB27出土遺物

を呈するようである。6・7も壺の体部で、6の体部形状はやや下彫れである。

8のハソウは口頸部が失われているが、平底で最大径を体部中位にもつ、丸みのあるソロバン玉のような体部形で、須恵器の遼江編年1期末葉のものに近い。9・10・11はいずれも环部を欠くが、ハの字状を呈する高杯の脚部である。外面には横ヘラミガキが施される。

12～23の环は形状から、丸底・半球形の体部で口縁部が内湾するもの（12～16・22・23）、平底で半球形の体部と内傾する口縁部の境が屈曲するもの（17）、木葉痕の残る平底で半球形の体部となるもの（18～21）に分けられる。24は口縁部を欠くが、木葉痕のない平底の环である。

25～27は椀である。25は小さな平底に半球形の体部をもち、口縁部が短く外反する。26は丸底で、ややつぶれた半球形の体部と外反する口縁部の境が屈曲している。27は体部から口縁部にかけての破片であるが、深い体部と内傾する口縁部の境に不明瞭な棱を有する。28～33は甌である。28～32はいずれもくの字状口縁部の甌である。28は口縁部と肩部が直線的なくの字を呈する。29～32は口縁端部が先細りになって外反し、肩部もなで肩ではあるが丸みをもつ。胸部形態は、29・30が球胸、31・33はやや長胸となるようである。

#### 所見

出土遺物から、5世紀後半の建物跡と考える。

#### SB28

##### 遺構（第76図）

位置：E10・E11 グリッド（II地区）

重複関係：なし

主軸方位：N-11.8°-W

残存状況：北半分が調査区外にあり、複数も受けているが、検出された部分は良好に残存していた。主軸（南北）検出幅4.80m、直交（東西）幅7.50m、検出面からの深さ25～30cmで、推定される平面形は方形である。

覆土：自然堆積層である。

壁溝：検出された壁のすべてで確認された。幅30cm、深さ5～10cmである。

柱穴：南東と南西に位置する2基が検出された。径は25～40cm、深さは16～28cmである。北東・北西の2基は調査区外に位置するものとみられる。

その他の遺構：検出されなかった。

床：掘り方を床面としていたようである。

カマド：検出されなかった。調査区外に位置するものとみられる。

#### 出土遺物（第77図）

土師器3点を図示した。1は、体部と口縁部の境にやや不明瞭であるが棱をもち、口縁部は外に開いて端部が内湾する环である。2の高杯は环部が失われているが、脚部は太く短く、中位から裾広がりにラッパ状に開いていく。外面は縱位にヘラケズリした後、横方向のヘラミガキ調整が施されている。内面は斜方向にヘラケズリしている。3の甌は底部に木葉痕を残し、外表面をハケ目調整している。胎土はにぶい橙色で、やや粗く、白色粒子、黒色粒子、雲母などを多く含む。

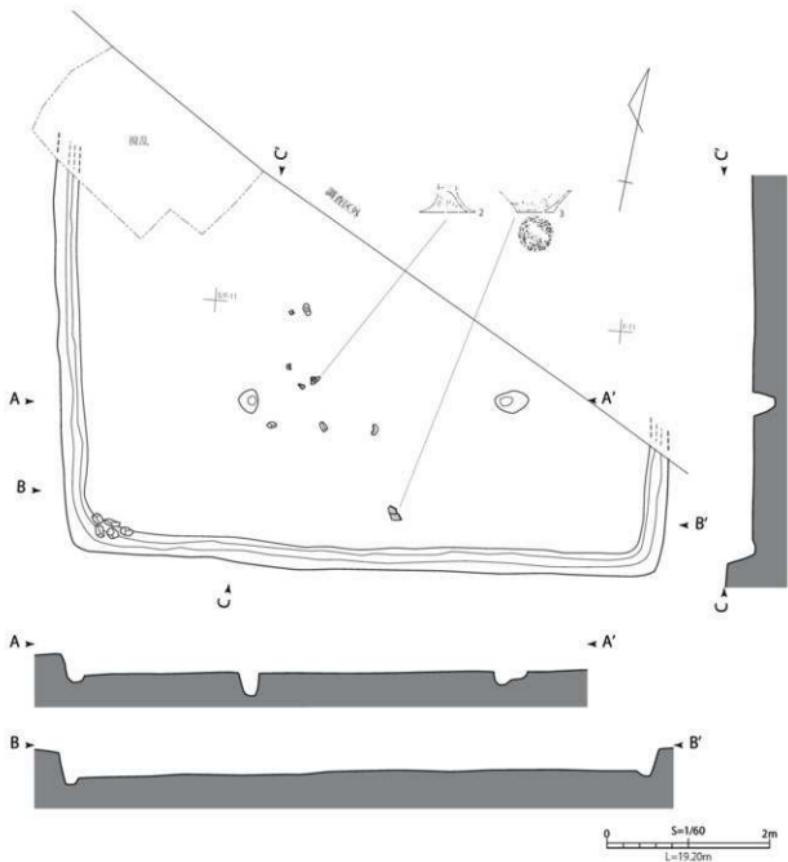
#### 所見

図化した点数は少ないが、出土遺物から6世紀後半～7世紀前半の建物跡と考える。

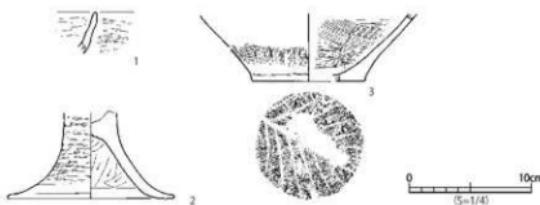
#### 参考文献

鈴木敏則1999「静岡県内における初期須恵器の流通とその背景」『静

岡県考古学研究』No.31 静岡県考古学会



第 76 図 SB28



### 第3節 掘立柱建物跡

SHO1

遺構（第78図）

位置:D3・D4・E3・E4 グリッド（I地区）

重複関係：不明

主軸方位：N-58.4°-W

残存状況：南角に位置する3基の柱穴は検出されなかつたが、9基の柱穴を検出し、3間×3間の方形建物と推定される。柱穴間は芯々で1.75～2.00m、建物の規模は、北東辺が5.52m、北西辺が5.10mである。

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土が堆積していた。

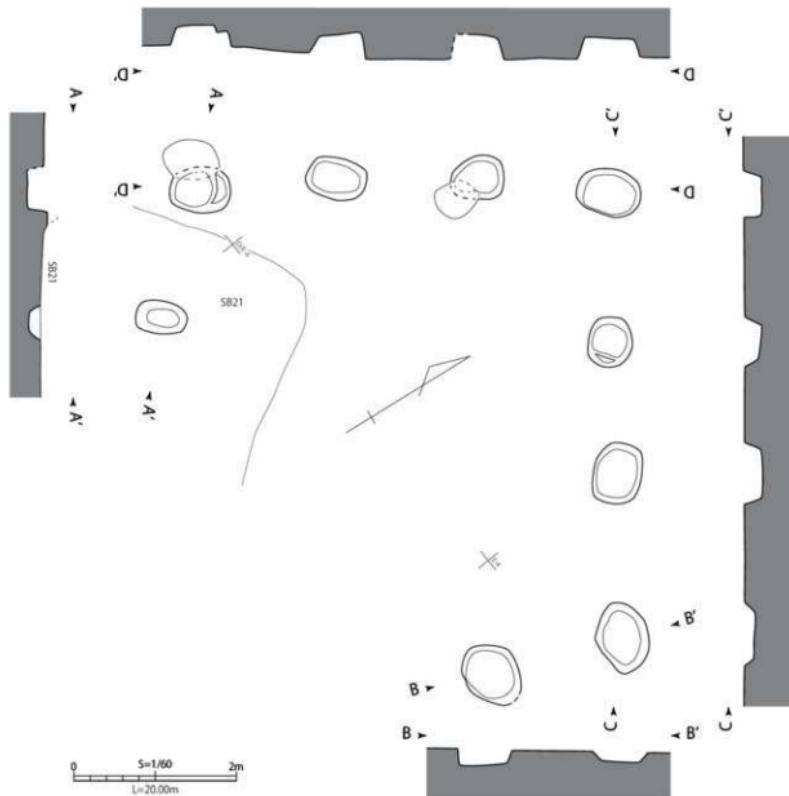
柱穴：柱穴の平面形は梢円形で、規模は長軸が54～88cm、短軸が40～64cm、検出面からの深さは11～25cmである。

出土遺物

図化できる遺物は無かった。

所見

SB21と重複するが、切り合ひ関係については不明であるため、本遺構の時期は特定できない。



第78図 SHO1

SH02

## 遺構（第79図）

位置:C3 グリッド（1地区）

重複関係：（古）SH02 → SB05（新）

主軸方位：N-34.9°-W

残存状況：北東辺の上部をSB05に切られ、西角に位置する柱穴1基を複数で欠損するが、3間×3間の方形建物と推定される。柱穴間は芯々で1.40～1.60m、建物の規模は、北東辺が4.35m、南東辺が4.20mである。

覆土：大瀬スコリアを含む。東角の1基では柱痕とみ

られる黒色土が確認された。

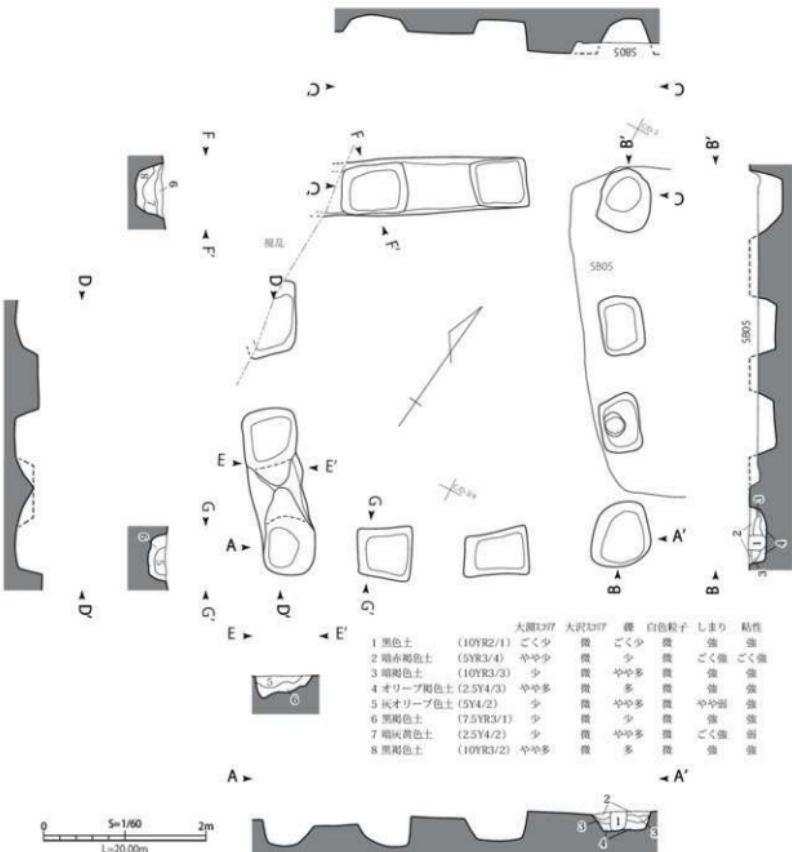
柱穴：柱穴の平面形は多くが方形、あるいは隅丸方形で、北西辺と南西辺の柱穴は溝状に掘りくぼめられた中に掘り込まれている。柱穴規模は長軸が80～68cm、短軸が72～50cm、検出面からの深さは30～40cmである。

## 出土遺物

固化できる遺物は無かった。

## 所見

調査時の所見によれば、切り合い関係ではSB05より古いとみられるため、8世紀代以前の遺構と考えられる。



第79図 SH02

## SH03

## 遺構（第80図）

位置：A1 グリッド（I地区）

重複関係：なし

主軸方位：N-22.1°-E

残存状況：7基の柱穴を検出した。北側が調査区外にあるため全体の規模は不明だが、東西2間、南北3間以上の長方形建物と推定される。柱穴間は芯々で1.40～2.10m、南辺の長さは3.80mである。

柱穴：柱穴の平面形は円形で、径は30～45cm、検出

面からの深さは15～35cmである。西辺よりも東辺の柱穴のほうが浅い。

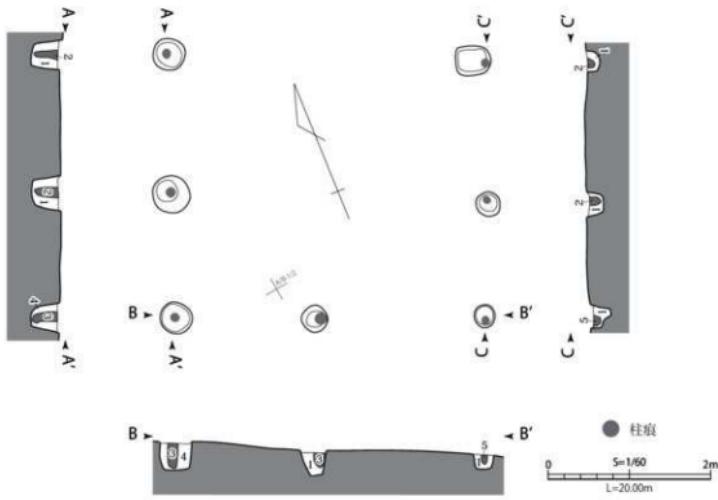
覆土：1・4層は水田の土に似る。柱痕部分（2・3・5層）には粘土が多く含まれている。

## 出土遺物

図化できる遺物は無かった。

## 所見

他の遺構よりも上層で検出されており、少なくとも中世以降の建物跡と考えられる。



- |   | 縦                | 粘土 | 炭化物 | しまり | その他 |
|---|------------------|----|-----|-----|-----|
| 1 | 黒褐色粘質土 (10YR2/3) | 少  |     |     | やや固 |
| 2 | 黒褐色粘質土 (10YR2/2) | 少  | 多   | ごく少 | やや固 |
| 3 | 暗灰黄色粘土 (2.5Y4/2) |    |     |     |     |
| 4 | 暗褐色粘質土 (10YR3/3) |    |     |     |     |
| 5 | 黒褐色粘質土 (10YR2/2) | 多  | ごく多 |     |     |

第80図 SH03

## 第4節 集石遺構

SS01

遺構（第81図）

位置:A3 グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB07 → SS01 → SE01（新）

残存状況：西側を溝状の搅乱で欠損しているが、東西1.45m、南北2.10m、深さ20cmほどの不定形のくぼみと、その上部に東西1.45m、南北1.50mの範囲の集石が検出された。断面観察により、SB07 カマドの構築粘土が流れられた上に作られていることが確認されている。

覆土：大淵スコリアを含み、炭化物をごく多量含む黒色

土が堆積していた。

出土遺物（第82図）

土師器2点を図示した。Iは丸底で口縁部が内湾する壺で、内外面にヘラミガキが施されている。2の甕は、肩が張り、頭部がくの字に屈曲し、口縁部がやや外開く。口縁端部内面はわずかに肥厚する。肩部外面に斜め方向のハケ目調整後、頭部を横ナデしている。

所見

SB07 の覆土中に存在することから、7世紀後半の遺構と考える。

## 第5節 井戸跡

SE01

遺構（第81図）

位置:A3 グリッド（I地区）

重複関係：（古）SB07 → SS01 → SE01 → SB19（新）

残存状況：SB07 の覆土を掘り込み、SB19 に東側を切られている。上部の平面形は径1.40mほどの円形で、下に行くほど径は縮小し、底面では径50cmほどとなる。検出面から底までの深さは1.95mである。底面は平坦で内部からは3個の川原石が検出された。

覆土：底から80cmほどには大淵スコリアを含まない暗褐色シルト質土が堆積し、帯状の腐植土も認められる。

出土遺物（第83図）

須恵器甕の口縁部片1点を図示した。推定口径は21.2cmを測る。外面は斜ハケ目後、横位の沈線が2条巡り、口縁端部は断面三角形を呈し、やや内湾する。

所見

切り合い関係から、7世紀後半の遺構と考えられる。

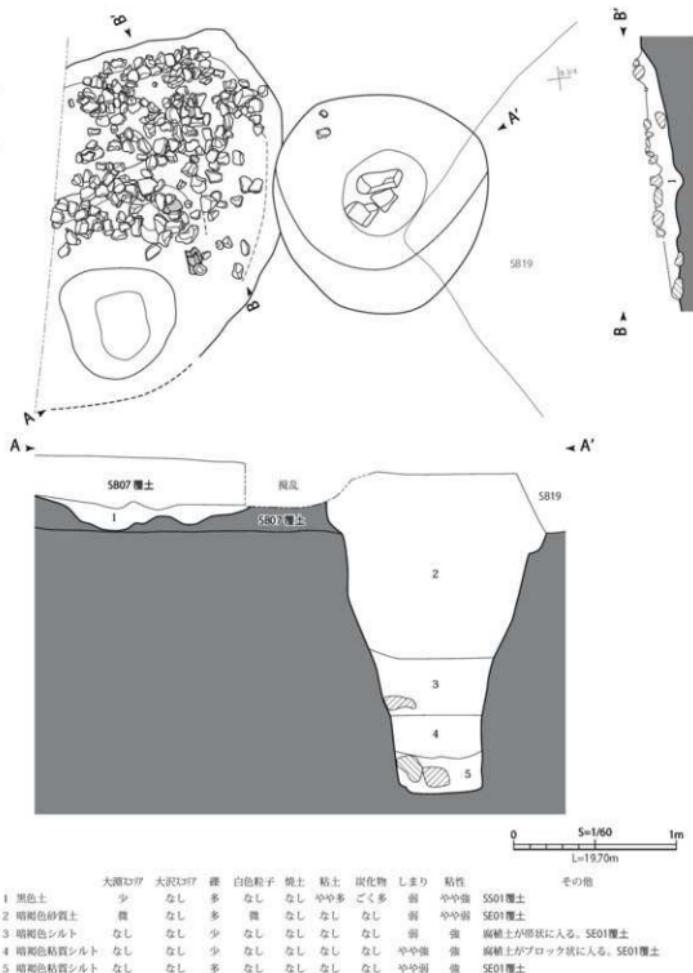
沢東A遺跡より北北西へ約5kmの地点、潤井川の支流である弓沢川の東岸に位置する富士宮市木ノ行寺遺跡では、県立富士宮東高等学校グラウンド改修工事に伴う発掘調査の際に、7世紀に位置づけられる「溜井」が検

出されている（静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会1995）。これは、遺跡の基盤層である古富士火山の泥流層を掘りくぼめることにより、地下水を取水できる人工の湧水地であり、貯水部と導水部からなる。木ノ行寺遺跡の周辺には自然の湧水地が認められ、170mほど西には弓沢川が流下するなど水源に恵まれている土地である。そうした環境にありながら、人工の湧水地が造られたということは、自然の水源から獲得できる量以上の灌漑用水獲得の必要性から構築された農業施設と捉えられ、7世紀前半代からの積極的な農地の拡大がうかがえるもの、と考えられている。

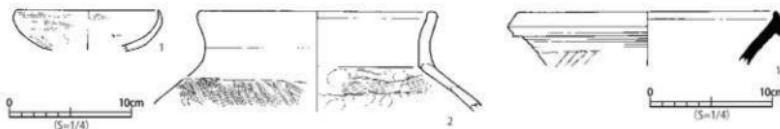
SS01 と SE01 は同時期の遺構と考えられるが、単独で機能したものか、関連する施設となるのか、残存状況からは判断しがたい。単独の施設とすれば、SS01 の性格は不明であるが、SE01 は集落内に設けられた生活用水の供給源としての井戸と考えられる。関連する施設であるとすれば、SE01 を湧水地と貯水部、SS01 を導水部と捉え、溜井のような機能を想定できるかもしれない。

参考文献

静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1995『木ノ行寺遺跡』富士宮市文化財調査報告書第20集



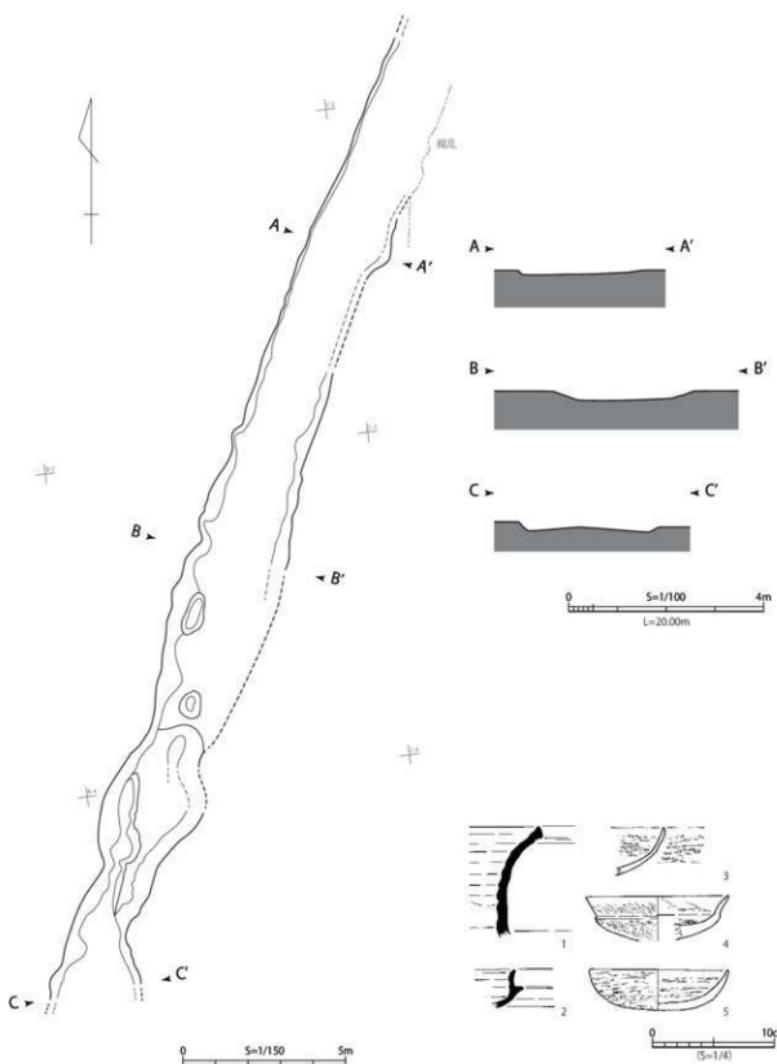
第 81 図 SS01・SE01



第 82 図 SS01 出土遺物

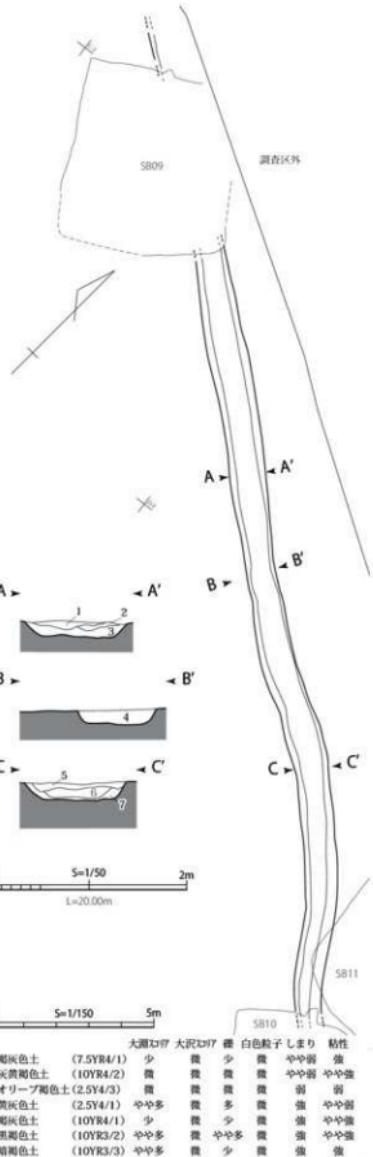
第 83 図 SE01 出土遺物

## 第6節 溝状遺構



第84図 SD01

第85図 SD01出土遺物



第86図 SD02

## SD01

## 遺構（第84図）

位置：A4・B2・B3・B4・C1・C2 グリッド（I地区）

残存状況：I地区の中央に検出された南北方向の溝状遺構である。検出された全長は31.25m、幅は2.5～3.0m、深さは15cm前後である。

覆土：上層は疊が多く含むシルト・微～細砂層、下層はラミナが頻繁に認められる疊・砂層が堆積しており、砂疊は富士川系とみられる。流水作用によって埋まつたと考えられる。

## 出土遺物（第85図）

5点図示した。Iは須恵器長頸壺の頸部である。口唇部がやや肥厚し、口縁端部外面には沈線が巡る。内外面に自然釉が掛かっている。8世紀代（遠江IV期末～V期）に位置づけられる。

2の須恵器壺は口縁部が直上に長く立ち上がり、口唇部に内傾面をもつ。底部には回転ヘラケズリ調整が認められる。6世紀前葉（遠江I期末～II期）に位置づけられる。

3は半球形の形部と外へ開く口縁部の境にやや甘い稜を有し、口縁端部が内湾する土師器壺である。内外面にヘラミガキ調整が施される。7世紀前半に位置づけられる。

4は底部が厚いことから、高壺の壺部と考えた。壺部は須恵器壺蓋を模倣した形態とみられ、体部と口縁部の境に明瞭な稜をもち、口縁部は外へ開く。内外面ともヘラミガキ調整されている。6世紀後半に位置づけられる。

5の壺は体部形が半球形に近いが、体部下半に施されたヘラケズリが底部を意識しているように見える。体部内面と外面の上半には横位の細かいヘラミガキ調整が施される。須恵器壺蓋模倣の壺の稜がぐく甘くなったものと捉えると、7世紀後半に位置づけられる。

## 所見

遺構の切り合ひ関係からは、SB19より新しい遺構と考えられるので、8世紀以降に形成されたものとみられる。調査時の所見では、近世～近代の水田經營に関わる旧河道と考えられている。遺物は混入したものとみる。

## SD02

## 遺構（第86図）

位置：C1・C2・D2・D3・E3 グリッド（I地区）

重複関係：（古）SK25 → SD02 → SB09・SB10・SB11（新）

残存状況：I地区の東寄りに検出された北西から南東方向の溝状遺構である。検出された全長はおよそ31.0m、幅は75～115cm、深さは15～25cmである。

覆土：大瀬スコリアを含む自然堆積層。

## 出土遺物

図化できる遺物は無かった。

## 所見

遺構の切り合い関係からは、SB09・SB10・SB11よりも古いと考えられ、6世紀後半以前の遺構といえる。

## 第7節 ピット・土坑

## 遺構（第88図）

本調査I地区で、遺構に伴う柱穴などのほかに、201基のピットと13基の土坑を検出した。

各ピット・土坑の概要を付表（遺構概要一覧表）に示す。欠番が多く、遺構番号は連続しない。

Pit007・008・092・042・110は柱の痕跡や支えと見られる石が確認され、直線上に並ぶことから、杭列と考えられる。Pit185・191・192・193は平面形が方形を呈するピットが並んでおり、これも同様に考えられる。柱痕が認められるピットは他にも数基あるが、残存状況ではその配置に規則性は見出しがたい。

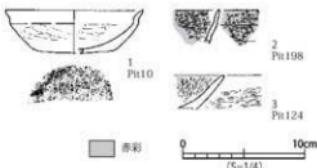
各ピット・土坑の時期や性格についての詳細は不明である。

## 出土遺物（第87図）

遺物が出土したピットは40基あったが、そのうち図示できたのは3点である。

1はPit10から出土した土師器環である。平底に木葉痕が残り、体部と口縁部の境に棱を有し、短い口縁部が

外反する。SB13出土遺物に同様の环がある（第47図-11）。2はPit198から出土した土師器の环である。内外面とも細かいヘラミガキで整えられた後、赤彩が施されている。3はPit124から出土した土師器高杯の环部片である。内外面にヘラミガキが施されている。下半との接合部が剥離しているが、接合部が後となり、口縁部が直線的に外側へ開く形の环部になると想われる。6世紀前半に位置づけられる。



第87図 ピット出土遺物

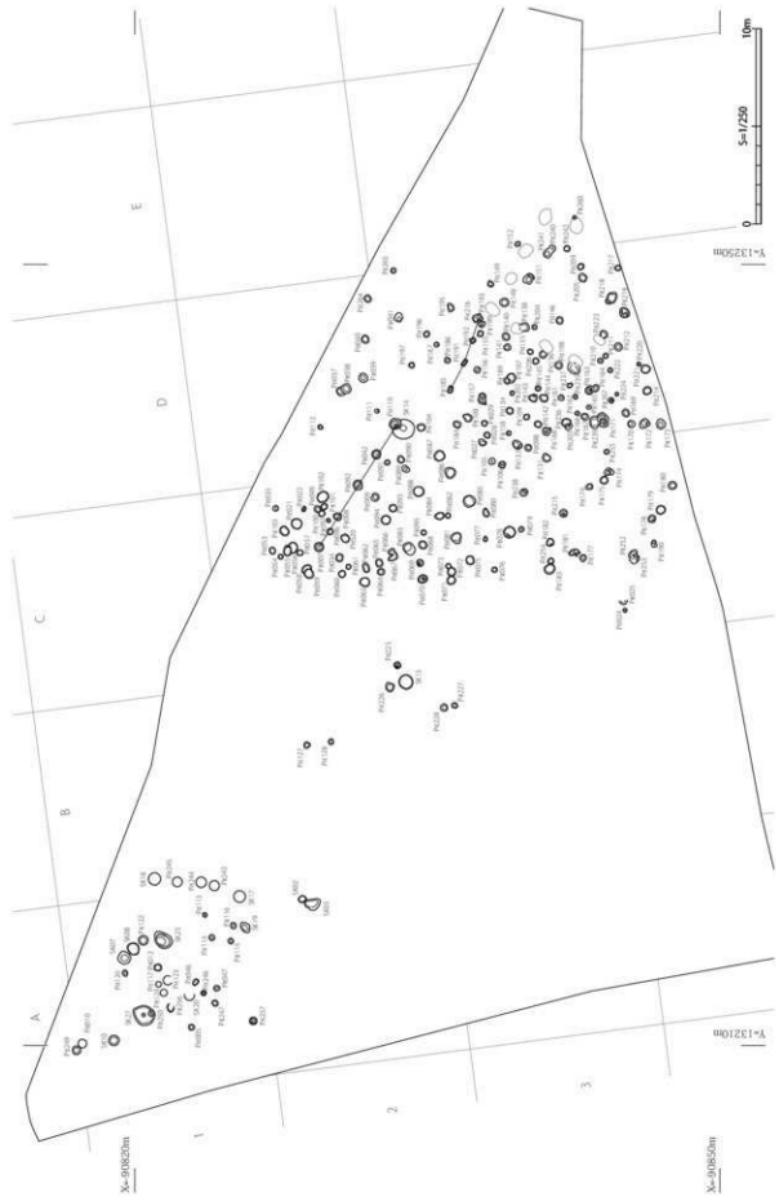
## 第8節 包含層出土遺物

遺構に伴わずに出土した遺物を、包含層出土遺物としてここで取り上げる（第89図）。

須恵器15点（1～15）、土師器22点（16～37）、陶器などの近世遺物10点（38～47）、土製品・石製品3点（48～50）を図示した。

1は口縁部が長くやや内傾し、口縁端部に内傾面をも

つ环で、6世紀前半（遠江I期末葉～III期前葉）に位置づけられる。2・3は無台の箱环である。底部は回転ヘラケズリされ、器高は浅く、器壁があまり外に開かない。8世紀代（遠江V期）に位置づけられる。4～6の高台环は底部が高台よりも張り出すもの（4・5）と、歪んでしまっているが本来は平底になるとみられるもの（6）



第88図 I地区 ビット・土壤全体図

とがある。5の内面には自然釉が掛かっている。

7は推定口径が16.3cmを測る楕状の器とみられ、体部がほぼ直立し、口縁部が内外に肥厚して端部に面をつくっている。体部外面には2条の沈線が巡る。8はハソウの注口部の破片である。注口部には突起がつき、注口の横には櫛齒状の工具で刺突した文様帶が認められる。7世紀代（遠江IV期）に位置づけられる。9は提瓶の体部片とみられ、内面には円形のノタ目が、外面には円形のハケ目調整が認められる。

10は無台坏の底部片である。回転ヘラケズリされた底部から、丸みをもって体部にいたる。底部外面には1条の線刻があり、窯印とみられる。11は回転ヘラケズリ調整された丸底で、体部に櫛齒状工具の刺突文が施され、推定体部径が8.4cmを測る、ハソウの破片と考える。12は長頸壺の口縁部で、口唇部が断面三角形に肥厚し、外面に沈線が巡る。13～15は短脚1段透高坏の脚部片である。6世紀初頭～前葉（遠江I期末～II期）に位置づけられる。

16～20は土師器の坏である。16・17は体部と口縁部の境に棱をもち、口縁部は外に開き端部が内湾する。16は稜がやや不明瞭で7世紀前半に、17は6世紀後半に位置づけられる。18は体部と口縁部の境の棱が明瞭で、口縁部は外に大きく開く。内外面とも丁寧にヘラミガキ調整され、黒色処理が施されている。7世紀前半に位置づけられる。19は木葉痕を残す小さな平底と口縁が内湾する半球形の体部の腹型坏である。外面にヘラミガキが施される。5世紀後半に位置づけられる。20は、底部を欠くが、口縁が内湾する半球形の体部の坏である。内面はヘラミガキ調整後、黒色処理が施されている。

21の楕は、体部は半球形で、体部と口縁部の境に棱をもち、口縁部は短く内傾している。外面は横ヘラミガキ調整され、内面には黒色処理が施されている。22は小型壺（壺？）である。体部は半球形を呈し、頸部がくの字状に屈曲して口縁部が外へ開く。口縁部高は体部高より短い。外面はヘラミガキ調整される。古墳時代前期後半のものである。

23～26は高坏である。23はハの字状に開く脚部で、柱状部には縱方向のケズリ調整が、据部には横方向のナデ調整が施されている。24は柱状脚高坏の脚部で、柱状部は短く、裾部が大きく開く。外面は縦ヘラミガキ調

整である。25の坏部外面はハケ目調整後ナデ調整されており、脚部外面には縦方向のヘラケズリ調整が認められる。26の脚部外面は縦方向にナデ調整され、坏部との接合部の内面も丁寧にナデで仕上げられている。

27は直口壺の口縁部片で、内外面ともナデ調整されている。28・29は直口壺の体部で、ややつぶれたような球形を呈し、内外面ともナデ調整されている。30は複合口縁壺の口縁部片である。31の壺底部片は平底でナデ調整されている。32は内外面とも横ヘラミガキ調整される小型壺（壺？）の口縁部、33は外面に丁寧な横ヘラミガキ調整がされる高坏の坏部片である。

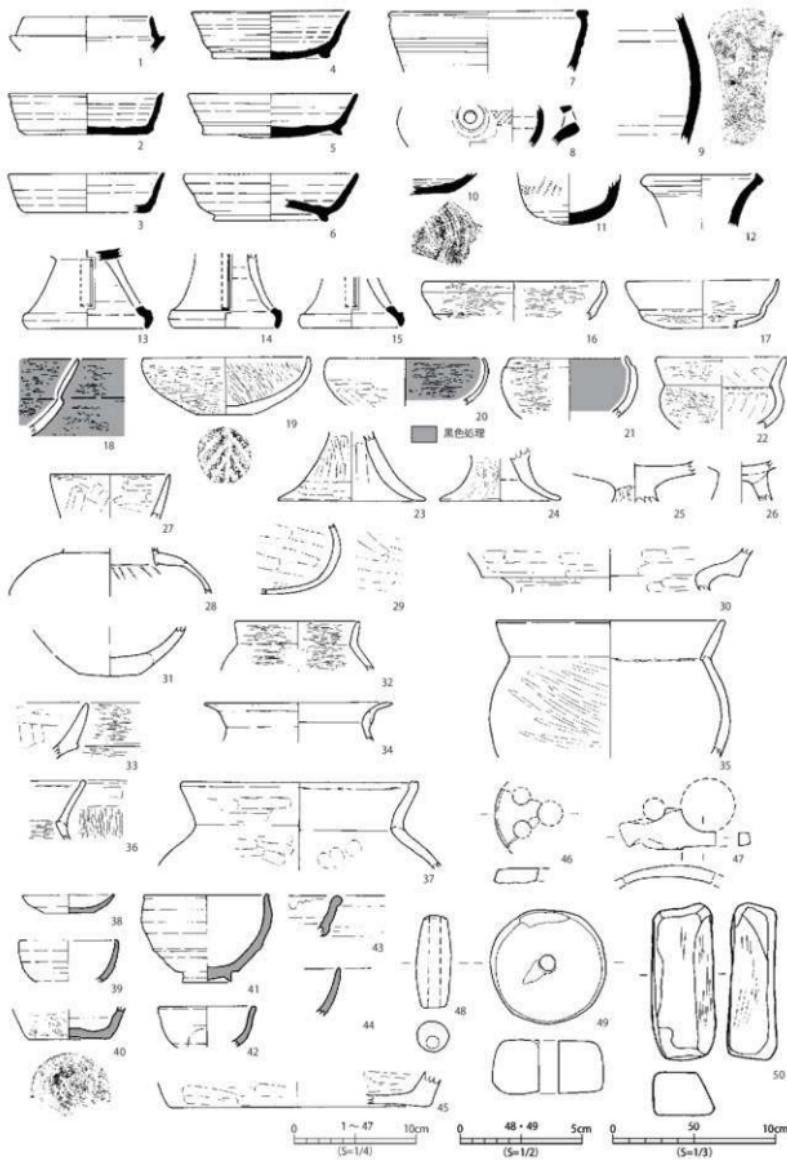
34～37は壺である。36は外面を縦ハケ目調整した後、口縁部の中ほどまではハケ目を残してナデ調整し、口縁部内面を少し肥厚させて端部を丸く仕上げている。37は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部内面を肥厚させて端部に沈線を巡らせていている。38は陶器の小皿で、高台は無く、底部には糸切り痕が残る。底面を除き、照りのない赤褐色の釉薬が掛かる。

39・41・42・44は陶器の碗である。39は内外面に灰白色の釉薬が掛かり、41・42・44は褐色～黒色の釉薬が掛かる。

40は残存部分に釉薬は掛かっていないが、陶器の底部である。底部外面にはヘラ書きで窯印とみられる記号が刻まれている。43は鉢といえるだろうか。黒褐色の釉薬が口縁部と体部外面に掛かっている。ヘラケズリ調整され釉薬が掛からない平坦面がわずかに残存しており、これを底部と考えると器高2.8cmほどの浅い器と考えられる。

45は器種不明の底部片である。体部の厚さに比べて底部が薄い。46はレンタンの仕切りである。推定直径9.2cm、厚さ1.2cmの円形を呈するのみられ、円形の孔が中央とその周囲にあけられている。断面形は上辺がわずかに短い台形となる。広い面が火を受けていたとみられ、器面が荒れている。幕末～明治時代のものとみられる。47は器種不明である。残存部は長軸方向にも短軸方向にも弧を描き、長軸方向は厚さにも違いがみられる。また、弧状と直線状に側面が生じている部分が確認できる。

48の土製品は、鍤だろうか。土色は白いが、外面は暗赤褐色に塗られているようにみえる。49は石製の紡錘車である。50の砥石は長軸方向の2面を使用している。



第 89 図 包含層出土遺物

# 第5章 総括

## 第1節 潤井川流域における須恵器流入以降の土器様相

はじめに

本節では、沢東A遺跡が本格的に形成される古墳時代中期、特に須恵器流入以降の土器様相について示すこととする。対象を潤井川流域としたのは、富士山南麓において古墳時代中期後半以降、平安時代に至るまでその中心的な位置を占めていたのが、この流域だからに他ならない。

富士市伝法に所在する県指定史跡伊勢塚古墳の築造は、この地域における開発を主導した首長の墓と位置づけられており（藤村2012）、それ以降、潤井川流域において集落が形成され始める。その契機となった開発地か沢東A遺跡であったと考えている。

そこで、以下、潤井川流域の集落を紹介しながら須恵器流入以降、7世紀までの出土土器の一括資料を提示していくこととする。

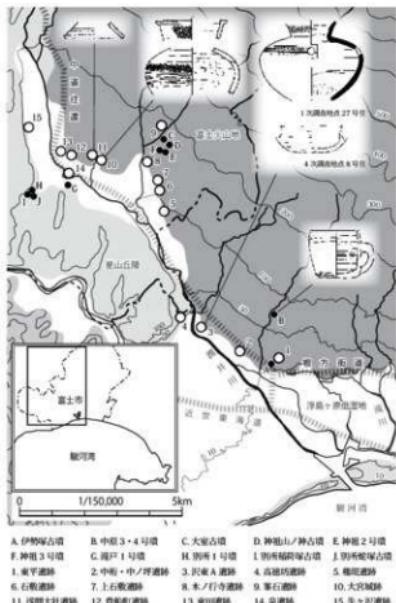
### 1 潤井川流域の遺跡

潤井川とは、富士山西麓の富士宮市上井出付近に源を発し、富士宮市街を南下し、富士市に入つてからは、流路をやや東方向に変えながら駿河湾へそぐ河川である。途中、富士宮市浅間大社内の湧玉池の湧水を源とする神田川などが合流している。現在でこそ、しっかりとした護岸対策と星山放水路開削に伴う富士川への放水のお陰でその印象はないが、近代に至るまで、度重なる氾濫で人々を苦しめていた。一方で、その氾濫は火山地帯において肥沃な土壤形成をもたらした。東西の交通路だけではなく、甲斐へと続く交通路上にも位置するこの流域は、古墳時代中期以降、富士郡である東平遺跡の終焉まで、550年近く富士山南麓における政治・経済・宗教の中心的な役割を担ってきたと言える。

その最も東に位置しているのが前述の東平遺跡である。これまでに67地区での発掘調査が行われ、8世紀を中心とした計画的な集落形成をはじめとして（佐野2008）、10世紀初頭に至るまで富士郡として機能していたと考えられている（佐藤・藤村2013 藤村

2014）。東平遺跡の範囲内は、8世紀以前には墓域も形成されており、その盟主墳が前述の伊勢塚古墳である。伊勢塚古墳はTK47型式併行期頃に築造されたと考えられる直徑54mの円墳で、潤井川流域における最初の本格的な古墳と位置づけられる（富士市教委2012）。

伊勢塚古墳の西側300mには、伝法沢という沢が存在し、東西の土地を大きく区分している。その伝法沢のさらに西側に立地するのが中折・中ノ坪遺跡である。かつて、中折遺跡と中ノ坪遺跡という2つの集落として認識されていたが、調査の結果、区分することの出来ない大規模集落であると再認識されている。遺跡の形成は5世紀後半頃に認められ、東平遺跡同様、10世紀頃まで



第90図 潤井川流域の遺跡

継続的に集落が認められる。特に、近年の調査によりこれまで認識されてこなかった8世紀の集落様相が明らかとなってきたと言える（丸杉2013）。

さらに西方、富士宮市域から南下してきた潤井川がその流路を大きく東へ変更する箇所に立地するのが沢東A遺跡である。集落形成時の様相については、後節で述べるが、潤井川流域において、比較的早い段階でその集落形成が開始されていることが明らかとなっている。

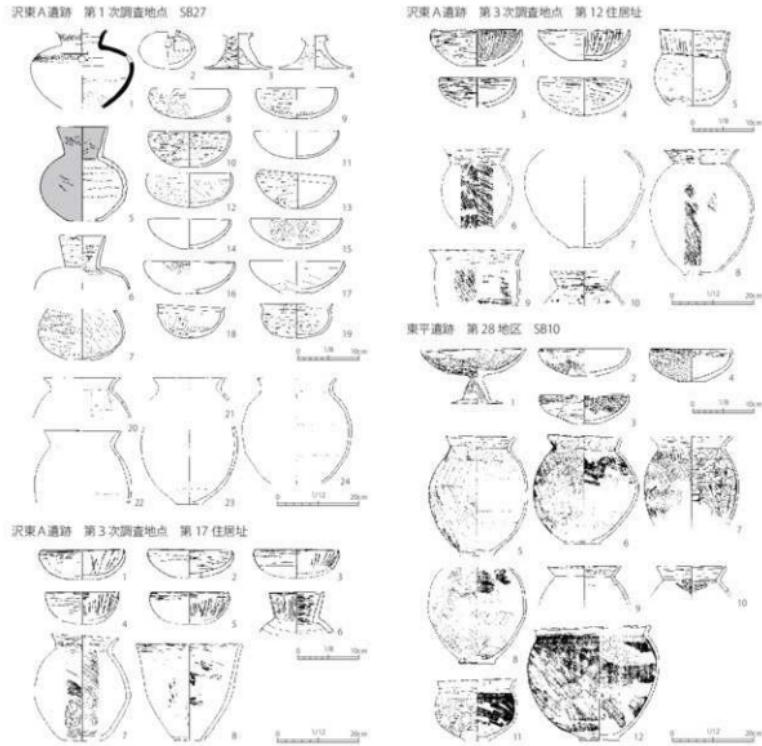
潤井川をさらに遡上すると富士宮市域に至る。東田遺跡などで古墳時代中・後期の集落が認められるがその様相はまだまだ明らかとはなっていない。

注目されるのは、大宮城跡において認められる中期後半の須恵器の存在と、石製模造品の存在である。石製模

造品については沢東A遺跡でも認められており、潤井川流域に限らず、古墳時代中期後半から後期初頭の東日本における集落形成を考える際に重要な視点となろう。

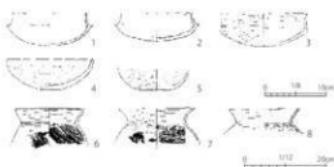
## 2 これまでの研究

これまでの東駿河における須恵器流入以降の土師器研究は、山本恵一氏の一連の業績においてその骨子が示されている（山本1995・1999）。土師器自身の詳細な形態変化の分析を押し進める方法ではなく、時代決定・前後関係の把握の軸に須恵器を用いて、共伴する土師器を提示するという方法は、遺跡から出土した資料の年代決定根拠として多くの報告書において参考にされ、本節もその延長線上にある。

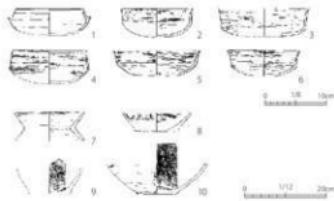


第91図 潤井川流域の土器様相（1）【I段階（TK208～TK23・TK47）】

沢東A遺跡 第4次調査地点 第50号住居跡



沢東A遺跡 第3次調査地点 第3号住居跡

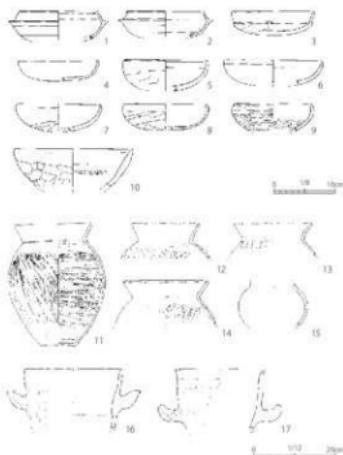


沢東A遺跡 第1次調査地点 SB21



第92図 潤井川流域の土器様相(2)〔II-1段階(MT15)〕

中村・中ノ坪遺跡 第1地区 第41号住居跡



第93図 潤井川流域の土器様相(3)〔II-2段階(TK10)〕

一方、木ノ内義昭氏は、須恵器編年への絶対的信頼に警鐘を鳴らし、土師器を胎土を含めて徹底的に分類し、編年表を作成した(木ノ内2002)。しかし、一括資料を別々の時期に割り振る資料操作への説明不足や細かな時期決定の根拠とそれに対応する一括資料がないという方法上の問題からあまり受け入れられることはなかつた。しかし、須恵器流入以降、10世紀に至るまでの変化の方向性を提示したところにその業績の一端がある。

### 3 一括資料の提示

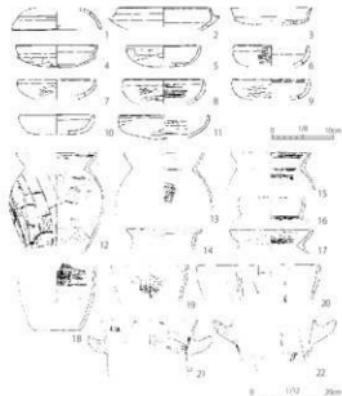
山本氏の一連の研究を参考に、潤井川流域の遺跡における一括資料を提示していくこととする。本来ならば、形式分類とその組み合わせまで行うべきではあるが、その前提作業までに留まっている。

須恵器の流入とその模倣、多様化などから、須恵器流入時(TK208型式併行期)以降の土器様相を3段階に大別し、さらに特徴的な土器の形態変化からそれぞれの土器様相を細別することとする。時期決定の出来る須恵器が共伴している事例から須恵器編年との対応関係を探ることに努めた。

#### I段階 須恵器流入段階の土器様相

潤井川流域において須恵器が流入するようになるのはTK208型式併行期からである。しかし、この段階にお

中村・中ノ坪遺跡 第2地区 第1号住居跡

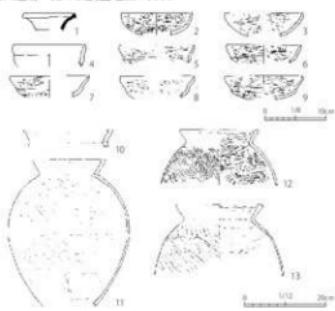


第94図 潤井川流域の土器様相(4)〔II-3段階(TK43)〕

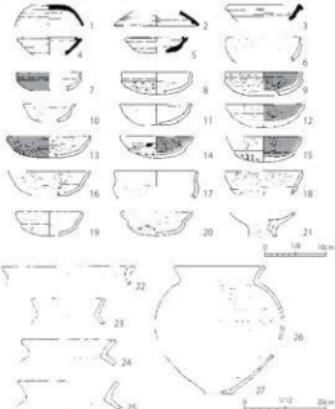
沢東A道路 第1次調査地点 SB07



沢東A道路 第1次調査地点 SB09



沢東A道路 第1次調査地点 SB13

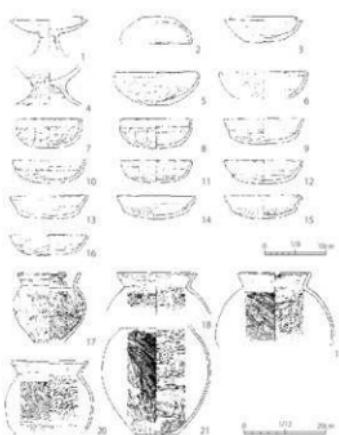


沢東A道路 第4次調査地点 第11号住居跡

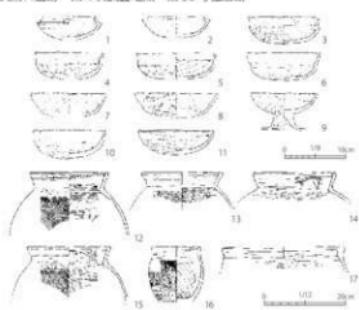


第95図 湧井川流域の土器様相(5)(III-1段階(TK209~飛鳥I))

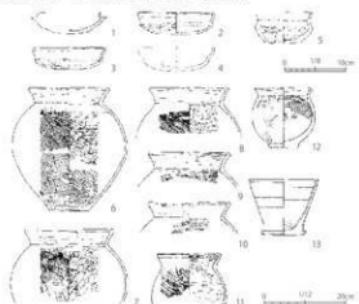
沢東A道路 第4次調査地点 第5号住居跡



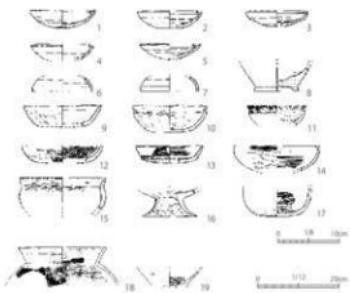
沢東A道路 第4次調査地点 第36号住居跡



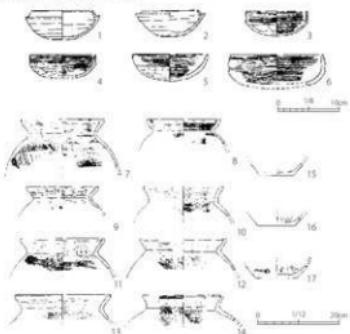
沢東A道路 第4次調査地点 第44号住居跡



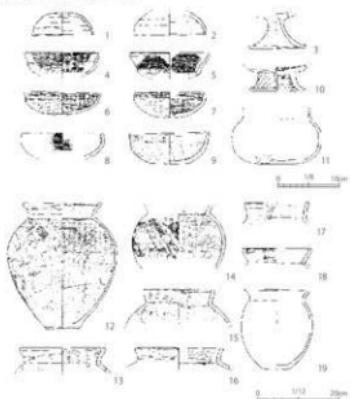
東平遺跡 第16地区 SB05



東平遺跡 第16地区 SB17



東平遺跡 第28地区 SB3



第96図 沢井川流域の土器様相(6)(Ⅲ-1段階(TK209~飛鳥I))

ける須恵器の有無は、遺跡・遺構ごとに大きく異なり。

TK23・TK47型式併行に至るまで点的な流入である。

そのなかにあって沢東A遺跡第1次調査SB27(本書報告)資料は、須恵器が伴う良好な一括資料である。TK205型式併行期に位置づけられる大型ハソウと共に多形式の坪、高环、甕が認められる。坪は前段階からの変化の中で捉えられる底部丸底で内湾したものや、口縁部が屈曲したもの、「駿豆型」と称されるものなどが認められる。「駿豆型坪」とは、小さな底部に木葉痕が残り、体部が内湾して立ち上がり、胎土は比較的荒く、白色粒子(カワゴ平バミス)を多く含む坪である(池谷1999)。高环の脚部は、器高が低く外面を横方向にヘラミガキするという特徴的な調整を有している。甕は頸部内面に明瞭な棱を有し、口縁部が直線的に広がるものと緩やかに外反するものが認められる。後の「駿東甕」の成立を口唇部内面の突出と外面のヘラミガキなどの特徴と捉えるならば、その萌芽はまったく見られない。

須恵器が伴う良好な一括資料は他にないが、坪の形態的特徴から沢東A遺跡第3次調査第12・17号住居址や、東平遺跡第28地区SB10などがこの段階における土器様相の一端を示している。

## II段階 須恵器模倣坪の出現

II-1段階 須恵器坪蓋を模倣する土師器坪が出現する段階である。沢東A遺跡第4次調査第50号住居跡において須恵器坪身が共伴する良好な一括資料がある。MT15型式併行期の坪身と坪蓋を模倣する土師器坪という組み合わせは、他にも沢東A遺跡第3次調査第3号住居跡でも認められる。坪蓋の忠実な模倣は、伊勢塙古墳出土例などTK47型式併行期までさかのばる例も想定されるが、一括資料としてはいまだ明確とはいえない状況にある。甕は前段階同様、口縁部が直線的に広がるものと緩やかに外反するものが認められる。同時期と考えられる沢東A遺跡第1次調査SB21からは長胴化したハケ甕が出土しているがその出自は明らかでない。

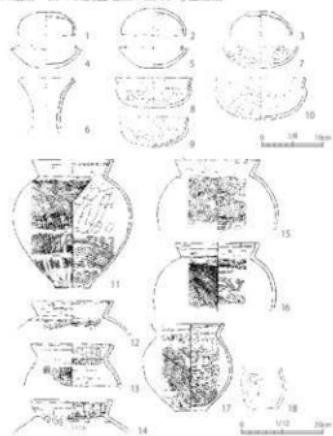
II-2段階 模倣坪のつくりが若干、粗雑になり、器壁が厚くなり、外面のヘラミガキが省略される。

中柄・中ノ坪遺跡第1地区41号住居跡ではTK10型式併行期と考えられる須恵器が共伴しており、貴重な資料である。また、甕の口唇部内面に若干搞み上げるような造作が認められ、その後もそれが大きくなっていく。

沢東A遺跡 第4次調査地点 第9号住居跡



沢東A遺跡 第4次調査地点 第15号住居跡



沢東A遺跡 第4次調査地点 第20号住居跡



大宮城跡 積穴16



第97図 潤井川流域の土器様相(7) [III-2段階(飛鳥II～飛鳥III)]

II-3段階 須恵器壺蓋模倣の土器器壺の器高が全体的に低くなる。甕も含めて次の段階への移行段階的な位置づけが出来る。前段階に認められた甕の口唇部内面への摘み上げが顕著に見られ、TK43型式併行期の須恵器が共伴する中柄・中ノ坪遺跡第2地区第1号竪穴住居跡などがその良好な資料である。

### III段階 須恵器模倣壺の増加と形式の多様化

III-1段階 壺に限らず各器種のバリエーションが認められるようになる段階である。この段階をもってその後続く、土器形式が整理・淘汰されており、大きな画期となる。模倣壺の口縁部は、内湾しながら屈曲する形態が多く用されるようになる。体部と口縁部の境界をはっきりさせる造形多くの形式で見える。甕は肩部の張りが進行するものの最大径はいまだ胴部中央かや上側にある。

沢東A遺跡第1次調査では、SB7・SB9・SB13、第4次では第5・11・36・44号住居、東平遺跡第16地区SB05・SB17、第28地区SB03など多くの遺構で良好な一括資料が認められる。

共伴する須恵器からTK209型式併行期から飛鳥Iの時期と考えられる。

III-2段階 土器の形態変化からは明確に前段階と区別することは難しいが、須恵器模倣壺の形態変化や駿東甕の口唇部突尖の発達、球形化などが看取される。壺は底部のヘラケズリが荒く、凹凸が多い。共伴する須恵器から飛鳥IIから飛鳥IIIの時期を想定している。

### おわりに

以上、潤井川流域における須恵器流入以降の土器様相を探るため、一括資料を提示し、その様相を3段階に区分した。須恵器の流入とその模倣は、土器の形態、用途に大きな変化、影響を与えたものと考えられる。加えて、本節では触れなかったが、伊勢からカマドの採用という生活スタイルの変化は、甕を中心とした調理具の形態にも大きな変化を与えたものと考えられる。

今後、形式分類と系譜整理を基に体系的な編年を提示するとともに土器を単なる時間を探る物差しではなく、生活の一部と考え、変化の必然性を探っていくこととしたい。

(佐藤)

## 参考文献

- 木ノ内義昭 2001「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相―主として律令時代富士郡断推定域の出土遺物から―」『東平遺跡(第16地区(三日市庵寺跡)、第27地区発掘調査報告書)』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹・藤村 瑞 2013「考古学からみた富士山の噴火と地域社会の変動－古墳時代・平安時代を中心に－」『2012年度 静岡県考古学会シンポジウム 考古学からみた静岡の災害と復興』静岡県考古学会
- 佐野五十三「駿河国富士郡における8世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究』No.41・42 静岡県考古学会
- 富士市教育委員会 1995『沢東A遺跡』
- 富士市教育委員会 1997『沢東A遺跡・第V地区 第4次調査発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2001『東平遺跡 第28地区発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2002『東平遺跡 第16地区(三日市庵寺跡)、第27地区発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2004『中柄遺跡』
- 富士市教育委員会 2007『中柄・中ノ坪遺跡 第2地区』
- 富士市教育委員会 2012『富士市内遺跡発掘調査報告書一平成11・12年度一』
- 富士市教育委員会 2000『元富士大宮司館跡』富士市文化財調査報告書 第24集
- 富士市教育委員会 2014『元富士大宮司館跡II』富士市文化財調査報告書 第48集
- 藤村 瑞 2012「古墳時代後期初頭における2つの首長壇とその評価」『富士市内遺跡発掘調査報告書一平成11・12年度一』富士市教育委員会
- 藤村 瑞 2014「富士郡家閑連遺跡群の成立と展開－富士市東平遺跡とその周辺－」『静岡県考古学研究』No.45 静岡県考古学会
- 丸杉俊一郎 2013「証拠」『中柄・中ノ坪遺跡』静岡県埋蔵文化財センター調査報告書第24集
- 山本恵一 1995「静岡県下の6～7Cの土師器－駿河東部・伊豆北部の現状について－」『東国土器研究』第4号
- 山本恵一 1999「駿河の古墳時代中期の土器－東駿河を中心にして－」『東国土器研究』第5号

## 第2節 沢東A遺跡の成立と展開

## 1 遺構の変遷

沢東A遺跡は、駿河湾から富士宮市域方面へと通じる水路である潤井川と、東西を結ぶ陸路の交差点に立地し、おそらくは水害にも悩まされたであろうが、古墳時代前期から9世紀初頭に至るまで、人の営みがあり続けた土地であった。

沢東A遺跡の西、潤井川をはさんだ対岸の星山丘陵南端部に立地する高徳坊遺跡では、弥生時代後期の竪穴建物跡8軒が調査されているが、この時の試掘確認調査で初期須恵器の可能性がある破片が出土している(富士市教育委員会2012a)。

本書で報告する沢東A遺跡第1次調査地点では27軒の竪穴建物跡が検出・調査されている。このうち、営まれた時期がある程度推定できる竪穴建物跡は24軒である。ここでは、遺構の変遷や分布状況について、「5世紀中葉～6世紀前半」「6世紀後半～7世紀前半」「7世紀中葉」「7世紀後半～9世紀初頭」の4グループに分けて、時期ごとに概観する。

なお、第1次調査地点と第4次調査地点は近接している事から、ここでは時期が推定できる第4次調査地点の竪穴建物跡も合わせてその変遷について見ていくこととする。

建物跡の時期ごとの分布状況については第98図に示し、変遷の状況を一覧として第2表にまとめた。

なお、第4次調査地点の遺構の時期や規模等は基本的に報告書の記述に従った。ただし主軸方位については、報告書の数値が磁北に基づくものであることから、第1次調査地点と整合を図るために座標北を基準とする数値に修正した。

## ・5世紀中葉～6世紀前半

SB27(5世紀後半)、第4次調査地点第12・33・35・46・50号住居跡(5世紀中葉～6世紀前葉)、SB21(6世紀前半)の7軒が属する。また、遺構の切り合い関係から、SD02もこの時期の遺構と考えられる。

建物跡の主軸方位はおおむね北北西を指し、分布状況としては東寄りに集中するようである。

燃焼施設については、SB21を除いて、炭化物の広がり（SB27）や、壁際の落ち込み（第46号住居跡）、焼土・粘土の集中（第50号住居跡）などが検出されているのみで、明確にカマドと推定し得る痕跡は残っていない。この段階においてカマドが導入されたものと考えられるが、その受容は一様ではなかったものと考えられる。

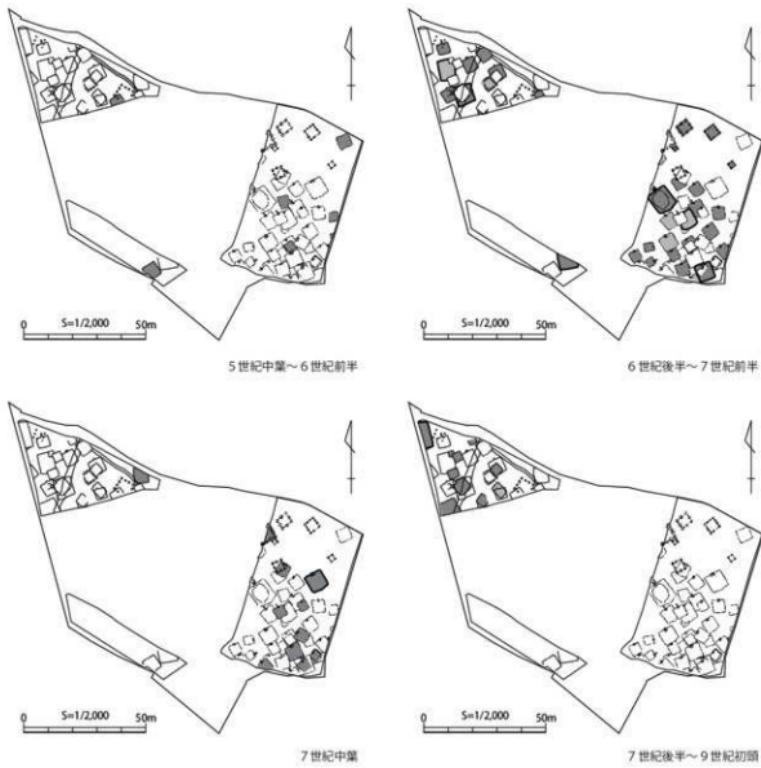
#### ・6世紀後半～7世紀前半

推定も含めて、最も多く33軒の建物跡が属する時期である。また、第4次調査で検出された掘立柱建物跡6棟のうち4棟が、主軸方位からこの時期に位置づけられている。

第4次調査報告書において、平面形が「五角形A（ホームベース型を呈するもの）」「五角形B（カマドと対面する壁の中央が半円形に張り出すもの）」と分類された建物跡が現れる時期で、第1次調査地点においてもSB06・09・22・26の4軒が確認され、全体では33軒中15軒が「五角形」を呈する。

また、カマドの煙道が建物の壁から長く突出するものが認められる時期でもある。第1次調査地点ではSB01・22・26の3軒が、煙道が長いカマドを有しており、全体では9軒で確認される。

建物跡の主軸方位はおおむね北西から北北西を指し、分布状況としては調査区全体に広く分布する。



第98図 時期別遺構分布変遷図

第2表 積木建物跡変遷一覧

## 〔凡例〕

・道筋名について、第1次調査の建物跡はSB●、第4次調査の建物跡は●号住と表記する。

・主軸方位について、第4次調査報告書の値は経北に基づいているため、座標北を基準とする前に修正した。

・規模は、南北幅と東西幅から計算できる面積（小数点以下四捨五入）である。（）内の数値は残存する壁から方形として推定した数値である。

・平面形の「五角形A」は「ホームベース型を示すもの」、「五角形B」は「カマドと対面する壁の中央が半円形に張り出すもの」を示す。

・時期を示す線は、■が第1次調査地点、■が第4次調査地点を示し、緑線は推定時期である。

遺構	主軸方位	規模	平面形	燃え跡数	位置	経道	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	時期推定の根拠
SB27	N-33.4°-W	34 m <sup>2</sup>	方形	?	北壁		■					
12号住	N-26.6°-W	21 m <sup>2</sup>	方形	-	-		■					
33号住	(N-17.4°-W)	-	-	-	-		■					
35号住	N-14.4°-W	14 m <sup>2</sup>	方形	-	-		■					
46号住	N-56.6°-E	14 m <sup>2</sup>	方形	?	東壁		■					
50号住	N-22.9°-W	27 m <sup>2</sup>	方形	?	西壁		■					
SB21	N-33.5°-W	(27 m <sup>2</sup> )	方形	カマド	北壁		■					
SB15	-	-	-	-	-		■					
SB26	N-26.6°-W	22 m <sup>2</sup>	五角形B	カマド	北壁	長い						
SB22	N-26.6°-W	31 m <sup>2</sup>	五角形A	カマド	北壁	長い						
SB25	N-15.6°-W	59 m <sup>2</sup>	方形	-	-		■					
SB04	N-14.7°-W	54 m <sup>2</sup>	長方形	-	-		■	■	■			
6号住	N-30.9°-W	37 m <sup>2</sup>	五角形B	カマド	北壁		■	■	■			規格・主軸方位
23号住	(N-37.4°-W)	-	(方形)	カマド	北壁	長い	■	■	■			平面形・切り合ひ関係
43号住	N-47.4°-W	(18m <sup>2</sup> )	五角形B	-	-		■	■	■			細道・切り合ひ関係
SB01	N-16.7°-W	22 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁	長い		■	■			平面形
SB09	N-32.7°-W	30 m <sup>2</sup>	(五角形A)	カマド	北壁		■	■	■			
SB10	N-35.1°-W	-	方形	カマド	北壁		■	■	■			
SB28	N-11.8°-W	(56m <sup>2</sup> )	方形	-	-		■	■	■			
38号住	(N-19.4°-W)	-	五角形B	-	-		■	■	■			平面形
SB06	N-27.5°-W	37 m <sup>2</sup>	五角形B	カマド	北壁		■	■	■			
SB12	-	-	方形	-	-		■	■	■			
3号住	N-53.6°-E	11 m <sup>2</sup>	方形	カマド	東壁	長い		■	■			
5号住	N-82.1°-E	14 m <sup>2</sup>	方形	カマド	東壁		■	■	■			
11号住	N-31.4°-W	34 m <sup>2</sup>	五角形A	カマド	北壁	長い		■	■			
14号住	N-33.9°-W	31 m <sup>2</sup>	五角形B	カマド	北壁		■	■	■			
16号住	N-32.9°-W	30 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
17号住	N-4.9°-W	21 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
19号住	N-36.9°-W	26 m <sup>2</sup>	五角形B	カマド	北壁		■	■	■			
20号住	N-36.9°-W	81 m <sup>2</sup>	五角形A	カマド	北壁	長い	■	■	■			
21号住	N-34.4°-W	23 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
22号住	N-14.4°-W	28 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
24号住	N-20.4°-W	47 m <sup>2</sup>	五角形A	カマド	北壁		■	■	■			
30号住	N-38.4°-W	(21m <sup>2</sup> )	(五角形A)	カマド	北壁	長い	■	■	■			
39号住	N-30.4°-W	19m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
44号住	N-32.4°-W	18 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
42号住	N-42.4°-W	(11m <sup>2</sup> )	(方形)	-	-		■	■	■			切り合ひ関係
SB07	N-32.4°-W	33 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
8号住	N-38.9°-W	34 m <sup>2</sup>	五角形B	カマド	北壁	長い	■	■	■			平面形・切り合ひ関係
10号住	N-30.4°-W	46 m <sup>2</sup>	五角形A	カマド	北壁		■	■	■			平面形・切り合ひ関係
SB11	N-5.4°-W	36 m <sup>2</sup>	方形	-	-		■	■	■			
1号住	N-42.9°-W	-	(方形)	カマド	北壁	長い	■	■	■			
9号住	N-31.9°-W	20 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁	長い	■	■	■			
13号住	N-30.4°-W	15 m <sup>2</sup>	五角形B	カマド	北壁		■	■	■			
15号住	N-58.9°-W	27 m <sup>2</sup>	五角形B	カマド	北壁		■	■	■			
25号住	N-25.4°-W	35 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
26号住	N-55.4°-W	12 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
28号住	N-39.9°-W	(22m <sup>2</sup> )	(方形)	カマド	北壁		■	■	■			
36号住	N-32.4°-W	53m <sup>2</sup>	五角形B	カマド	北壁		■	■	■			
37号住	N-45.9°-E	27 m <sup>2</sup>	五角形A	カマド	東壁		■	■	■			
SB13	N-13.9°-W	(119m <sup>2</sup> )	(方形)	カマド	北壁		■	■	■			
SB08	N-24.2°-W	(11m <sup>2</sup> )	方形	-	-		■	■	■			
SB18	N-22.1°-W	16m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
SB03	N-10.9°-W	5 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
SB05	N-43.5°-W	18 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
SB16	N-37.4°-E	18 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
SB19	N-45.0°-W	35 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			
SB20	N-26.5°-W	-	方形	カマド	北壁		■	■	■			
SB02	N-29.8°-W	13 m <sup>2</sup>	方形	カマド	北壁		■	■	■			

時期別主軸方位



また、この段階から建物の床面積が40m<sup>2</sup>を超えるものが散見されるようになるが、区画などは存在しない。この段階では、SB25、SB04、SB28、第4次調査では、20号住、24号住、10号住が該当する。

#### ・7世紀中葉

前後の時期と重複するが、この限られた時期に位置づけられる10軒でひとつのグループとした。

「五角形」の建物跡や、長い煙道を有するカマドがこの時期にはまだ認められるが、次の時期にはみられないことから、これらは6世紀後半から7世紀中葉にかけて意識された要素と考えられる。

建物跡の主軸方位は北西を指す。

分布状況としては東寄りに集中しており、10軒中9軒が第4次調査地点で検出されている。

#### ・7世紀後半～9世紀初頭

やや広い区分であるが、7世紀後半まで上がる可能性があるSB08・13と9世紀初頭まで下る可能性があるSB02を含めて、8世紀代を中心とする時期として捉えた。

「五角形」の建物跡や、長い煙道を有するカマドはこの時期には認められない。

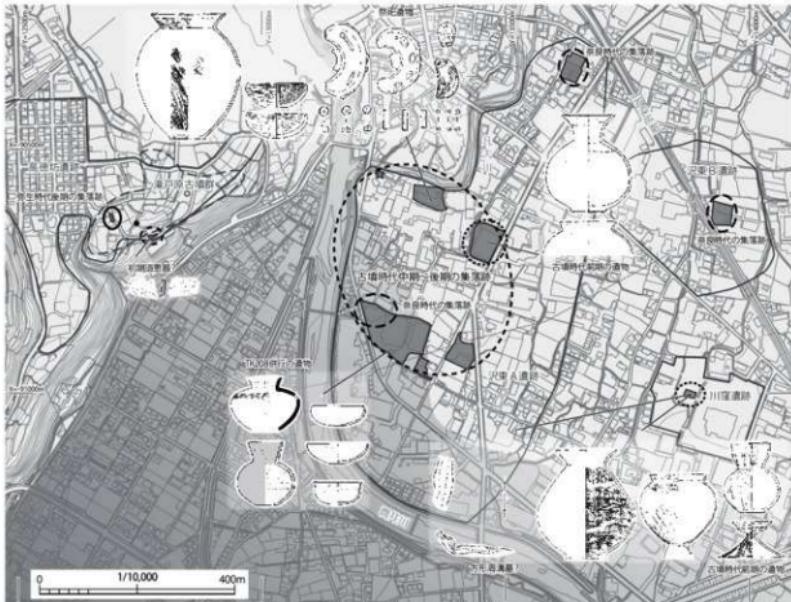
建物の主軸方位はおおむね北西から北北西を指す。

分布状況としては西寄りに集中しており、この時期に属する9軒すべてが第1次調査地点で検出されている。

SB13は、残存部において一辺10.9mを測り、床面積が119m<sup>2</sup>以上と復元されることから、沢東A遺跡において最も大きい建物跡として注目される。

以上のように、第1次・第4次調査地点においては、5世紀半ば頃から居住が始まり、6世紀後半から7世紀中葉ごろが最盛期となって、8世紀代になると集落は縮小して西寄りに集中するようである。

「五角形」の建物跡については、建物の造り替えとみられるSB22（五角形A）とSB26（五角形B）の関係からは、五角形Bが古い様相と捉えられ、屈曲が強く意識されていたものが次第に曖昧になるような、変化の流れとしても自然なようと思える。しかし、その他の「五角形」建物跡の時期からは逆の新旧関係も考えられ、必



第99図 沢東A遺跡周辺の濃磯・遺物出土状況

すしも時期差が現れるものではないようである。

主軸方位については、北西から北北西を指すものが大半を占める。また、カマドは大半の建物跡で北壁に設けられている。いずれの時期においてもその方向が意識されるような要因があったのかもしれない。

## 2 沢東A遺跡の成立の背景

### ・周辺の遺跡

調査地点がごく限られているが、沢東A遺跡で人の居住の痕跡、すなわち竪穴建物跡が確認されるのは古墳時代中期後半からである。古墳時代中期以前の状況については、遺構は明らかでないものの、第3次調査地点で古墳時代前期の大席式土器とみられる土器片が出土し、第5次調査地点でも溝状遺構に伴って大席式期の壺やS字

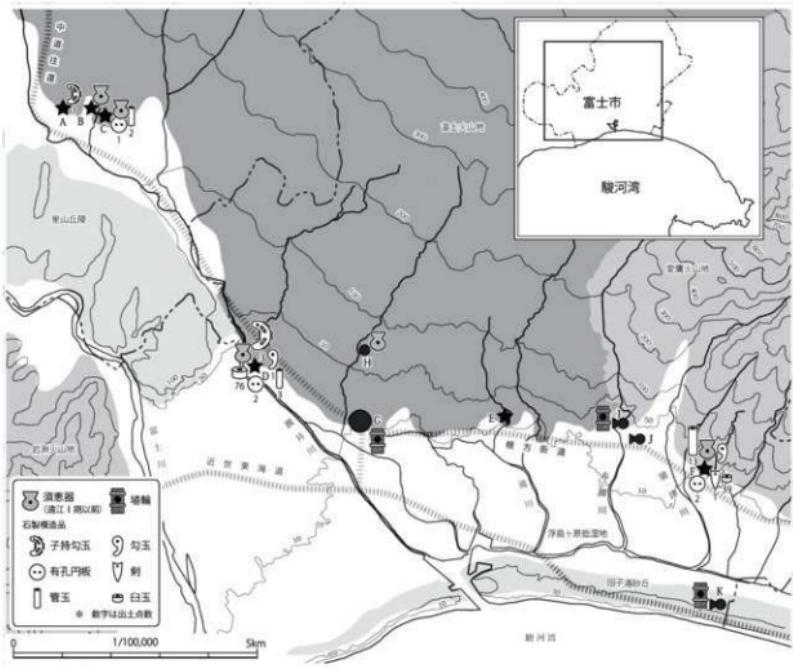
甕が出土している（富士市教育委員会 2012c）。

また、沢東A遺跡の東に立地する川窪遺跡で検出された溝状遺構が同じく大席式期の土器を伴い、方形周溝墓である可能性が考えられている（富士市教育委員会 2008a）。

（若林）

### ・沢東A遺跡の成立

沢東A遺跡の本格的な成立は、古墳時代中期後半、TK208型式併行期ごろと考えられる。それは、言い換えれば潤井川流域における本格的な開発の時期を示している。古墳時代前期までの集落が一旦途絶え、その後、再びその活動が確認され始める段階である。この中期前半の様相があまり明確ではないという現象は、何もこの地域に限ったことではなく、駿河全体もしくは東日本全体で認められる現象である。



A. 藤原町遺跡 B. 津間大社遺跡 C. 大宮城跡 D. 沢東A遺跡 E. 宇都御川遺跡 F. 宮原遺跡  
G. 伊勢塚古墳 H. 中原4号墳 I. 寺原敷古墳 J. 天神塚古墳 K. 山の神古墳

第100図 潤井川流域における古墳時代中期から後期の様相

### ・須恵器と石製模造品

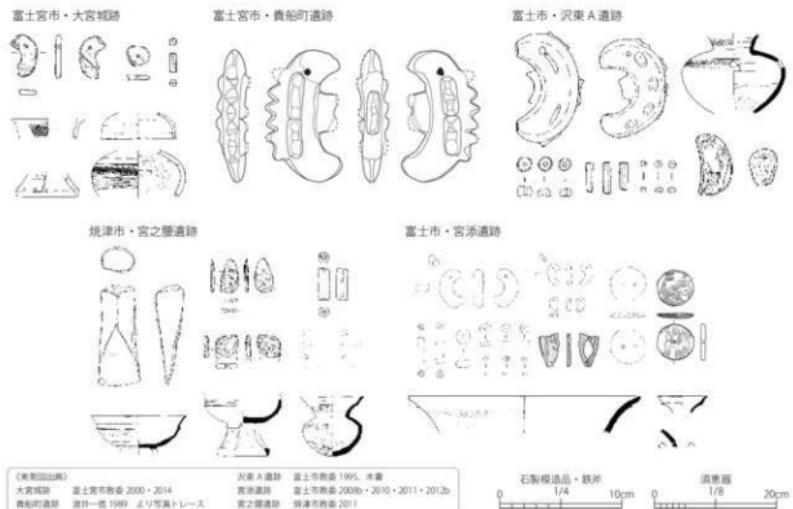
再び、集落が形成される時期の特徴的な遺物として注目されるのが、遠江Ⅰ期の須恵器と石製模造品の存在である。沢東A遺跡第3次調査では、1×2m程度の比較的狭いエリアから子持勾玉3個体をはじめとして勾玉1、有孔円板1、白玉73、管玉3、ガラス小玉2が、TK208型式併行期以前の須恵器と共にまとめて出土している（富士市教育委員会1995）。比較的古い様相を示す須恵器と石製模造品というセット関係は潤井川流域を遡った富士宮市大宮城跡でも確認されているし、また、視点を少し東に移せば、富士市宮添遺跡でも認められる。

富士宮市大宮城跡は、中世城館として知られているが、その築造以前は、古墳時代中期の集落跡であったことが調査によって明らかとなっている（富士市教育委員会2000・2014）。それによると遠江Ⅰ期に遡る須恵器に加えて滑石製勾玉、有孔円板、綠泥片岩製管玉が出土している。中世城館築造に伴い、本来の集落の様相や遺物の多様性は明らかではないが、潤井川にそそぐ神田川の源流でもある湧玉池のそばからの出土というのは、潤井川に注ぐ河川付近での水辺祭祀という観点で、沢東A遺

跡のあり方と共通している。

静岡県内の「初期須恵器」(TG232～TK208)の集成・分析を行った鈴木敏則氏によれば、富士山南麓は「初期須恵器」があまりまとまって出土しない空白地域と評価されている（鈴木1999）。これは、海路によって運搬される須恵器が、その寄港地が、瀬戸川（焼津市）や狩野川（沼津市から伊豆の国市）にあったため、富士山南麓の潤井川流域は畿内を中心とした東国への直接的流通経路上になかったためと理解される。しかし、集落成立期前後における集落では少なからず、その出土を確認することが出来る。鈴木一氏も指摘するように、この段階において倭王權による「伊豆半島南端をめぐる海上交通網の掌握」があったものと考えられ（鈴木一2010）、須恵器や石製模造品などの文物も太平洋沿岸における広域流通のなかで評価されるものである。

駿河、伊豆半島では、これまでにも多くの石製模造品が出土しているが、伊豆半島南部にみる三種ヶ崎遺跡や夷子島遺跡では、その航海の安全を祈願したような祭祀が行われていたものと考えられる（鈴木一前掲）。井戸祭祀や沢東A遺跡、大宮城跡でみる石製模造品を使用した祭祀は広く「水辺祭祀」として表現されているが、治



第101図 集落形成期の須恵器と石製模造品

水を含めその内容・実態は広範囲にわたり、今後詳細に分析していく必要がある。一方で、焼津市宮之腰遺跡SX01に見るような、須恵器と石製模造品とのセットとその集積という姿は、沢東A遺跡にも共通する部分もある。

#### ・潤井川流域の子持勾玉

さて、沢東A遺跡でも出土している子持勾玉の分布を見ると群馬県や栃木県、茨城県など北関東を中心に多く出土している（篠原2002）。近隣では、前述の大宮城跡の西側に所在する貴船町遺跡からも滑石製の子持勾玉が出土している（渡井1989）。沢東A遺跡出土の子持勾玉の石材は群馬県などで多く出土する石材と共通している可能性があり（福村繁氏教示）、一度東国に波及した祭祀形態が再びこの地域における集落成立時に大きく関わったと考えられる。

### 3 最後に

6世紀に入り東勝河において埴輪文化を受容するとき、関東系埴輪を受容することを、単に地理的な近接関係からのみ評価するのではなく、埼玉古墳群など北武藏に誕生した拠点的な核である有力首長など（佐藤2011）を介在した後王権による間接的支配背景なども考慮しなければならないだろう。沢東A遺跡の成立は列島規模の流れで見れば、後王権を中心とした東国支配の流れの中で評価されるが、その一方で東国の影響という異なるベクトルの影響も考えなければならない。当然、これらの現象が社会構造の同一レベルでの現象とは位置づけられないもののその視点を忘れてはいけない。それは、列島を単一のピラミッド構造の中で評価するのではなく、重なり合う複雑な社会構造の中で色々な切り口から理解しなければならないということに他ならない。そのとき、今回報告する沢東A遺跡の調査成果が列島規模の歴史叙述を語る際に重要な位置を占めるようになることを期待している。

（佐藤）

### 参考文献

- 佐藤祐樹 2011「弥生～古墳時代における宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化」『宮添遺跡』IV 富士市教育委員会
- 篠原祐一 2002「子持勾玉小考」『子持勾玉資料集成 付録』國學院大學日本文化研究所
- 鈴木一有 2010「古墳時代の東海における太平洋沿岸交流の隆盛」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系
- 鈴木敏則 1999「静岡県内における初期須恵器の流通とその背景」『静岡県考古学研究』No.31 静岡県考古学会
- 富士市教育委員会 1995『沢東A遺跡 富士不燃建材㈱工場増設に伴う埋蔵文化財第3次発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2008a『平成17・18年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2008b『宮添遺跡I』
- 富士市教育委員会 2010『宮添遺跡II』
- 富士市教育委員会 2011『宮添遺跡III』
- 富士市教育委員会 2012a『高徳坊遺跡』『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市埋蔵文化財調査報告 第51集
- 富士市教育委員会 2012b『宮添遺跡V』『富士市埋蔵文化財調査報告 第52集』
- 富士市教育委員会 2012c『富士市内遺跡発掘調査報告書 一平成11・12年度』『富士市埋蔵文化財調査報告 第53集』
- 富士宮市教育委員会 2000『元富士大宮司館跡』富士宮市文化財調査報告書 第24集
- 富士宮市教育委員会 2014『元富士大宮司館跡II』富士宮市文化財調査報告書 第48集
- 焼津市教育委員会 2011『宮之腰遺跡III』焼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 20
- 渡井一信 1989「富士宮市貴船町遺跡出土の子持勾玉について」『月の輪』第4号 富士宮市郷土史同好会



## 付 表

遺構概要一覧表  
出土遺物觀察表

※ 平面形・時代等の（ ）内は推定である。  
口径・底径の（ ）内は推定値である。  
器高の（ ）内は残存値である。  
残存率は図示中の残存率を示した。











件名	部類	通名	種別	断面	口径	底径	高さ	残存率	参考	断面	内面	外見	当面	色調
第 86 回 2 PL-32	PL-32	P0198	上部環	円筒	(2.8)	-	-	-	赤茶	2.5YR4/6 (赤)	2.5YR4/6 (赤)			
第 86 回 3 PL-32	PL-32	P0124	上部環	高円	-	(2.6)	-	-	良好	-	SYR6/6 (赤)	SYR6/6 (赤)		
第 88 回 1 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	(10.5)	(2.8)	-	-	良好	25%	反転鏡面	SY5/1 (赤)	SY5/1 (赤)	
第 88 回 2 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	(12.7)	(3.4)	(10.2)	-	良好	25%	反転鏡面	2.5Y6/1 (赤)	2.5Y6/1 (赤)	
第 88 回 3 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	(12.7)	(3.2)	(10.0)	-	良好	25%	反転鏡面	2.5Y6/1 (赤)	2.5Y6/1 (赤)	
第 88 回 4 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	(12.8)	(4.0)	(9.8)	-	良好	55%	反転鏡面	SY6/1 (赤)	SY7/1 (赤)	
第 88 回 5 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	(13.8)	(3.0)	(11.4)	-	良好	65%	反転鏡面	2.5Y6/1 (赤)	2.5Y6/1 (赤)	
第 88 回 6 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	(14.1)	(3.8)	(10.4)	-	良好	40%	反転鏡面	SY5/1 (赤)	SY5/1 (赤)	
第 88 回 7 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	(16.3)	(5.1)	-	-	良好	20%	反転鏡面	2.5Y6/1 (赤)	2.5Y6/1 (赤)	
第 88 回 8 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	-	(3.0)	-	-	良好	15%	反転鏡面	SYW/1 (赤)	SYW/1 (赤)	
第 88 回 9 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	-	(10.0)	-	-	良好	-	-	NW (赤)	NW (赤)	
第 88 回 10 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	环	-	(1.6)	-	-	良好	-	-	NA/ (赤)	NA/ (赤)	
第 88 回 11 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	ハサウ	-	(4.2)	-	-	良好	50%	一部反転鏡面	2.5Y6/3 (赤)	2.5Y6/1 (赤)	
第 88 回 12 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	(0.0)	(4.5)	-	-	良好	40%	反転鏡面	2.5Y7/2 (赤)	2.5Y7/2 (赤)	
第 88 回 13 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	真円	-	(6.5)	(9.7)	-	良好	20%	反転鏡面	NW (赤)	NW (赤)	
第 88 回 14 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	-	(6.1)	(6.6)	-	良好	25%	反転鏡面	NS/ (赤)	NS/ (赤)	
第 88 回 15 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	真円	-	(14.0)	(8.0)	-	良好	20%	反転鏡面	SY7/1 (赤)	SY7/1 (赤)	
第 88 回 16 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	(14.7)	(3.2)	-	-	良好	20%	反転鏡面	10YR6/3 (C.5.赤)	10YR5/2 (赤)	
第 88 回 17 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	(12.3)	(3.8)	-	-	良好	35%	反転鏡面	2.5YH6/6 (赤)	10YR5/4 (C.5.赤)	
第 88 回 18 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	-	(6.2)	-	-	良好	-	-	SYW/4 (C.5.赤)	SYW/4 (C.5.赤)	
第 88 回 19 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	(13.8)	4.7	(4.7)	-	良好	40%	反転鏡面	SYH6/6 (赤)	2.5YH6/6 (赤)	
第 88 回 20 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	(12.7)	(3.9)	-	-	良好	15%	反転鏡面, 黒色地	2.5Y7/1 (赤)	2.5Y7/2 (赤)	
第 88 回 21 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	(6.5)	(5.8)	-	-	良好	20%	反転鏡面	10YR5/4 (C.5.赤)	2.5Y5/4 (C.5.赤)	
第 88 回 22 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	(11.5)	(6.0)	-	-	良好	30%	反転鏡面	2.5Y6/4 (C.5.赤)	10YR5/2 (赤)	
第 88 回 23 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	高年	-	(5.7)	(11.8)	-	良好	25%	反転鏡面	10YR5/3 (C.5.赤)	10YR4/4 (C.5.赤)	
第 88 回 24 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	高年	-	(4.3)	(10.8)	-	良好	30%	反転鏡面	2.5Y8/4 (赤)	2.5Y8/4 (赤)	
第 88 回 25 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	高年	-	(4.2)	-	-	良好	-	-	2.5YH7/4 (C.5.赤)	2.5YH7/4 (C.5.赤)	
第 88 回 26 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	真円	-	(3.5)	-	-	良好	80%	-	2.5YR7/6 (C.5.赤)	2.5YR7/6 (C.5.赤)	
第 88 回 27 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	(9.7)	(3.3)	-	-	良好	20%	反転鏡面	SYR6/6 (C.5.赤)	2.5YR4/4 (C.5.赤)	
第 88 回 28 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	-	(3.9)	-	-	良好	25%	反転鏡面	SYR4/4 (C.5.赤)	SYR4/4 (C.5.赤)	
第 88 回 29 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	-	(5.9)	-	-	良好	-	-	2.5YR5/6 (C.5.赤)	2.5YR5/4 (C.5.赤)	
第 88 回 30 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	-	(3.6)	-	-	良好	15%	反転鏡面	10YR7/4 (C.5.赤)	10YR7/4 (C.5.赤)	
第 88 回 31 PL-32	PL-32	古合環	羽根環	束	-	4.1	5.0	-	良好	50%	一部反転鏡面	SYR4/4 (C.5.赤)	SYR4/4 (C.5.赤)	
第 88 回 32 PL-33	PL-33	古合環	羽根環	束	-	(10.9)	(4.0)	-	良好	15%	反転鏡面	2.5YR5/6 (赤)	2.5YR5/6 (赤)	
第 88 回 33 PL-33	PL-33	古合環	羽根環	束	-	(4.5)	-	-	良好	-	-	2.5YH6/6 (赤)	2.5YH6/6 (赤)	
第 88 回 34 PL-33	PL-33	古合環	羽根環	束	(15.2)	(3.5)	-	-	良好	20%	反転鏡面	2.5YR5/4 (C.5.赤)	2.5YR5/4 (C.5.赤)	
第 88 回 35 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	束	(18.0)	(11.4)	-	-	良好	20%	反転鏡面	10YR7/4 (C.5.赤)	10YR7/4 (C.5.赤)	
第 88 回 36 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	束	-	(4.9)	-	-	良好	-	-	10YR7/5 (C.5.赤)	SYR6/6 (赤)	
第 88 回 37 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	束	(19.0)	(7.2)	-	-	良好	35%	反転鏡面	2.5YH5/4 (C.5.赤)	2.5YH5/4 (C.5.赤)	
第 88 回 38 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	小皿	(7.4)	(1.5)	(4.0)	-	良好	反転鏡面	2.5Y4/2 (C.5.赤)	2.5Y4/2 (C.5.赤)		
第 88 回 39 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	小皿	-	(7.8)	(3.5)	-	良好	25%	反転鏡面	SY7/2 (赤)	SY7/2 (赤)	
第 88 回 40 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	小皿	(2.6)	(6.6)	(6.6)	-	良好	60%	反転鏡面	SYR6/4 (C.5.赤)	2.5YR4/5 (C.5.赤)	
第 88 回 41 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	小皿	(10.1)	7.2	(4.2)	-	良好	30%	反転鏡面	SYR1/1 (赤)	SYR1/1 (赤)	
第 88 回 42 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	小皿	(7.7)	(3.4)	-	-	良好	20%	反転鏡面	2.5YR3/4 (赤)	2.5YR4/4 (赤)	
第 88 回 43 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	小皿	-	(2.8)	-	-	良好	-	-	2.5YR7/3 (赤)	2.5YR7/1 (赤)	
第 88 回 44 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	小皿	-	(3.9)	-	-	良好	-	-	2.5Y2/1 (赤)	2.5Y2/1 (赤)	
第 88 回 45 PL-34	PL-34	古合環	羽根環	小皿	-	(2.9)	(21.3)	-	良好	25%	反転鏡面	2.5Y5/3 (赤)	10YR5/2 (赤)	

## 土製品

件名	部類	通名	種別	断面	H.2 (cm)	W.2 (cm)	厚さ (cm)	残存率	内面	外見	外見
第 88 回 46 PL-34	PL-34	古合環	土製品	レンゲンの仕切	CL.9	1.2	-	15%	10YR7/3 (C.5.赤)	2.5YR5/6 (赤)	
第 88 回 47 PL-34	PL-34	古合環	土製品	?	(7.9)	(1.0)	-	-	SYR5/4 (C.5.赤)	SYR6/4 (C.5.赤)	
第 88 回 48 PL-34	PL-34	古合環	土製品	?	3.7	1.45	0.5	100%	-	SYR3/2 (暗赤)	

## 石製品

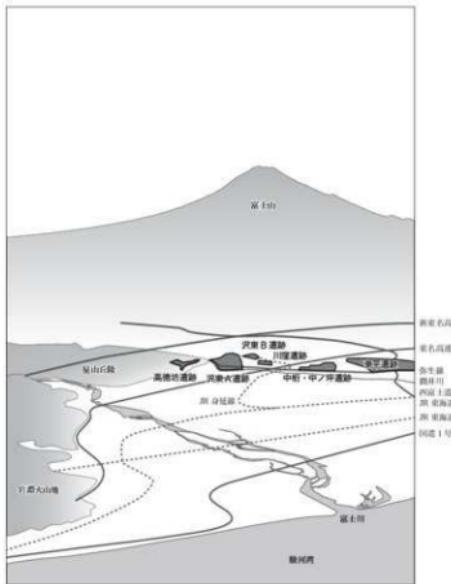
件名	部類	通名	種別	断面	L.2 (cm)	W.2 (cm)	厚さ (cm)	残存率
第 88 回 7 PL-19	PL-19	S8002	石製品	圓盤	0.35	4.05	3.0	77.5
第 88 回 35 PL-25	PL-25	S813	石製品	?	5.15	3.05	1.05	21.57
第 88 回 36 PL-25	PL-25	S816	石製品	圓盤	6.8	4.3	2.5	60.45
第 88 回 37 PL-34	PL-34	古合環	石製品	?	(4.7)	4.75	2.3	-



写真図版

PLATE

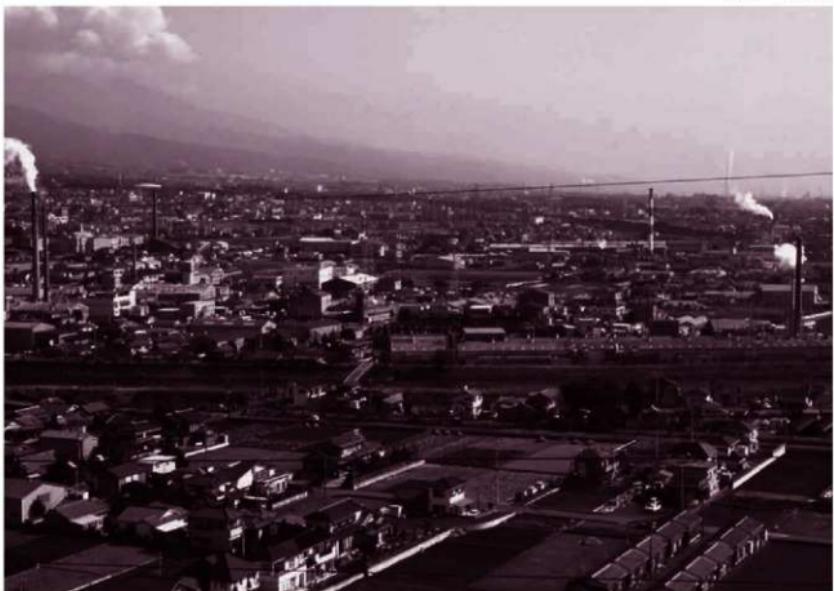




【写真図版表紙】 桥河崎上空から望む河東A道路と富士山

河東A道路は、潤井川と凡夫川が合流する地点の東岸、大瀬崎付地西側先端部の緩やかな丘陵上に位置する。

駿河湾から富士山南西麓（現在の富士宮市域）へ通じる水路である潤井川と、東西に広がる道路を結ぶ陸路が交差する場所である。



1. 沢東A遺跡を西から望む



2. 試掘調査 2 Tr-SX01



3. 試掘調査 3Tr 遺物検出状況



4. 試掘調査 4 Tr-SB3 遺物出土状況 (Tr-7)



5. 試掘調査 5Tr 遺物出土状況 (Tr-8)

PL.2 調査



1. SB01



2. SB01 カマド



3. SB01 遺物出土状況



4. SB02



5. SB02 カマド



6. SB02 遺物出土状況



7. SB03



8. SB03 カマド



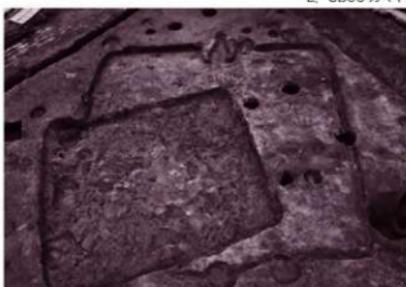
1. SB05



2. SB05 カマド



3. SB04

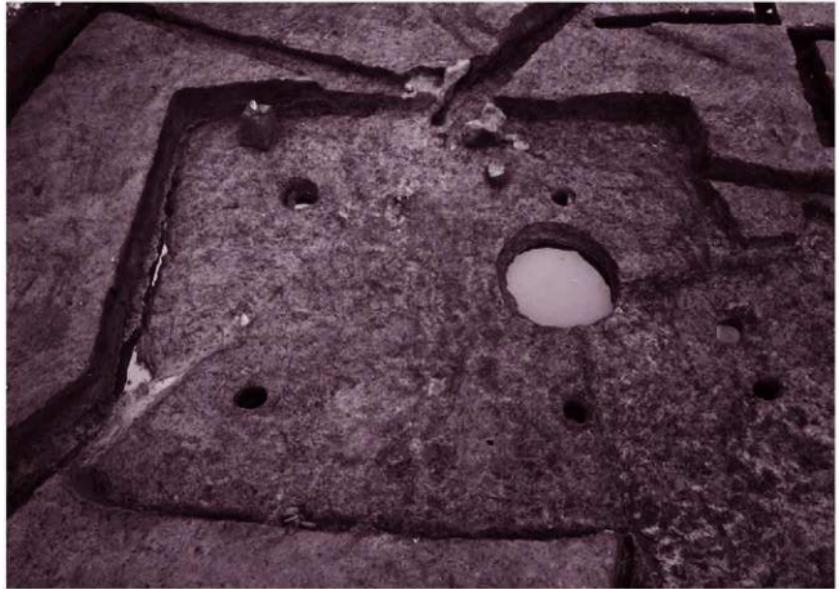


4. SB06



5. SB06 カマド

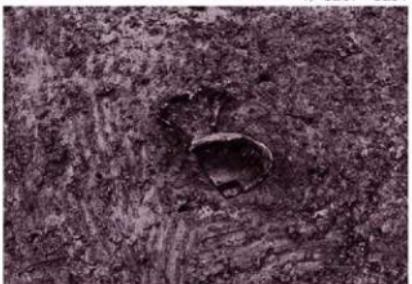
PL.4 調査



1. SB07・SE01



2. SB07 カマド



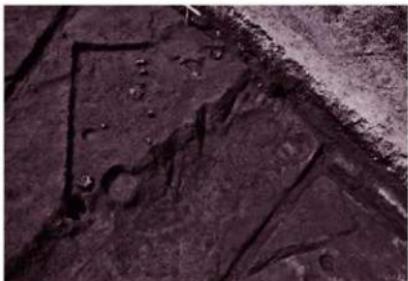
3. SB07 遺物出土状況 (SB07-4)



4. SB10



5. SB10 カマド



1. SB09



2. SB09 カマド



3. SB09 遺物出土状況 (SB09-10, 14)



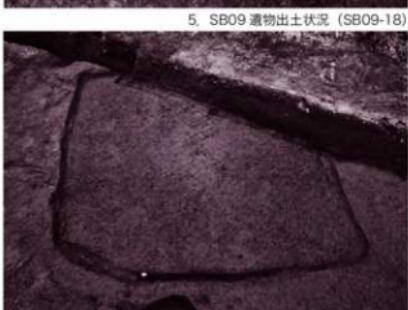
4. SB09 遺物出土状況 (SB09-17)



5. SB09 遺物出土状況 (SB09-18)



6. SB09 遺物出土状況 (SB09-16)



7. SB11

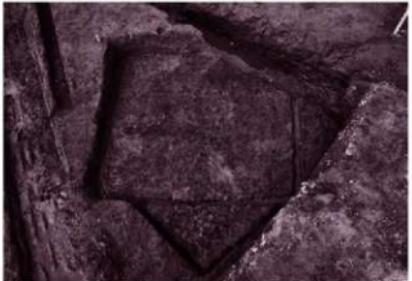


8. SB11 遺物出土状況 (SB11-2)

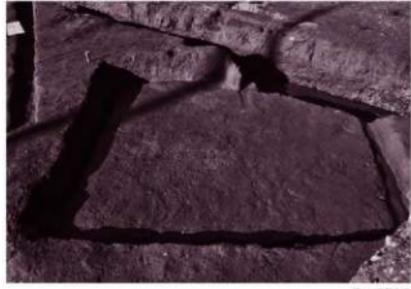
PL.6 調査



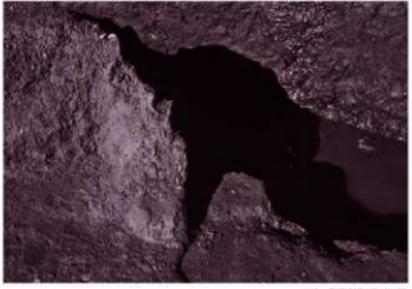
1. SB08



2. SB12・SB16



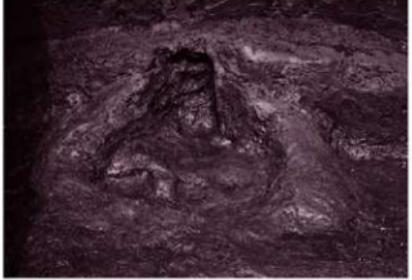
3. SB16



4. SB16 カマド



5. SB13



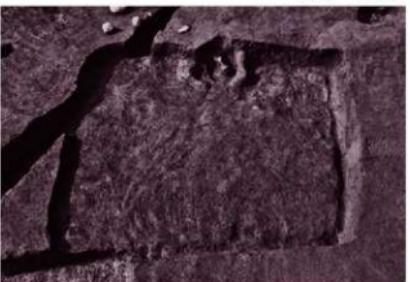
6. SB13 カマド



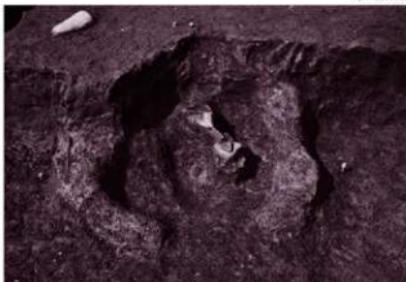
7. SB13 遺物出土状況 (SB13-29)



1. SB15



2. SB18



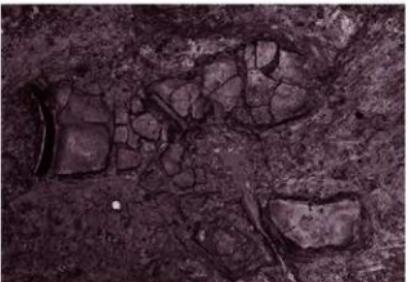
3. SB18 カマド



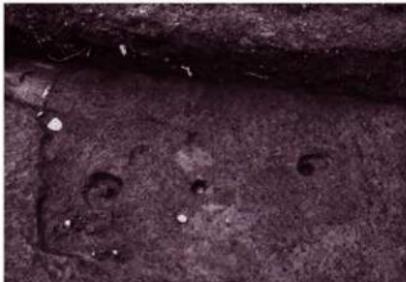
4. SB20



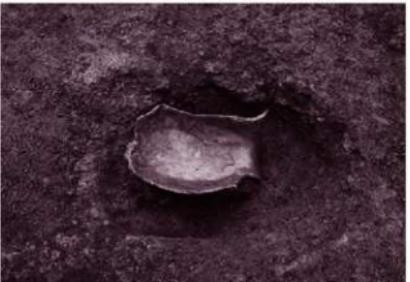
5. SB20 カマド



6. SB20 遺物出土状況 (SB20-3, 5)

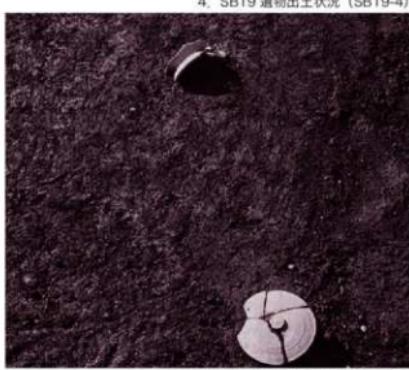
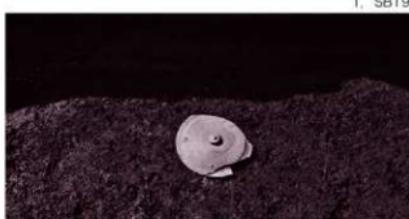
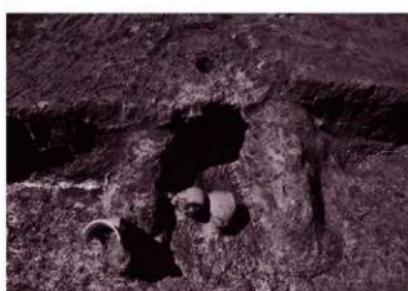


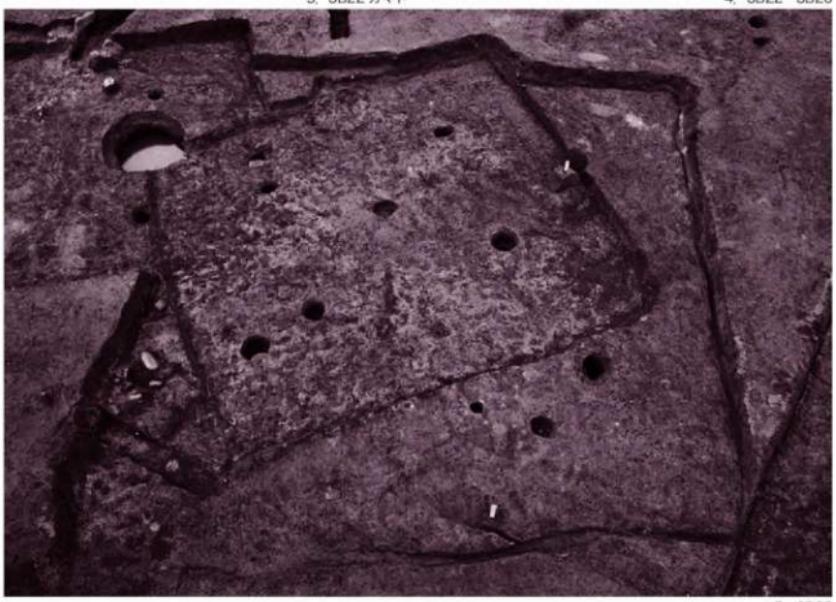
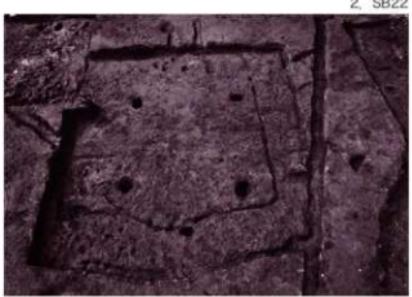
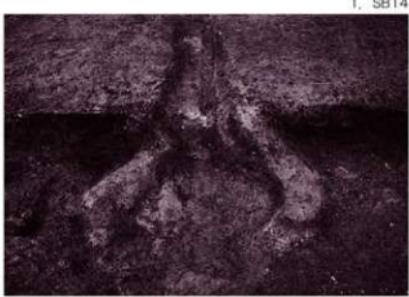
7. SB21



8. SB21 内遺物出土土坑 (SB21-3)

PL.8 調査

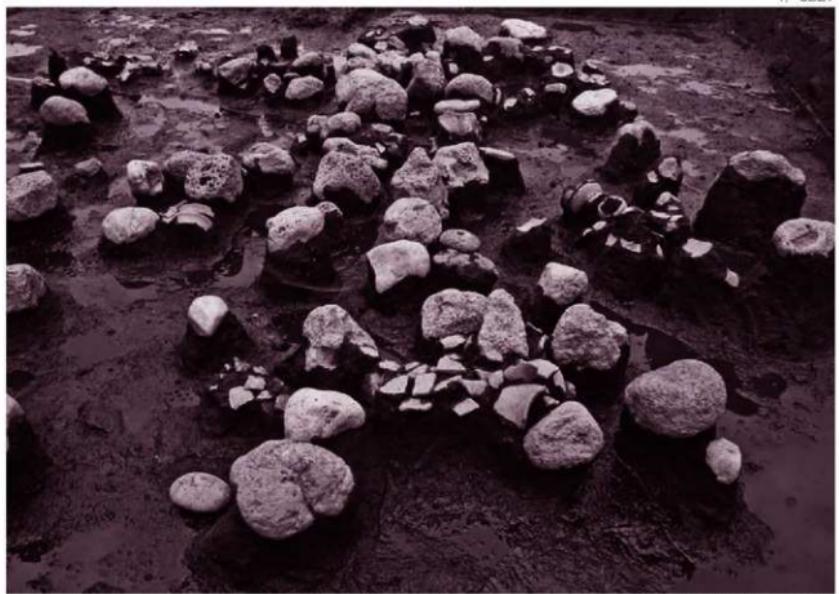




PL. 10 調査



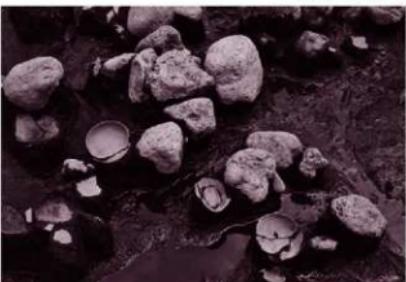
1. SB27



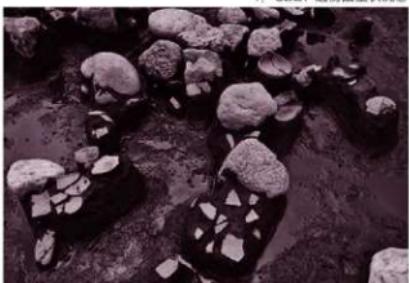
2. SB27 遺物出土状況(①)



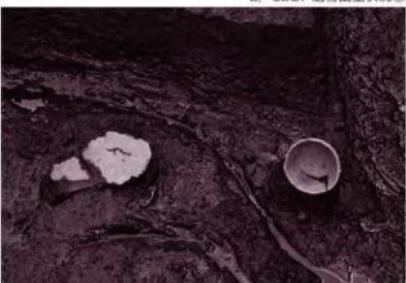
1. SB27 遺物出土状況②



2. SB27 遺物出土状況③



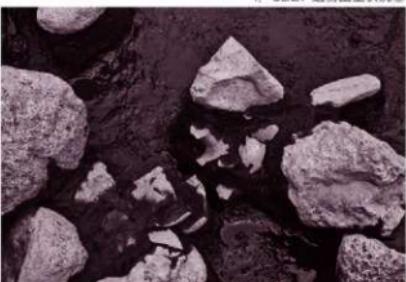
3. SB27 遺物出土状況④



4. SB27 遺物出土状況⑤



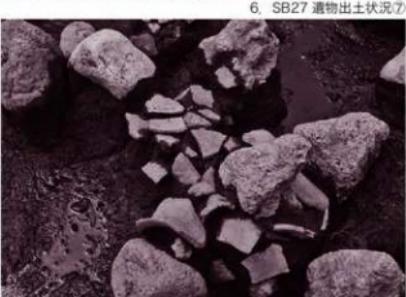
5. SB27 遺物出土状況⑥



6. SB27 遺物出土状況⑦



7. SB27 遺物出土状況⑧

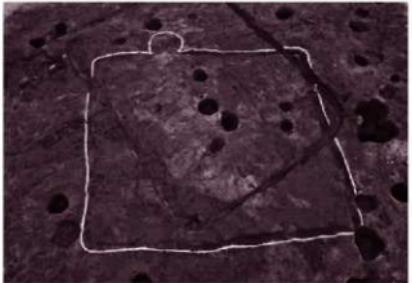


8. SB27 遺物出土状況⑨

PL.12 調査



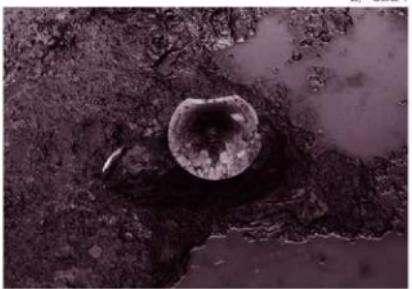
1. SB23



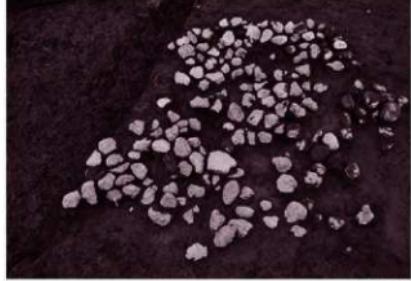
2. SB24



3. SB28



4. SB28 遺物出土状況 (SB28-2)



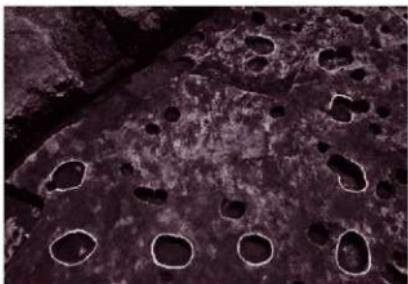
5. SS01



6. SS01 南北セクション



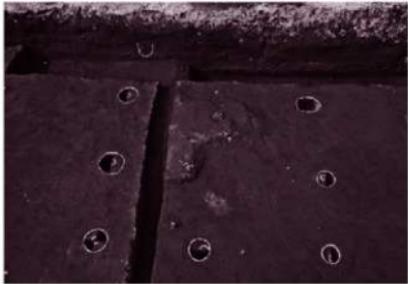
7. SS01



1. SH01



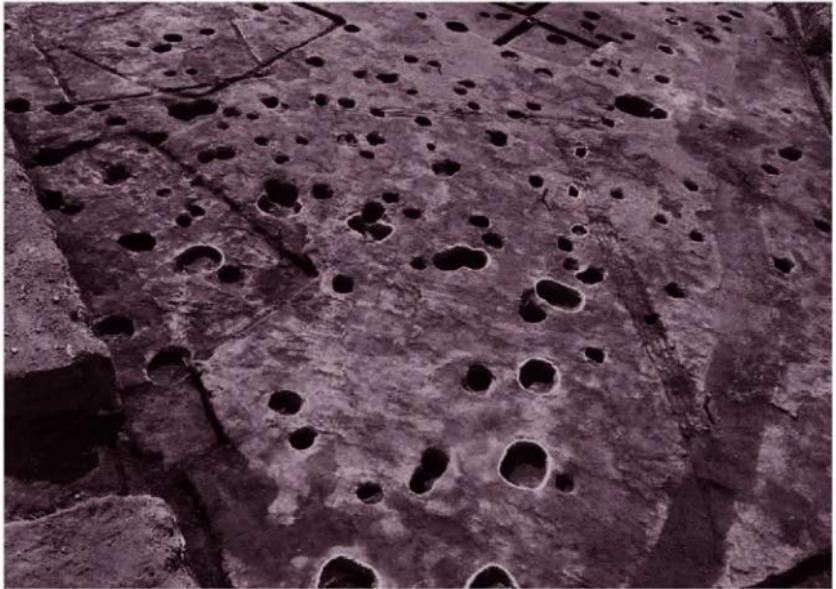
2. SH02



3. SH03



4. Pit007 桁残存状況



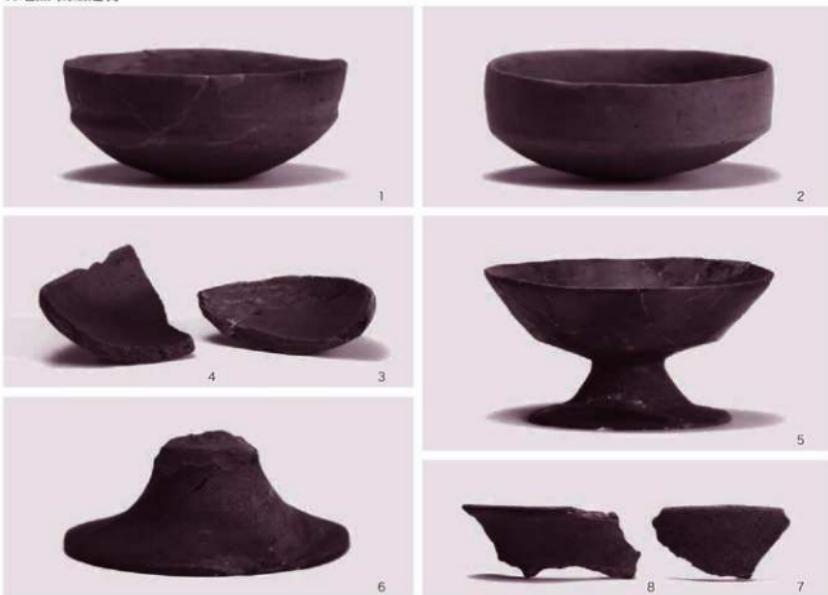
5. 本調査 I 地区ビット検出全景 (南東から)

PL. 14 出土遺物

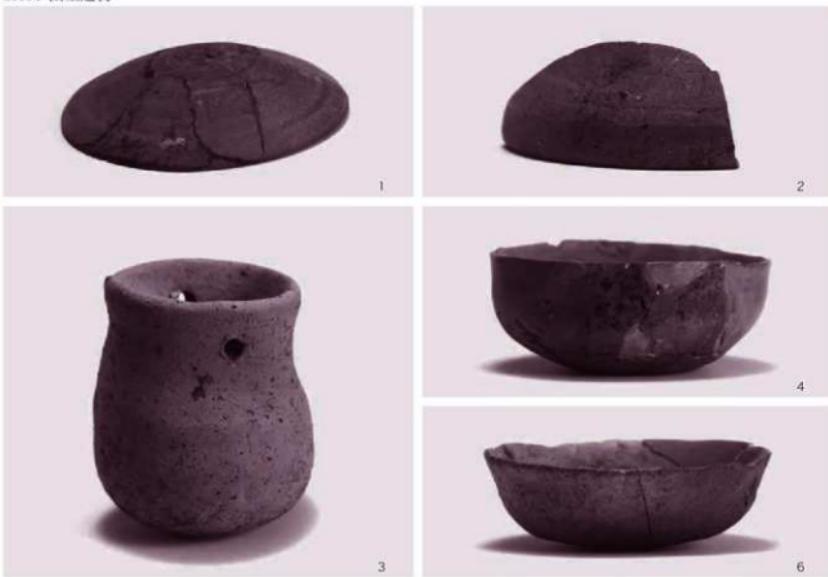
SB27 出土遺物集合



A地点 出土遺物



SX01 出土遺物



PL. 16 出土遺物

SX01 出土遺物



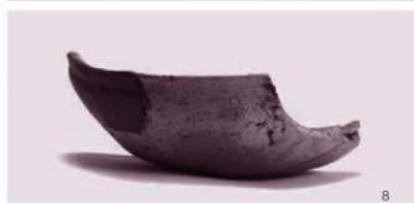
5



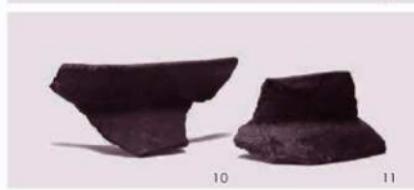
7



9



8



10

11

試掘トレンチ 出土遺物



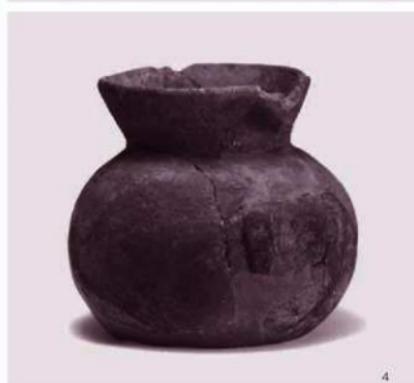
1



2



3

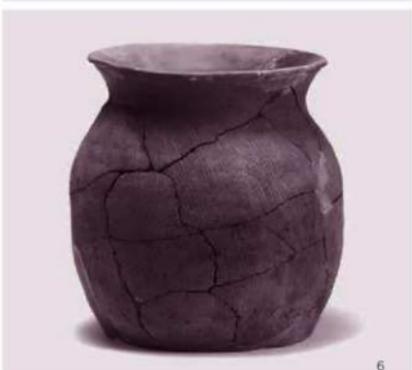


4

試掘トレンチ 出土遺物



5



6



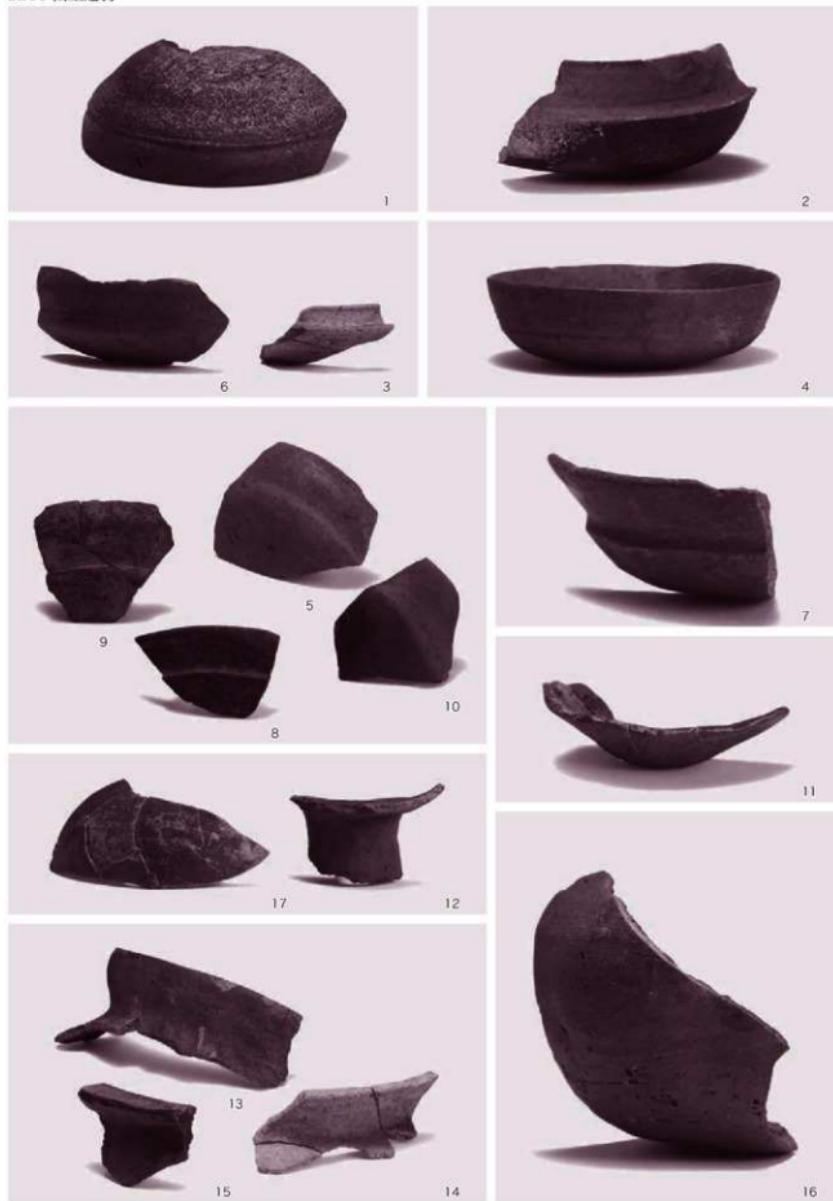
7



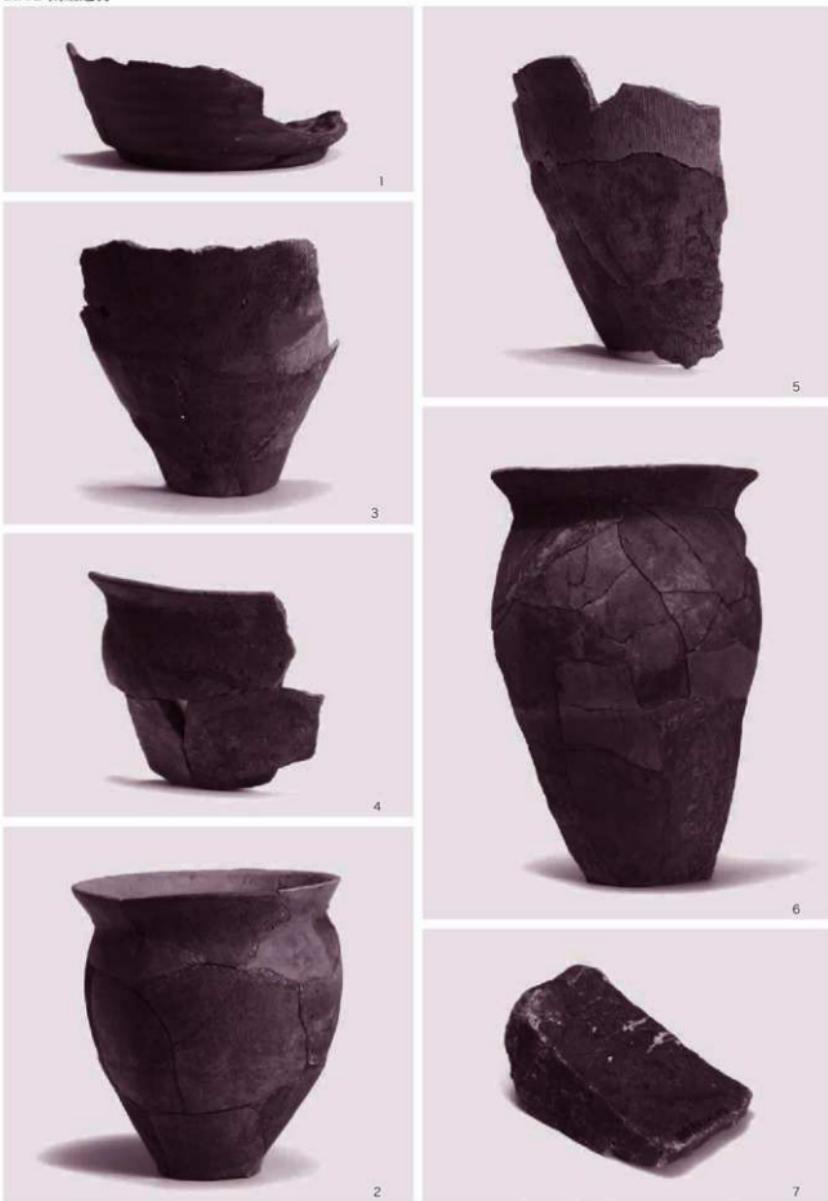
8

PL. 18 出土遺物

SB01 出土遺物



SB02 出土遺物



PL.20 出土遺物

SB04 出土遺物



SB05 出土遺物



2

1

SB06 出土遺物

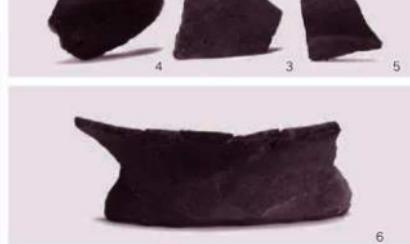


1

SB08 出土遺物



1



6

SB07 出土遺物



3



7



8

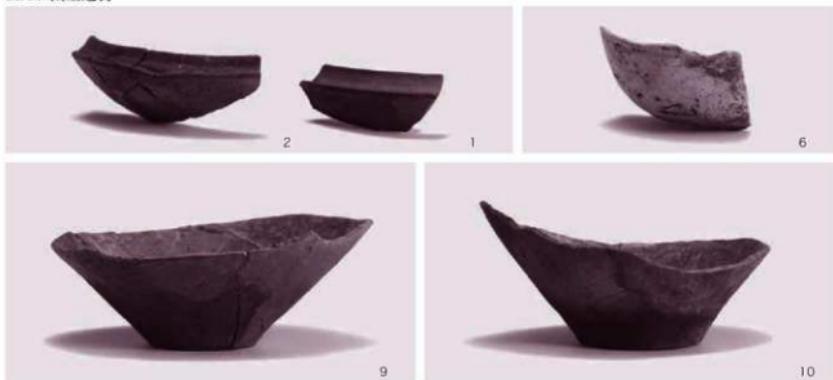


4



5

SB07 出土遺物



SB09 出土遺物



PL.22 出土遺物

SB09 出土遺物



15



16

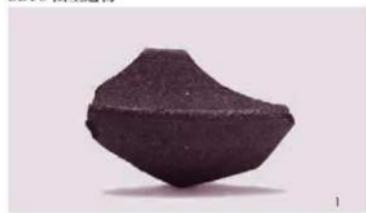


18



17

SB10 出土遺物



1



4



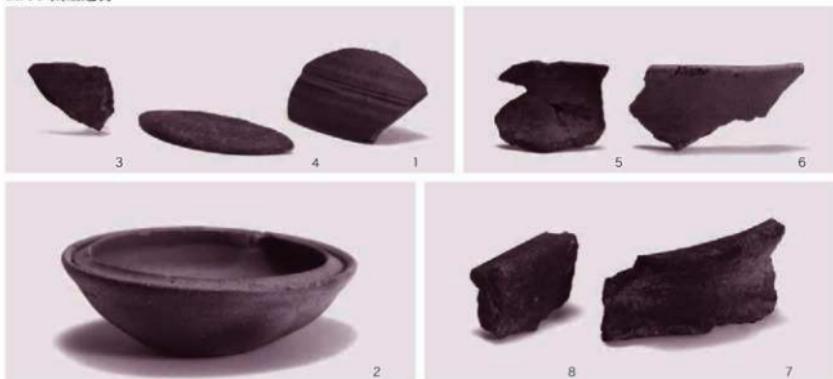
2



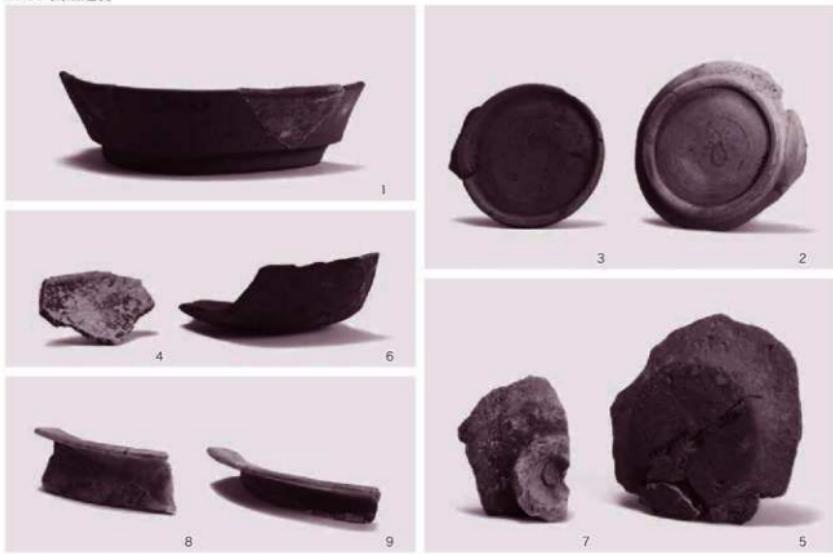
5

3

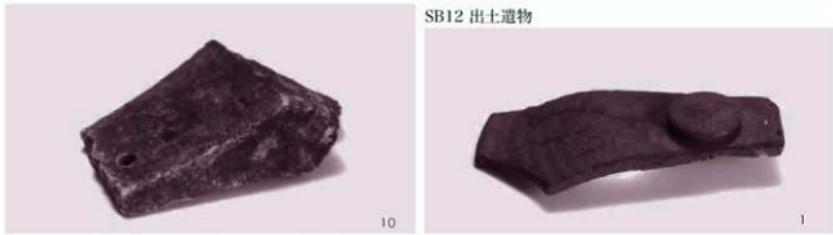
SB11 出土遺物



SB16 出土遺物



SB12 出土遺物

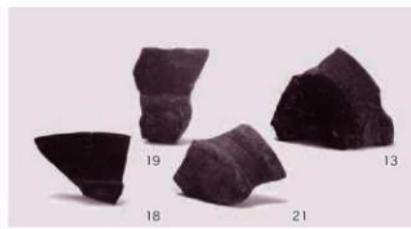


PL.24 出土遺物

SB13 出土遺物



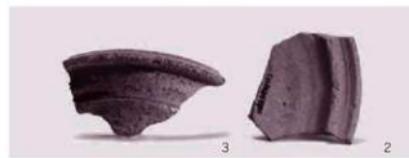
1



18

21

13



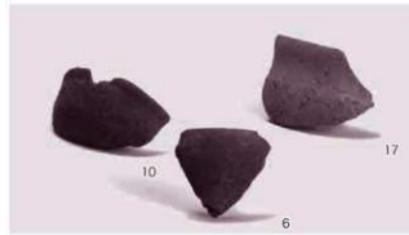
3

2



4

5



6

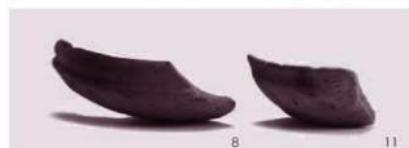
10

17



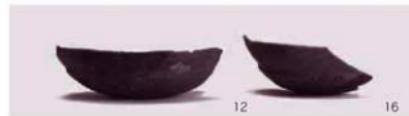
7

9



8

11



12

16



14



22

15

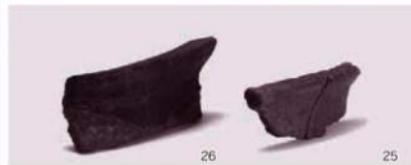


20



23

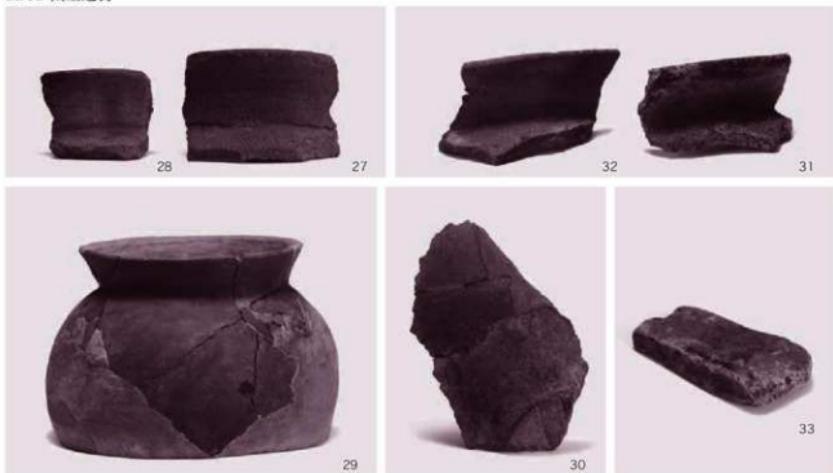
24



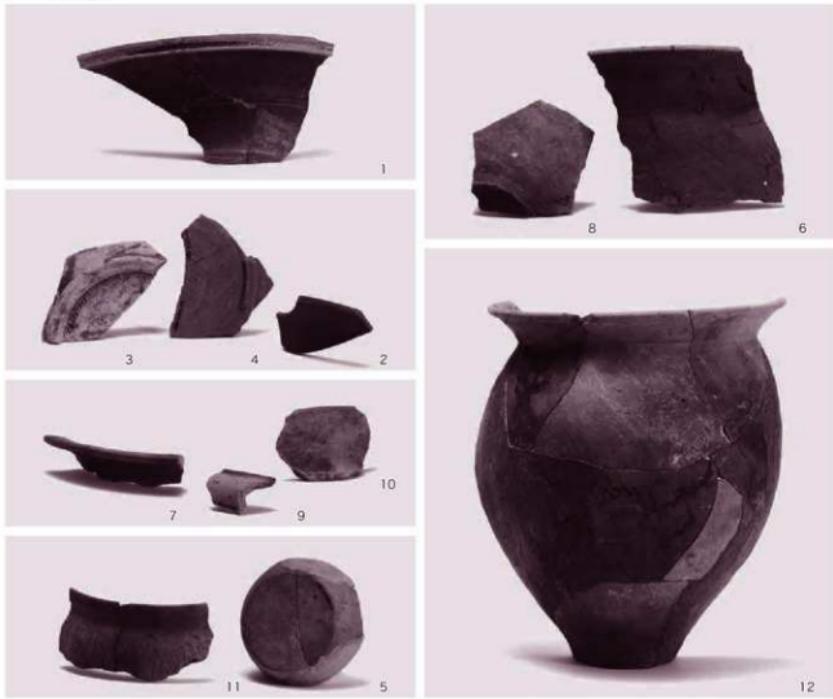
26

25

SB13 出土遺物

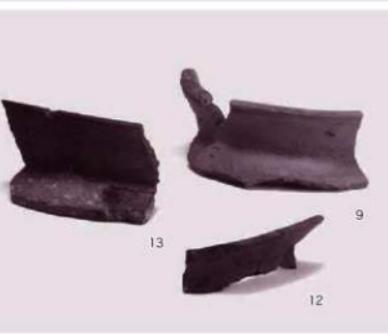
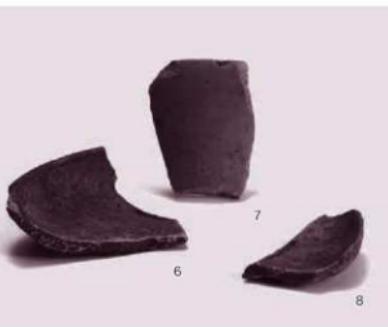


SB18 出土遺物

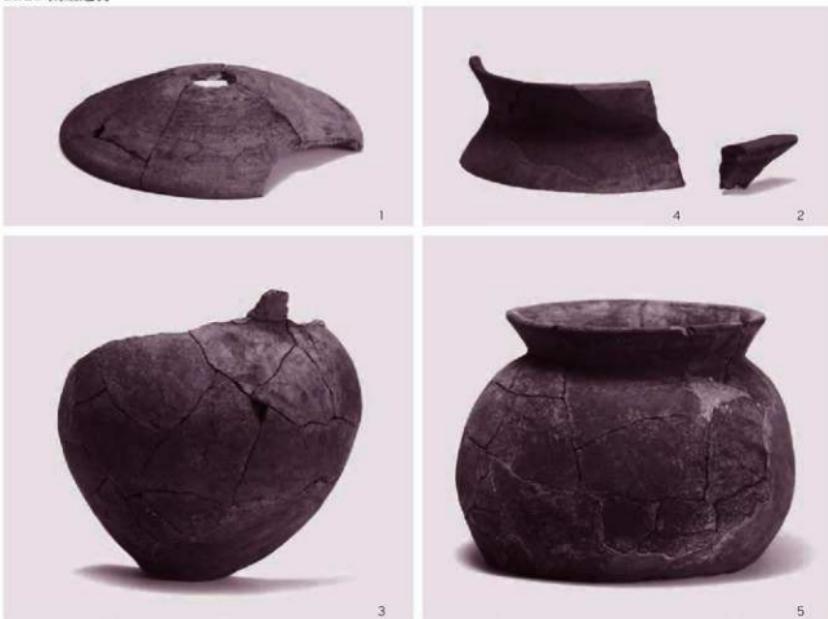


PL.26 出土遺物

SB19 出土遺物



SB20 出土遺物



SB21 出土遺物

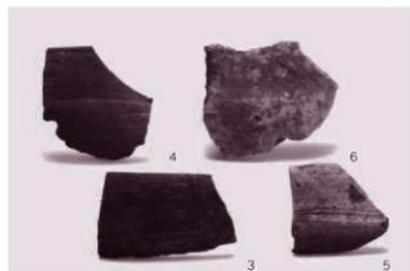
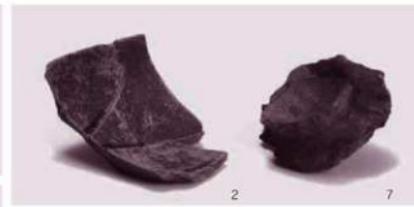
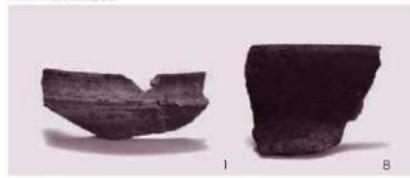


PL.28 出土遺物

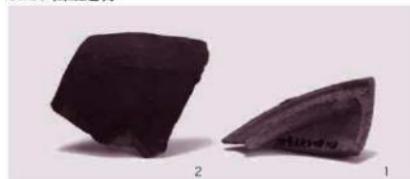
SB21 出土遺物



SB22 出土遺物



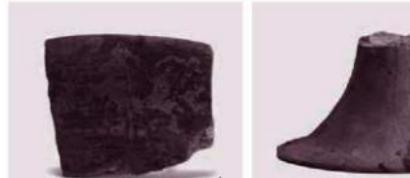
SB25 出土遺物



SB26 出土遺物



SB28 出土遺物



SB27 出土遺物



PL.30 出土遺物

SB27 出土遺物



10



15



11



16



12



17



18



20



13



19



14



21

SB27 出土遺物



PL.32 出土遺物

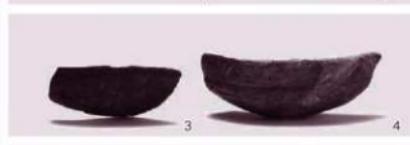
SE01 出土遺物



SD01 出土遺物



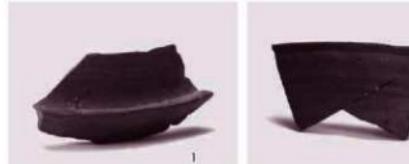
SS01 出土遺物



ピット出土遺物



包含層 出土遺物

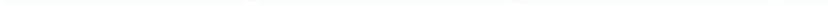
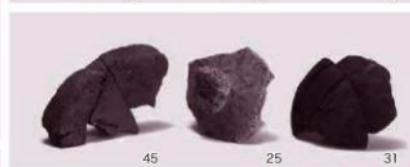
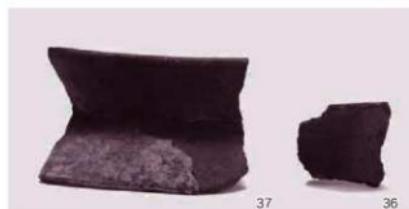
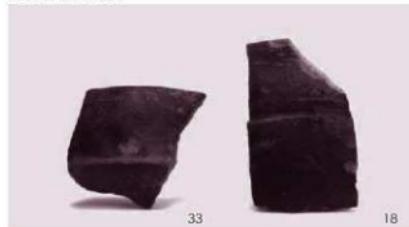


## 包含層 出土遺物



PL.34 出土遺物

包含層 出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	さわひがしぇーいせき だいいちじ							
書名	沢東A遺跡 第1次							
副書名	遊技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第56集							
編集者名	若林美希（編）・佐藤祐樹							
編集機関	富士市教育委員会（担当課：文化振興課）							
所在地	〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地 TEL 0545-55-2875							
発行年月日	平成26年3月31日							

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	地区名	調査期間	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因				
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号										
さわひがしぇー いせき	静岡県 富士市 久沢	しづおかけん ふじし くざわ	22210	33	35°10'52"'	138°38'42"'	1988.1.205 / 1988.1.220	1,320	試掘調査				
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項					
沢東A遺跡	集落跡	古墳時代～奈良時代		堅穴建物跡 27 掘立柱建物跡 3 集石遺構 1 井戸跡 1 溝状遺構 2 土坑、ピット		土師器 須恵器							

富士市久沢に所在する沢東A遺跡は、富士山南麓に広がる大湖層状地の西側先端部、緩やかな丘陵上に立地する古墳時代中期～奈良時代の集落跡である。富士山西麓から駿河湾へそぞく潤井川の東岸に位置し、太平洋沿岸交流により多くの文物や情報を掌握していた拠点的な集落と考えられる。

過去の調査では、堅穴建物跡や掘立柱建物跡とともに、子持勾玉・石製模造品といった祭祀遺物が検出されている。この地点は潤井川と凡夫川が合流する箇所の東岸であり、水源・水運に恵まれると同時に、河川の氾濫による被害を受ける土地であったために、水辺における祭祀の存在が想定される。

### 要 約

今回報告する第1次調査地点の調査では、5世紀後半から9世紀初頭までに位置づけられる堅穴建物跡27軒をはじめとして、3棟の掘立柱建物跡、集石遺構、井戸跡などが検出された。

明確な祭祀関連遺構は確認されなかったが、ヘマタイトが詰まった小壺(SB07)や、赤彩が施された土器(SB27)、穿孔された壺の底部片(SB21)など、何らかの祭祀行為に関わるとみられる遺物が少量ではあるが出土している。

また、SB27出土遺物は、TK208型式餅形間に位置づけられる須恵器大型ハソウを作り、当地における須恵器流入期の良好な一括資料である。

富士市埋蔵文化財調査報告 第56集

## 沢東A 遺跡 第1次

遊技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成26年3月31日

編集・発行 富士市教育委員会

〒417-8601 静岡県富士市永田町一丁目100番地

TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789

E-mail:kky-bunkashinkou@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本 文光堂印刷株式会社

〒410-0871 静岡県沼津市西間門68番地の1

(富士市行政資料登録番号 25-53)